

# 文京遺跡

1976

愛媛大學  
松山市教育委員会

# 文 京 遺 跡

1976

愛媛大學  
松山市教育委員会

## はじめに

このたび、愛媛大学工学部2号館の増築に関連し、予定地付近には考古学的遺跡の埋蔵されている可能性があったので、松山市に申請したところ、同市教育委員会は本学の西田栄元教授らと共に、昭和50年8月を中心に発掘調査をしてくださった。

調査の結果は特にみのり多いというほどでなかったかもしれないが、弥生中期の住居址と土器、石器、土製紡錘車や分銅形土製品など特殊の文化遺物も出土を見た。

これらの整理もこのほど大体終り、それによって、当遺跡の性格やこれが当地方でもつ意義も明るさを増すことになったと思われる。

そこでこの発掘調査の結果を記録保存するため、ここに報告し公表する。

炎暑下、調査に当たり協力された方々に、深甚の謝意を表したい。

昭和51年3月

愛媛大学長

芦田 譲治

## 例　　言

1 本書は、松山市文京町3の愛媛大学工学部校舎の増築工事に伴う、埋蔵文化財の発掘調査報告書である。†

2 発掘調査体制は次のとおりである。

調査主体	松山市教育委員会	調査主任
教育長	関谷勝良	森 光晴（松山市教育委員会・指導主事）
〃 次長	竹田 恵	調査員
社会教育課長	谷川敏一	大山正風（松山市立南中学校教諭 松山市文化財専門委員）
〃 補佐	岸 郁男	調査補助員
〃 文化係長	石丸光彦	西尾幸則（松山市教育委員会・主事）
主任	仙波 弘	池田 学
調査依頼者	愛媛大学	松村 淳
現場保全	鹿島建設株式会社	越智武志
顧問		
西田 栄（愛媛県文化財専門委員）		

3 協力者名簿

沖野新一（愛媛大）	細川洋一（早稲田大）	本山道男（大東文化大）
仙波五月（東雲短大）	仙波千春（東雲短大）	上澤田雅文（千葉工大）
岡野徳広（愛媛大）		

4 発掘調査にあたっては、終始協力をいたいた鹿島建設株式会社に感謝すると共に、ご協力していただいたかたがたに感謝申しあげます。

5 本書の作成にあたって、遺物整理は池田学、松村淳があたり、遺跡・遺物の写真撮影は主に西尾幸則が担当した。本書の報筆及び実測・製図は、森光晴と大山正風が担当をした。なお本書の「まとめ」は西田栄氏の執筆による。

6 出土品は、すべて松山市教育委員会が保管にあたり、古照資料館に収蔵陳列して一般に公開している。

## 本文目次

第Ⅰ章 遺跡と環境	1
1 遺跡の位置	1
2 遺跡をとりまく自然的環境	2
3 歴史的環境	2
第Ⅱ章 発掘調査のあらまし	4
1 調査に至る経過	4
2 発掘日誌	4
3 遺跡の地層	6
第Ⅲ章 遺構	8
1 住居址	8
2 掘立柱建造物	11
3 溝状造構	12
第Ⅳ章 各区の遺構と遺物	13
1 1区の遺構と遺物	13
2 2区	16
3 3区	18
4 4区	20
5 5区	23
6 6区	28
7 石器とその他の遺物	33
第Ⅴ章 土器分類	37
第Ⅵ章 土器の相対年代	43
まとめ	63

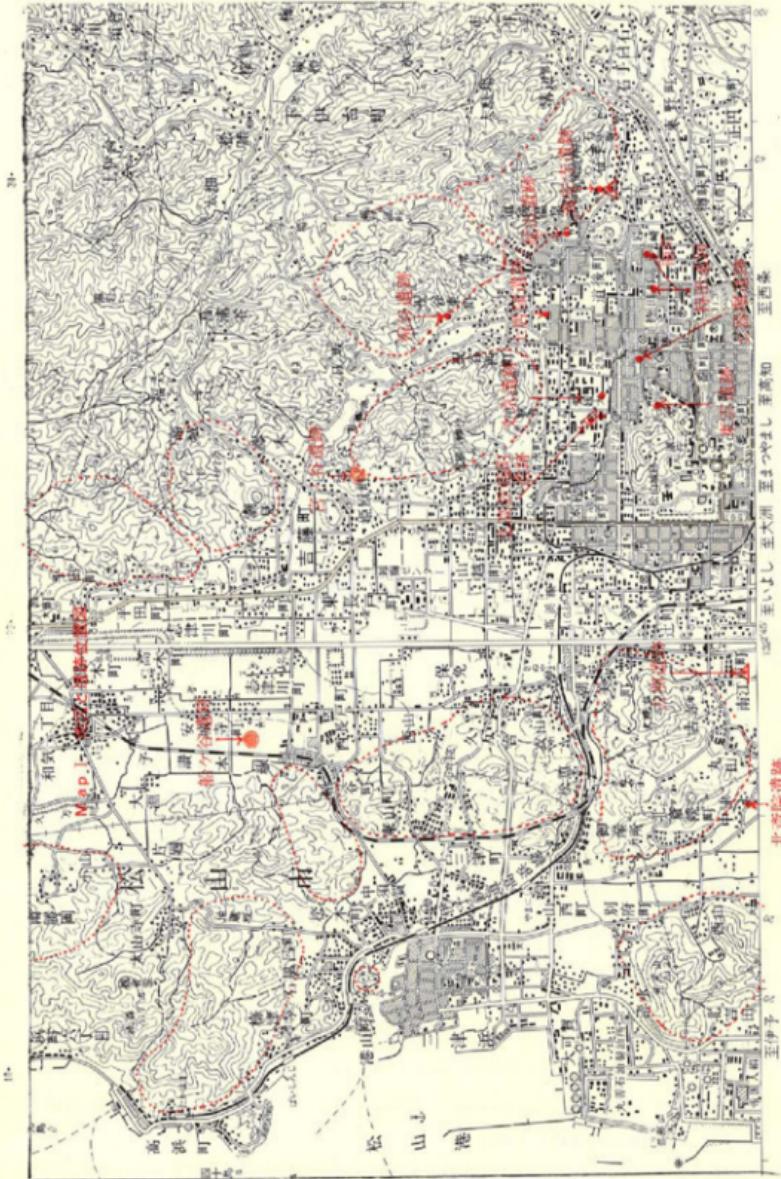
## 挿 図 目 次

### Map 1 地図と遺跡位置図

挿図1 文京遺跡、発掘地点と愛媛大学配置図	1
2 道後温泉付近地質図	3
3 東西（A—A'）の地層断面図	7
4 東西（P D—6）の北面断面図（B—B'）	7
5 南北（P D—6）の西面断面図（C—C'）	7
6 棕ノ原2号住居址遺構図	9
7 中村1丁目1号住居址遺構図	10
8 1区P D—1の遺構図	13
9 2区の遺構図	16
10 4区P D—2, 3遺構図	20
11 5区P D—5遺構図	23
12 P D—5, 土塙3遺構図	24
13 6区の遺構図（P D—6, 7, 8）	28
14 土製丸玉実測図	35
15 紡錘車実測図	35
16 分銅形土製品実測図	36

## 挿図・図版目次

挿 図 1	1区～2区の出土遺物実測図	69
2	2区～5区の	70
3	5区の	71
4	5区の	72
5	4区、6区の	73
6	特殊土製品実測図	74
7	石器類実測図 1	75
8	" 2	76
9	文京遺跡周辺遺跡出土遺物実測図 1	77
10	" 2	78
11	" 3	79
12	" 4	80
13	" 5	81
14	" 6	82
図 版 1	文京遺跡全景	83
2	遺構の発掘状況 1	84
3	" 2	85
4	" 3	86
5	" 4	87
6	" 5	88
7	遺物の出土状況 1	89
8	" 2	90
9	" 3	91
10	" 4	92
11	出土遺物 1	93
12	" 2	94
13	" 3	95
14	" 4	96
15	" 5	97
16	文京遺跡周辺遺跡出土遺物 1	98
17	" 2	99



凡例 ○ 遠文時代 ● 未成持代 △ 古墳時代 ○ 古墳群

# 第Ⅰ章 遺跡と環境

## 1 遺跡の位置

本遺跡の、行政的位置は愛媛県松山市文京町3にあり、その絶対的位置は、東経132°46'20"北緯32°50'40"付近である。

当遺跡の名称について些少の推考をすれば、当文京町は戦前、松山第22連隊の城北練兵場として活用された地域であり、それ以前の明治22年頃までは、松山市清水町と清水東町とに行政区画されていた。その後清水東町は、鉄砲町と清水町に分割されている。

現在、当練兵場跡は、道路をもって東西に2分されている。その東半分には、南側より日本赤十字病院、松山市立東雲小学校、松山市立御幸中学校、愛媛大学理学部がそれぞれ設置されている。一方、西半分は愛媛大学専有地となっており、この地域には、法文学部、教育学部、工学部、教養部、図書館等の諸施設がある。本遺跡の発掘対象地域は、工学部の西南部の海洋工学科新設予定地内であった。

第1図文京遺跡と愛媛大学との関係図



当地域は、前述の練兵場としての時代に、相当範囲を更に所によれば、1m～2mに渡る塹を作ったり、その他、軍事訓練に必要な諸行為の跡がうかがわれるほか戦後の愛媛大学諸建設があった。この結果、遺跡自体無意識的に破壊され、場所によっては數度の掘削を受けしており、当地域内の遺物発見も行なわれている。

## 2 遺跡をとりまく自然的環境

高縄山地の西南端に分岐山塊御幸寺山がある。その山麓に文京遺跡が存在する。古く高縄山地に水源を発する石手川は、清辺町の下流付近岩堰の改修（1601、2年）以前石手川の川流路について、伊予史談17号（大正8年）で鵜久森館太郎氏は、今の城北練兵場清水町付近の地下丈余の處に、和泉砂岩系の礫がある。これを指摘し、地質図では花崗岩地帯に砂岩の在ることは、石手川が城山の南を流れる以前に、城山の北に河道があったとしている。

また城北地区の地質的な形成について、宮久三千年愛大教授は道後温泉の自然の項で『東方は祝谷から伊台地区をへてひろく高縄半島にひろがる花崗岩山地につながる。しかしながら南は道後公園（田湯築城）の南斜面に中生代白亜紀層（和泉砂岩層群または単に和泉層群ともいう）が露出して花崗岩の分布をさえぎり、その境界は南に傾く花崗岩の侵蝕面の上に平行（整合）に和泉層群の砂岩と礫岩の互層がかきなり、この境界はほぼ東西につづいて西は松山城に、東は石手寺の北側をとおって湯山方面に追跡され、また地下においては次第に南に沈んで、松山市街地では和泉層群におおわれて花崗岩が潜るるものである。道後湯之町は道後山の山麓にあって、右にのべたような岩壁であるが、西南方の松山市街地へむかって新しい第四紀の堆積物（洪積層と沖積層）がおおって平野をつくっている。』と論じている。

同書の道後温泉付近地質図に示めされる如く、和泉砂岩層群と花崗岩層群の接点にあるが平坦部の堆積物は、両層群の風化土上の堆積による第四紀層序となっている。

## 3 歴史的環境

文京遺跡をとりまく、城北地区に転在する先史時代の遺跡は実に多く、古きは、縄文時代の中期及び後期に属すると思われる縄文土器片が、冠山、土居の塩、湯月城、姫原等で発見されており、これらの地区からの流失物と思われる同期の土器片は、47年に発見された古照遺跡においても発見されている。なお古照の北部の大峰が台残丘の山麓部からは復元可能な後期の土器片を出土している。さらに北部の太山寺山の山麓部安城寺、船ヶ谷遺跡からは縄文後、晩期の土器及び、石器、木器、土偶片等が発掘調査（県教委）により発見されている。

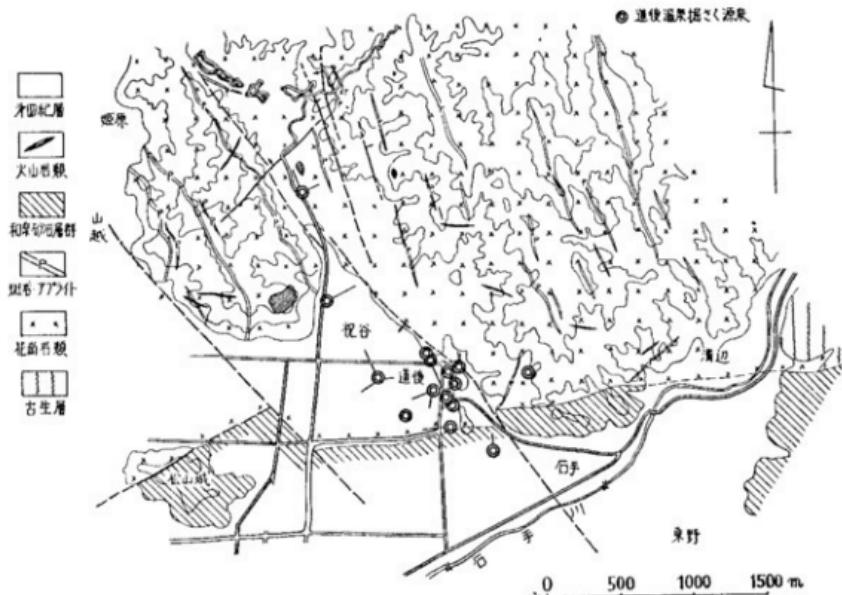
弥生時代の前期に属する遺跡としては、御幸寺山東側の山麓地帯、道後冠山中腹、持田町

及び潮見、久万ノ台と両方の海岸部飼崎等から出土しており、飼崎以外は等高線30mラインに集中している。これが次の弥生中期においては、祝谷扇状地一帯に生活の場は展開されたと同時に、中期後半時期においては城北地区一帯に広がったと考えられる。

またこの時期において特に100mラインの大峰ヶ台、勝山、御幸寺山の山頂部及び、中腹部にいわゆる高地性住居址かまたは、祭祀址と考えられる遺跡が発見されている。

続く弥生時代後期の遺跡は、特に爆発的に広がり、石手川の氾濫原をはじめ重信川の沖積低地にも住居をかまえ、松山平野における、水稻耕作面積の広がりと共に通する。

次の古墳時代においては、前記の向河川の支流となる諸河川の緩斜面に住居を建て生活舞台は、現在の生活地点と一致する所が多い程に発展したと考えられる。また平野に面する山麓地帯から分岐山塊の稜線をはじめ、平野に点在する残丘（独立丘陵）には、往時の聖域としての墳墓が営なまれている。これらの残丘は弥生時代にもまた、繩文時代にもおおいに活用された地でもあり、勝山（城山）をはじめ大峰が台、太山寺山、御幸寺山、天山、星ノ岡、東山、土襄山にはそれぞれ弥生時代の土塙墓をはじめ、高地性の住居跡及び祭祀址が点在している。さらに共通して繩文時代後期から晩期にかけての土器片及び、石器類の包含地もある。



第2図 道後温泉付近地質図

## 第II章 発掘調査のあらまし

### 1 調査に至る経過

松山市文京町3番における愛媛大学工学部校舎の増築に際して、埋蔵文化財の確認の依頼が有ったことにより、埋蔵文化財担当者である森晴晴が現地調査にあたった。

増築予定地の中で資材搬入道路建設のため一部掘削した面より遺物包含層を確認し、その中より数片の弥生式土器を検出した、これにより遺跡存在の確証を得た。

この地域においては戦後同大学のグランド造成時に遺物の出土をみていると共に、本市作成の文化財地図（No.67）元練兵場包含地としても登載されている場所でもあった。

これにより遺跡の保存、保護、調査及び増築計画等について市教委、専門員、愛媛大学の三者により再三の話し合いの結果、記録による保存の方針が決定した。

調査は愛媛大学と松山市教育委員会との覚書交換により松山市教委が実施し、調査費用は原因者である愛媛大学が全額負担した。

なお、調査中においては愛媛大学の埋蔵文化財に対する理解ある処置がとられたことの他、調査事務所、道具小屋等の設置について配慮をいただいた鹿島建設に対し深く感謝したい。

調査期間は昭和50年8月1日より8月24日までで、昭和50年10月1日より昭和51年2月28日までは整理作業及び報告書作成に当った。

なお出土遺物の一般公開及び保管は松山市古照資料館で行っている。

### 2 発掘調査日誌

#### 文京遺跡発掘調査日誌

昭和50年7月29日

文京遺跡の調査計画、工程、方法等について検討する。

7月30日

ユンボによってEW及びNSのトレンチ設定。（立合、森）

続いてユンボにより表土の耕土を行う。（立合、森）

7月31日

昨日に続きユンボで表土排出を行う。（立合、森）

市教委において調査打合会を行う。

8月1日

愛媛大学事務局と発掘準備打合会を行う。

調査対象区を1ブロック～6ブロックに区分設定する。

8月2日

調査区の断面測量。

トレンチにより層序、地質、遺構の推定及び検討を行う。

8月3日

1区の遺構検出作業を中心的に行う。

PD-1（方形プラン）検出及びPD-2の遺構検出作業。

8月4日

調査全区に5mグリッド設定とPD-2より多量の弥生式土器片を検出する。

8月5日

2区～3区の堀り下げ及び遺構検出PD-1, PD-5の遺構検出を行う。

8月6日

PD-1の平面測量及び遺物検出

PD-2, PD-5～6の遺構検出及び堀り下げをする。（PD-6は竪穴と推定）排水溝の検出及び測量をする。

8月7日

PD-1, PD-3, PD-5, PD-6の堀り下げ、遺物検出及び平面測量とPD-6において周溝を確認した。

本日も多量の土器を検出する。

8月8日

昨日に継ぎPD-1の実測及びピットを検出を行う。

PD-3, PD-5, PD-6, 検出作業及び平面測量を実施し、PD-5において土器の集中的出土をみる。

8月9日

PD-2, PD-5, PD-6の検出作業を重点的に行い、PD-5においては円形プランを確認した。

8月10日

昨日に継ぎPD-5, PD-6の検出作業を進める。（PD-6においてピット7本検出）

PD-3出土遺物測量、1区においてNo.1土塙検出

8月11日

PD-3～PD-6の検出を重点的に行い、PD-5の円形プランを検出した。（炉址検出）

8月12日

PD-3～PD-6の検出作業及び平面測量、出土遺物検出する。(PD-6の断面測量)

8月13日

PD-2、PD-3、PD-4は交叉せる遺構に発展した。

PD-5～PD-6の床面検出した。(PD-6よりピット完掘)

8月14日

PD-3、PD-4、PD-6の検出に重点を置き作業を進める。(PD-7、PD-8確認) PD-1及びPD-5の最終実測を行う。

PD-2においてA周溝とB周溝が交叉する。

8月15日

PD-6の平断面実測を行い、PD-3及びPD-4における遺物検出及び実測をする。  
3区において多量の土器検出をみる。

8月16日

昨日に継ぎPD-3の遺物検出をし、PD-5及びPD-6の調査は終る。(PD-6におけるトリブルプラン確認)

PD-1の断面実測

8月17日

PD-2及びPD-3の平面実測を行う。

午後より台風5号のため作業中止する。

8月18日

PD-2及びPD-3を完掘、平面測量を行う。

8月19日～8月23日

4区の追跡及び平断面測量する。

8月24日

当初の計画による調査範囲の発掘を終了した。

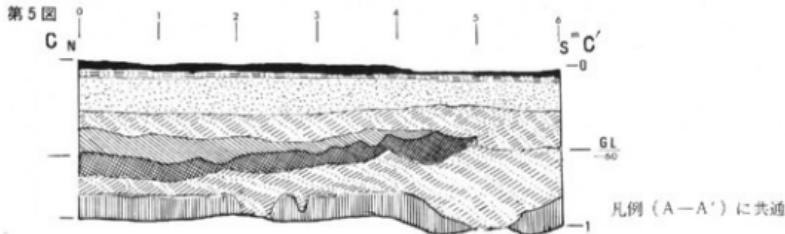
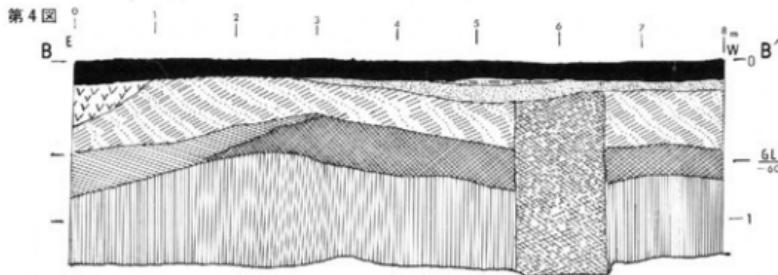
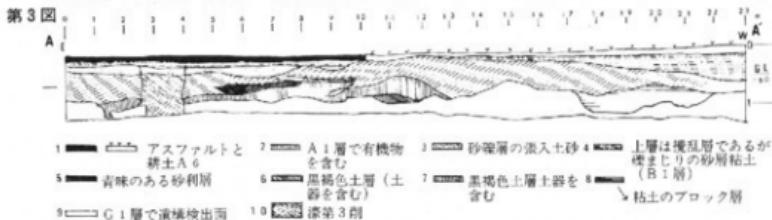
### 3 遺物の地層

#### 確認調査(トレンチ)による断面図

文京遺跡は歴史的環境でふれたごとく、戦前は城北練兵場として利用されただけに、地表(耕作)面のみならず、地下2mにも及ぶ壕も掘られている場所もあれば、滑走路として表土の排除されている所もある。このような立地条件により、平均してGL-60cm付近までは、かなりの擾乱がみられる。また戦後は愛媛大学附属小学校及び、工学部等の新築工事が行なわれ、校舎の増改築と共に付属工事が実施され、その後また新たに恒久的な鉄筋コンクリート建へと移行し、それ等と共に、地下の諸施設もまたその都度修理改善のための工事が実施され

るところとなり、文京遺跡はいやがうえにも破壊されるところとなつたことはいうまでもない。

次図は、文京遺跡（海洋工学部新築予定地内）のトレンチ掘削による地層断面図である。



凡例 (A-A') に共通

# 第III章 遺構

## 1 住居址

本遺跡において、住居址であると識別されたのはPD-2, PD-3, PD-5, PD-6, PD-7, PD-8の各遺構であるが、明瞭に把握できたのは、PD-5~7の住居址であり、それ以外は発掘調査範囲を越して存在、あるいは、塹壕によって分断、削除されており、部分的な把握に留っている。また、PD-6はPD-7・8によって、PD-7はPD-8の切りあいによって確実性を欠いており、完全に把握できたのはPD-5の不整円形住居址である。

時期的には、PD-5がその出土する土器（文京I式）から、PD-6よりは先行する。PD-6・7は遺構が複合しており、遺物は、PD-7のものと考えるならばその出土する土器（文京II式）から、さほど年代差の隔りはないと考えられる。PD-5は住居外の柱穴と内部のP. 5から、複合していたものとも考えられるが、その遺構からは文京I式のみを検出しておらず、仮に複合していたとしても同時期であろう。PD-2・3は遺構と遺物の把握も明確でなく、時期的にはPD-8と同一視しておく方が適切であろう。

これらの住居址の形状は、PD-2・隅丸方形4本主柱、PD-5・不正円形4本主柱、PD-6・円形10~12本主柱、PD-7・円形6本主柱、PD-8・楕円形6本主柱であり、あたかも住居址の構造における変遷を思わしめるものであるが、あまりにも資料不足であり、県下にその類似性を求めた。しかしながら県下の住居址の検出例は松山平野部に集中しており、北条原ノ原高地性遺跡内に5箇所、西条八堂山高地性遺跡内に3箇所の検出例があるが、いずれも平坦部と性格を異にしており、類似を求めるとしても県下一円という状況ではない。

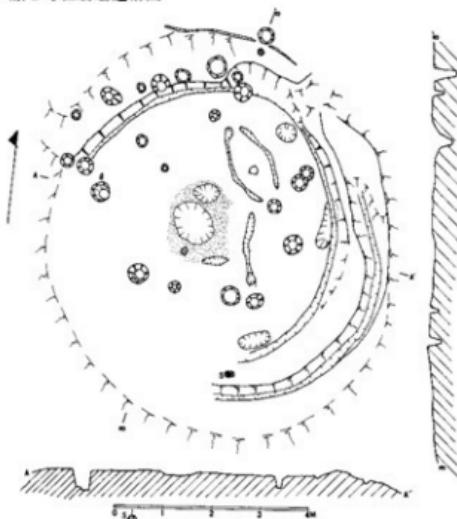
Tab 愛媛県下住居址一覧表

時 期	住 居 址 名	立 場 標高 m	形 状	主 柱 穴 数	炉 の位置	床 内 部 面 積 m <sup>2</sup>	備 考	併 出 遺 物
中 生 葉	中村PD-1	平地28	円形	9	中央	59.4	雨落内圓溝	凹縫文土器
	文京PD-5	平地28	不整円形	4	中央偏上り	16		文京I式、石鍋、瓦瓦丁
	駒齋面山～西野Ⅲ 丘上 701～85	円形・楕円	6	—	—	17倍底の住居址 (注1)		文京I式を併出する
時 代	樅ノ原PD-1	山頂 166	円形?	10～?	中央	19.6	伊一井部への排水溝 望楼的构造	裏窓部 文京I式に似る
	樅ノ原PD-2	山頂 158	不整円形?	6～?	中央偏土	16	雨落内圓溝 住居外 への施設的排水溝	凹縫文土器、铁錐、石包 丁、石鍬
後 期	文京PD-6	平地28.5	円形	10～12	中央	43	雨落内圓溝	文京I式 石磨丁
	文京PD-7	平地28.5	円形	6	中央	50	雨落内圓溝	文京I式
	樅ノ原PD-3	平地28	不整円形	4	中央偏上り	29	雨落内圓溝。人口東 南部	凹縫文土器、石錐

歴 史 時 代	基 / 口 P D - 1	平坦地27.3	楕円形 (奥耳出?)	6	中央南より	43	ベッド状遺構	複合口縁 文京型瓦類
八雲山 P D - F	山頂	195	長楕円形	4	中央地土	約28	雨落内周溝	
文京 P D - 8	平坦地28.5	長楕円形	6	中央	約42			
基 / 口 P D - 2	平坦地27.5	隅丸方形	4	中央南より	30	雨落内周溝	文京高床瓦類	
文京 P D - 2	平坦地	28	隅丸方形	4	中央	40.5		
桑原高井 P D - 4	平坦地	37	隅丸方形	4	中央	30	雨落内周溝	文京型Y - 瓦類
古 墳 時 代								
葛達 A, PD - 8	平坦地27.5	方形	4	中央地土	25	雨落内周溝、入口面 ベッド状遺構、北壁 は造り出し	派生式 土器群	
葛達 B PD - 1	平坦地	28	円形	5 (6 ?)	中央地土	28		土器群
葛達 B PD - 1	平坦地	28	楕円形	4	中央	30		土器群
百万ノ裏 PD - 1	平坦地	30	方形	4	—	30		土器群
松林 6 PD - 1	平坦地	27	方形	4	—	25		土器群
桑原高井 PD - 2	平坦地37.5	六角形	4	中央南より	38	雨落内周溝 ベッド状遺構 雨落内周溝、ベッド 状遺構	土器群	
桑原高井 PD - 1	平坦地37.5	隅丸方形	4	(東北部)	26	東北部造り出し (カ マド) 入口南部 北壁に棲してカマド が造られている。 (注1)	土器群	
谷田 I PD 1, 3								
丘陵先端部	丘陵先端部	方形	4	北辺	—		須恵器 (7 ~ 8世紀) (注1)	

上記の一覧表は、筆者等が発掘調査、あるいは参加した発掘調査による検出遺構であるが、国道11号バイパス各道路のは、その代表的なもののみを出呈し、運動公園内のものについては、調査報告書が作成されつつあり、詳細はさしきかえる。なお、それ以外では、松山北高等学校構内において隅丸方形住居址が検出されており、その併出する土器は、桑原高井 PD - 1 のそれと全く同様である。

第6図 株ノ原2号住居址遺構図



注1 長井数秋「愛媛県下の考古学研究の動向」1976. 2 (講演要旨より)

第7図 中村1丁目住居址遺構図



これらの数少い検出例では確実性を欠くものであり、将来、さらに多数の比較資料によって検討されるべきであり、ここでは事例紹介の私見を述べるものである。

弥生前期～中期中葉にいたる住居址の形状は、現在までのところ愛媛県下においては検出されておらず不明である。中期中葉以後の中村、文京、糸迦面山、椋ノ原の各住居址の形状は円形～不整円形プランであり、主柱は4～9本と多様化しており、特に椋ノ原のそれは高地性住居址であり、比較検討の対象からは除外されるものであろう。しかし、糸迦面山では筆者の記憶する知見では5個の住居址は円～椭円の同じパターンであり、一時期一集団の住居群と記述している。したがってこれらの原形を求めるならば、一般的に言われている円形プランであろう。

弥生時代後期にいたると、楕円、長楕円と、円形プランの発展した形状と共に隅丸方形プランが出現しているように思われる。文京P D-2、釜ノ口P D-2、桑原高井P D-4などがそれに該当するものである。その主柱本数も、床面積もさまざまであり、多様化をさら

に見せており、これは土器が後期に入って、さまざまに変容することとあながち無関係ではなく、社会の構造変化とも考えられないであろうか。この時期において、床面より一段と高い床、いわゆるベッド状遺構の設置がなされている住居址がある。釜ノロP D-1では東側に部分的に、時期は下るが、古墳時代では筋達A、P D-8では周間に、桑原高井P D-1では東側の一部分に、同P D-2では六角形で周間に、また時期に関しては筆者は知り得ないが、西野Iでは住居址内の北側3個所に存在したことが知られている。これらはその形状からベッド状遺構と呼称されているが、その機能に関しては未解決と言っても過言では無い。釜ノロP D-3の炉の北辺に小窓が敷きつめられていたことから家長の座を意味するものではないかと想像されている。それならば家長が寝る場所を区画したと考えてもさしつかえないであろう。また、床面の外周に沿って設置されているのは、全てベッドに使用したとするよりも座としての使用も考えられ、今後の課題であろう。

古墳時代初頭にいたるとかなり一定のパターン化が見られ、隅丸方形→方形プランへと変容しており、主柱も4本が主であるが、さらに6角形などの多様化も見られる。桑原高井P D-1では隅丸の東北部がさらに拡張され、その築土の堆積状況からカマドの設置がなされており、拡張部分は壁の部分的存在が考えられる。谷田P D 1、3ではその内部北辺に接して明らかにカマドが設置されており、駄の存在が確認されているが、併出する須恵器は7世紀後半のものであることから、その間にかなりの変遷が考えられ、これも今後の課題の一つであろう。

上記の如く比較資料が少く、住居址については未知数な部分が多く、今後の発掘例を把握し得た段階において文京遺跡の各住居址について論究したいと考えている。

## 2 掘立柱建造物

本遺跡の調査範囲内においては、その形態を完全に把握することはできなかったが、現在までに判明している各地の遺構検出例、及び検出状況から推定して、本遺跡内の2個所に建造物の存在が考えられ、I区では重複しているようである。また柱穴内からは弥生式土器片のみ検出しており、土師器の混入がないことから弥生期に位置づけられるものであろう。しかし、松山平野においては同時期の類似遺構の検出がなされておらず、高床式の住居、倉庫、または掘立式の住居、倉庫の判別すらされておらず、全国的にも検出された柱材や桁、梁材の間隙を柱穴に合致させているにすぎない。したがって、上屋根の構造は不明な点が多いと考えられている。ここでは、現在迄に検出されている松山平野部の同類の遺構を紹介するが、いずれも古墳時代のものである。先年古照遺跡の第1、第2塚から検出された高床式建物の復原値は、桁行3間4.74m、梁間2間2.26mの2:1の比率をもち、床面積約11m<sup>2</sup>のものとされておりこの床面積に該当しうるものとして枝松6丁目D-1建造物址があげられるが、

床面積、桁行、梁間の一致をみるとことどまっている。古墳期にはかなり大規模な建物が建てられたであろうことが枝松6丁目D-2等で伺え、まるで長屋をおもわしめるものであり、この時期に至ると掘立式がさかんに建築の手法として取り入れられていると推定され、その使用目的は倉庫としての性格を考えられている。これら掘立柱建造物群に関しても今後の研究課題である。以下松山平野における掘立柱式建造物の一覧表を付す。

Tab 掘立柱建造物址一覧表

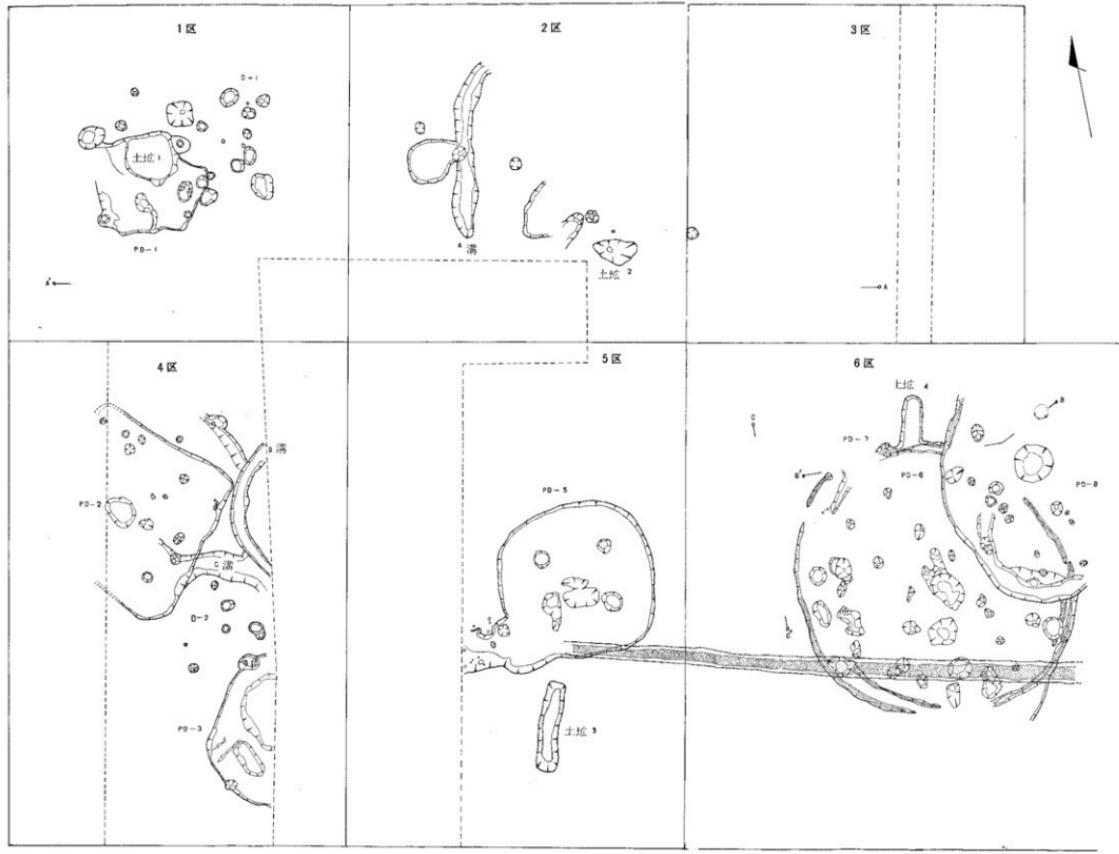
遺構名	柱穴	形状	面積m <sup>2</sup>	桁行m	梁間m	遺構名	柱穴	形状	面積m <sup>2</sup>	桁行m	梁間m	
掘立B D-1	12	長方形	28	4間	6.65	3間 4.25	枝松6 D-4	14	長方形	23.8	4間 5.8	3間 4.1
掘達A D-1	12	長方形	26	3間	5.8	2間 4.5	枝松6 D-5	14	長方形	48	4間 8	3間 6
掘達B D-1	14	長方形	30	4間	7	3間 4.3	枝松6 D-6	12	方形	36	3間 6	3間 6
掘達B D-2	12	長方形	41.4	5間	9	1間 4.6	枝松6 D-7	14?	長方形	41	4間 10	3間 4.1
北下B D-1	6	長方形	6.65	2間	3.5	1間 1.9	枝松6 D-8	10	長方形	23.2	3間 5.8	2間 4
北下B D-2	14	長方形	25	4間	5.45	3間 4.6	枝松6 D-9	10	長方形	24.5	3間 5	2間 4.9
常埋B D-1	10	長方形	22.4	3間	5.9	2間 3.8	釜ノ口 D-2	6	長方形	19	3間 4.8	2間 4
常埋B D-2	12	長方形	25.8	3間	6	3間 4.3	釜ノ口 D-3	6	長方形	15.6	3間 4.9	2間 3.2
常埋B D-3	8	長方形	11.4	2間	3.8	2間 3	釜ノ口 D-4	6	長方形	11	3間 4.10	2間 2.7
常埋B D-4	10	長方形	16.7	3間	4.4	2間 3.8	釜ノ口 D-5	6	長方形	11	3間 3.5	2間 3.2
枝松6 D-1	10	長方形	10.4	3間	4.1	2間 2.6	釜ノ口 D-6	5	長方形	12.5	3間 4.16	2間 3.0
枝松6 D-2	12	長方形	49	3間	10.2	3間 4.8	谷田I D-1	—	—	—	—	—
枝松6 D-3	14	長方形	45.9	4間	9	3間 5.1	谷田I D-2	14?	長方形	—	4間, —	3間 —

### 3 溝状遺構

本遺構においてはII区において、長さ5mの溝が検出された。その基底部に細砂の堆積が見られ、留水、あるいは通水されていたと推定されるが、汚泥沈殿物はあまりなく、存続期間は、さほど長きにはいたらなかったと考えられる。また、溝の機能としては、僅か5mの検出であり、不詳な面が多い。

溝が住居址に付随することは、松山市釜ノ口遺跡において検出例がある。ここでは南北に貢流する溝と、時期を異にして交差する数条の溝が検出されている。また古墳時代になると旗立B区、筋通A区、B区、北下りA区、常堀A区、枝松6丁目、桑原高井の各遺跡からも住居址に接して、あるいは切り合いで、複合的に存在しており、住居址、あるいは居住地域と関連づけて把握されている。これらは生活を営む場所としての生活用水を得るために取水、あるいは排水を目的として掘られている。比恵遺跡や宮原遺跡の如く、居住地と他とを区画、あるいは濠としての性格を持つ遺溝とは明らかに異なるものである。これらの溝中からは、えてして不要となった土器類の破片が無難作に投げ込まれており、住居址内出土遺物より若干先行する場合がある。また、時期を異にして住居址上に溝を切っている場合も見られ、世代の交代というより、本流の取水口の変化が導水の方向を変化させたものであろう。

本遺跡も旧地表はゆるやかな起伏を持っており、遺跡上手からの導水が考えられ、それに伴う溝の一部と把握すべきであろう。



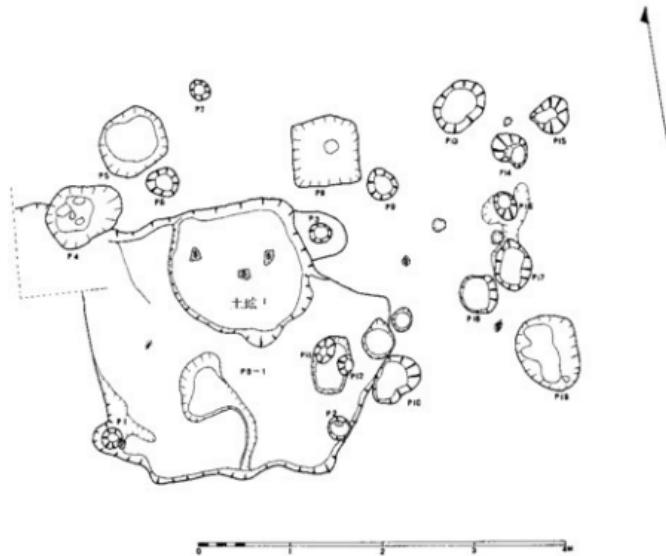
文京道跡造構図

## 第IV章 各区の遺構と遺物

### 1 1区の遺構と遺物

#### 1区の遺構

第8図 1区PD-1の遺構図



#### (1) PD-1

1区は上層より整壕掘り等による擾乱がひどく、遺構検出面はMP-1.43~1.46mにおいてある。

検出した遺構は、東西3.2m、南北2.8m、深さ3~5cmの不整形な掘り込みであり、現存する壁高も、東端で5cm、南端で2cmの僅かな壁を残しているにすぎない。西北部は擾乱により検出できなかったが、本遺構に伴う柱穴と考えられるP1~P3を検出した。柱心間の測定値は、P1~2.5m~P2~2.1m~P3であり、4本主柱の内部面積、約9m<sup>2</sup>の建造物址と考えられる。

床面とおぼしき面は、茶褐色粘性土で、部分的に黄色シルト、木炭の混入がみられ、不安定であり、炉址等の窓地も造られてはいない。遺構の面積からも、恒久的な住居ではなく、一時的な建造物とする方が妥当である。

本遺構上層の擾乱層からは弥生式土器を検出しているが、本遺構に伴う土器は1-17を代表とする土師式土器である。

Tab 1 PD-1 柱穴一覧

柱穴の番号	P 1	P 2	P 3
柱穴基底部の径	20	18	17
床面からの深さ	15	18	27

### (2) 土塙-1

PD-1 床面の西南及び北東部は床土が不安定であり、さらに掘り下げた結果、北東部において、東西1.5m、南北1.3m、深さ0.3mのはば方形の土塙を検出した。土塙内の堆積土は、PD-1 の床土と異り、黒褐色粘性土であり、内部からは、15×10×5cm大の花崗岩と砂岩の礫を検出すると共に弥生式土器1-1, 1-2を伴出した。

### (3) D-1 掘立柱式建造物

PD-1 検出面、及び周囲から柱穴と考えられるP 4～P 19を検出した。これらの柱穴による相互の桁行、梁間の測定値を得るには至っていないが、掘立柱式の建造物が、柱穴の形状から2形態存在したものと考えられる。なお柱穴内からは1-11, 1-12等の弥生式土器を検出しておらず、土塙1と共にPD-1より先行するものと考えられる。

Tab 2 D-1 柱穴一覧

柱穴の番号	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19
柱穴基部の径	—	—	17	12	14	25	—	15	17	—	20	15	27	—	—	—
表面からの深さ	52	31	18	15	28	13	19	8	8	30	21	23	39	51	32	25

### 1区の出土遺物

1区からは土器片数にして、約300点出土しているが、計測不能な小破片、及び摩滅土器が多く、形状を窺い知る土器は若干である。

#### (1) 弥生式土器 1～12

1, 2, 7は壺形土器であるが、1は口縁が直角、水平に外反しており、突帯の指圧はていねいに付けられている。7の胎土、焼成は若干土師質に近いものである。3, 4は壺形土器の口縁部であるが、3は口唇部が内反しつつ立ち上がり複合口縁化しつつある。2-1, 2-6, 5-10と共通するものである。5は器台状土器の口縁で水平に開いている。6は高环の脚部で据に2条のヘラ描き凹線をめぐらしており、(高环I類B類)に属する。11, 12は壺形土器の底部と考えられる。土塙内底部に付着していた1, 2の壺形土器の復原接合値

は器高約37cm前後である。

(2) 土師式土器 13~17

13は口縁が漏斗状に開く變形土器である。14, 15は小型變形土器の底部、16, 17は碗形土器である。PD-1付着の土器は、13, 16, 17が該当する。

石器については、別項で記述する。

Tab 3 第1区出土土器一覧 單位cm \*復原値

Fig	器種	計測値 口径 底径	形態の特徴	胎土・焼成	出土場所層位、MP-1値	土器検出番号
1-1	甕	*31	口縁部、口唇端に窓刻目。頸部に指によりひねり突唇を貼りつけ	砂分少なく硬	土坑内 - 165	1-4
2	#	底径 6.8 脚径 22.5	底部、上げ底+2、外面、ヘラ調整、内面、削調整	赤褐色 硬	# - 171.5	1-27
3	壺	-	口縁部、複合口縁、口唇部、ヘラ凹線5条	# 硬	# - 158	1-2
4	#	-	口縁部、複合口縁、口唇部、ヘラ凹線文を付す	黄色 軟	PD-1 4層	
5	器台	*27.5	口縁部、口唇部がかなり平たく張り出す	茶色 軟	Pit 内 - 162	1-33
6	高杯	脚径 11	脚部 墓部にヘラ凹線2条を配す 底部に棱を持つ	硬	PD-1 4層	
7	甕	*10.5	口縁部、口唇端へラ調整、頸部へラ刻目	茶色 軟	3層擾乱	
8	-	底厚 2.7 1.2	底部、平底	砂多い 硬	PD-1 - 145	1-13
9	-	底厚 4.5 1.7	底部、#	#	PD-1 - 150	1-7
10	-	底厚 3.8 0.8	# #	硬	PD-1 4層	
11	壺	底厚 7 1.3	# #	軟	Pit - 160.5	1-16
12	#	底厚 9 1.6	# #	硬	七 坑 - 163	1-26
13	甕	*14	口縁部、頸部に指ひねり突唇貼りつけ	砂多い 軟	PD-1 - 145	-
14	-	底厚 3.7 0.6	瓶部 上げ底 +0.3	砂多い 軟	1区 3層 - 135	-
15	-	底厚 2.8 0.3	# # +0.2	砂多い 軟	1区 3層 - 131	-
16	碗	底厚 2.7 0.7	# ひねりつけ	密 軟	PD-1 - 139	1-18
17	碗	底厚 - 1.3	丸底 外面ハケメ調整	密 硬	PD-1 - 130.5	1-1

## 2 2区の遺構と遺物

### 2区の遺構

2区からは、溝状遺構と土塙を検出したにすぎず、区画の大半は壠塹掘りによって搅乱、破壊されており、遺物の出土はあるものの住居址としての明瞭な遺構の検出は認められなかつた。

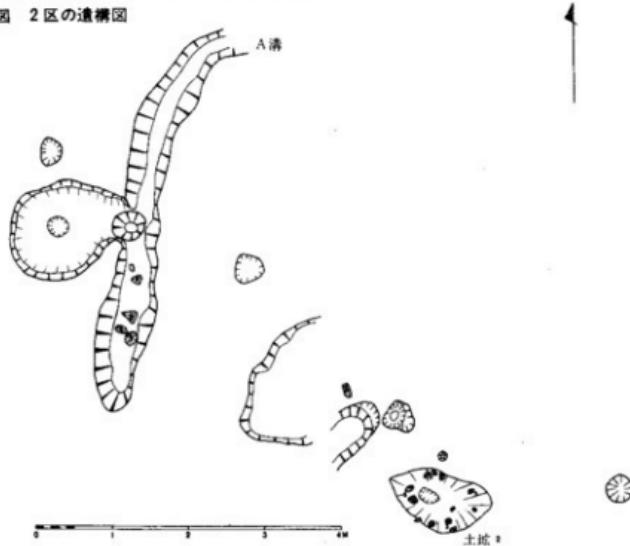
#### (1) 溝状遺構 溝一A

南北5m、最大幅0.7m、深さ0.2mのU字形の掘り込みを持つ溝で、中央部に東西1.5m南北1.4m、深さ14cmの袋状の土塙を付随する。溝内部に堆積していた土は、茶褐色砂質土で、溝の底部には細流砂の堆積がみられ、通水していた事が考えられる。南部は閉じているが、北部はやや掘り込みがくずれており、発掘限界域に達するため不明である。袋状土塙との接点において最も深く、砂の堆積が見られた。南部に、 $15 \times 10 \times 5$  cm大の花崗岩、和泉砂岩の礫を5個検出すると共に2-1、2-6の弥生式土器を検出したが、これらが意図的なものかは不明である。

#### (2) 土塙一2

東西1.4m、南北0.7m、深さ0.2mの梢円に近い不整形な土塙で、内部より $7 \times 5 \times 3$  cm大の和泉砂岩の礫を12個検出したが、それ以外は無遺物である。土塙内には茶褐色粘性土が堆積しており、一部、木炭の混入が見られた。

第9図 2区の遺構図



2区の出土遺物

2区出土の土器片は約400片を数えるがその形状を完全に知る得るものは皆無である。壺の1及び2、3で復原接合を試み、器高約50cm、胴径約34cm前後の数値を得た。

#### (1) 弥生式土器 1~32

1~11は壺形土器、1~9はいずれも口縁部にヘラ描き凹線を数条配しており、本遺跡の壺形土器の共通手法である。1は口唇上部が内傾し複合化しつつあり、2、3、4は口縁が大きく外反し、口径値も近似しており、形状的に共通するものである。7、8、9は小型壺、6は中型壺であろう。(壺I類)

12は壺で、口縁はほぼ水平に外反し、口唇上部がやや肥厚しつつ立ち上がっている。(壺II類)に共通する。14、15、16は高环であるが、15、16は一個体のものと考えられる。凹線を数条配しており、技術的には(高環I類)に近似する。17~24、26、27、30、31は壺形土器の、28、29、32は壺形土器のそれぞれ底部と考えられる。

#### (2) 土師式土器 33

形状を知り得たのは33のみで、埴形土器であり、第2層上部より検出したものである。

#### (3) 石 錫 2~1

第3層-130より出土した。長さ2.3cm、幅1.5cm、厚0.35cm、重量2.3g、サヌカイト製、先端を欠いているが平根の二等辺三角形状である。

Tab 4 第2区出土土器の一覧

単位cm \*復原値

Fig	器種	計測値 底径	口縁部 底径	形 態 の 特 徴	胎土・焼成	出土場所・層位、M P 一値	土器検出番号
2-1	壺	24.5		口縁部、口唇が内傾し複合化、口縁にヘラ描き凹線4条、口唇にヘラ刻目、頸部に指圧による貼り付け突帯2条、外曲、頸調整、内面ハケ目、ヨコナデ	良 硬	土坑内 - 140.5	2-32
2	#	25.5 *		口縁部 口縁にヘラ描き凹線4条	砂分 多い 普通	2区 第4層内	
3	#	12 底径 7		頸部・底部 頸部にヘラ描き凹線7条、刻目、底部平底 厚1.5	砂分 多い 普通	2区 - 128.8	2-18
4	#	24 *		口縁部 口縁にヘラ描き凹線3条	良 硬	2区 第4層内	
5	#	23.5 *		口縁部 口縁にヘラ描き凹線4条	砂粒 多い 軟	#	
6	#	19		口縁部 口縁にヘラ描き凹線2条、 深0.7の円形布文を2個一 対で4方向に配す	良 普通	2区 # - 125	2-26
7	#	15.5 *		口縁にヘラ描き凹線3条 口唇が若干立ち上がる	良 硬	2区 #	2-22
8	#	13 *		口縁部 #	#	# #	
9	#	13 *		口縁部 口縁にヘラ描き凹線2条	#	# #	
10	#	20 *		複合口縁、口縁部に崩描き 流水文2条	砂粒 多い 軟	# #	
11	#	21 *		口縁部 複合口縁、口縁に模を付す	# 硬	表探	
12	壺	23 *		口縁部 口唇が若干く字状に形成 外面ハケ目、ヨコナデ	良 硬	2区 第4層内	

2-13	甕	16.5	口縁部 口縁外反がゆるやか	砂粒 多い	普通	2区 第4層内	
14	高环	23.5 ■	口縁を垂直に上げ口唇部に 棱をつけ区画している	良	普通	〃	
15	〃	24.0 ■	杯 部 口縁はやや内傾し、口縁部 にへラ描き凹線4条	良	硬	〃	
16	〃	脚根径 24.0 ■	脚 部 脚部にかけてへラ描き凹線 4条、裾部に5条、裾底部 に2条中段に三角すかし 6	良	硬	〃 - 132	
17	甕	5.5	底 部 平底 厚0.3 外面へラみがき	良	硬	〃 - 126.2	
18	〃	5	底 部 平底 厚0.3 外面へラみがき	良	普通	2区 第2層内 - 115.5	2-24
19	〃	6	〃 〃 厚0.5 〃 〃	〃	硬	〃 第4層内 - 129.3	2-23
20	〃	5.5	〃 上げ底+0.3 厚1.8 〃	〃	硬	〃 〃 - 120	2-21
21	〃	7	〃 上げ底+0.3 厚1.1 〃	〃	硬	〃 〃 - 124.5	2-8
22	〃	7.5	〃 上げ底+1 厚0.5 底部ハケ目、ヨコナナ	砂粒 多い	軟	〃 〃	
23	〃	7	〃 〃 +0.8 厚1.3 〃	〃	硬	〃 〃	
24	〃	6.5	〃 〃 +1.2 厚0.6	良	普通	〃 〃	
25	-	4	〃 平底 厚0.2	〃	硬	〃 表様	
26	甕	4.5	〃 上げ底+0.3 厚1.1	〃	〃	〃 第4層 - 128.8	2-18
27	〃	4	〃 平底 厚0.8	〃	〃	〃 〃 - 126.1	2-10
28	甕	6.8	〃 上げ底+0.3 厚2.3	砂粒 多い	軟	〃 〃 - 140	
29	甕	6	〃 〃 +0.2 厚1.6	〃	硬	〃 〃 - 126	
30	甕	6	〃 〃 +1.8 厚1.3	〃	硬	〃 〃 - 133	2-5
31	〃	9	〃 〃 +1.5 厚1.2	良	軟	〃 表様 - 133	
32	甕	4.5	〃 平底 厚2	〃	〃	〃 第4層 - 126	
33	堆形	17	口縁部 口縁部ハケ目ヨコナナ 脚部ハケ目	良	硬	〃 第3層 - 115	

### 3区の遺構と遺物

#### 3区の遺構

3区においては上層からの擾乱がはなはだしく、MP-80~102間のブロック状の赤褐色粘性土内におびただしい土器片が含まれており、下層に遺構の存在が考えられた。

-1m掘り下げた個所で、青色の腐蝕粘性土と共に、ガラス片、茶碗、釘、及び工事用杭材の検出があり、官舎建築の際に掘り下げられた基礎工事の埋土である事が判明し、上記の遺物類は、本館工事の際の、東部、又は後述のP D-8の遺物の混入と考えられる。

3区の西部は層位は安定していたが、下水管の埋設の為にこれまた擾乱を受けており、遺構の確認はできなかった。南北に走る幅70cm、深さ40cmの溝を検出したが、掘り込みは垂直に近く、これまた後世の壕的な溝と考えられる。

#### 3区の出土遺物

(1) 弥生式土器 1~36

1～5はいずれも小型壺の口縁部で形状は（壺I類）に属する。いずれも口縁にヘラ描きの凹線を配している。6～8の甕は口縁が大きく外反し、口縁部に凹線を配しており（6、8は甕Ⅲ類、7は甕Ⅳ類）、9、10、13は（甕Ⅲ類）、11は（甕V類）に属する。15の高环は（高环I類）に属するものである。

## (2) 石 器

- ・ 石鎧 打製、長さ3cm、幅1.1cm、厚0.2cm、重さ1.5g、サヌカイト製、形状は柳葉状である。 3-2
- ・ 石包丁 磨製、長さ約12cm、幅5cm、厚0.8cm、片刃、2穴、穴径0.2cm、綠泥片岩製、3-2
- ・ 砥石 長さ11cm、幅4.5cm、厚1.8cm、6面使用。 3-1

Tab 5 3 区出土土器一覧

単位cm \*復原値

Fig.	器種	計測値 口縁 底径	形態の特徴	粘土・焼成	出土場所・層位・M.P.一覧	土器検出番号
3-1	壺	13.5 *	口縁部 口縁へラ描き凹線4条 口唇上部立ち上がる	良 硬	第3層下ブロック状焼成土 M.P.-95~105	
2	#	17.5	# 口縁へラ描き凹線3条 口唇上部や立ち上がる	良 #	以下全て同じ層内より	
3	#	13.5 *	# 口縁へラ描き凹線1条	良 #		
4	#	13.5 *	# 口縁へラ描き凹線2条	良 #		
5	#	15 *	#	砂粒 多い 軟		
6	甕	24.5	# 口縁へラ描き凹線3条 頸部、円形帯文	# #		
7	#	26	# 口縁へラ描き凹線2条 頸部、ヘラ削り施文	良 硬		
8	#	20	# 口縁へラ描き凹線2条	# #		
9	#	19	# 口縁外側ハケヨコナデ	# #		
10	#	17.5 *	# 口縁、頸部外側ハケヨコナデ	# #		
11	#	14	# 土師質に近い	砂粒 多い 軟		
12	#	14. *	# #	# #		
13	#	24	# 頸部ハケ目	# #		
14	壺	23.5 *	# 複合口縁、口縁へラ描き凹線3条、外反部に棱を持つ	# 軟		
15	高环	脚径15.5*	脚 部 脚部へラ描き凹線2条、底盤に上反する棱を持つ	良 軟		
16	#	脚径12.5	脚部から裾部にかけてハケタテナデ	良 硬		
17	#	—	脚 部	# #		
18	—	—	脚 部 脚部から裾部にかけてハケタテナデ	砂粒 多い 軟		
19	器台	腰部径14.5	脚 部	# 普通		
20	甕	5.3	底 部 上げ底+0.3 厚1.7	良 #		
21	#	7.7	# # +0.6 # 1.2	# 硬		
22	甕	9	# 平底 厚1.2 ハケ目	# 軟		
23	#	5.5	# # # 3.3	砂粒 多い 軟		
24	#	6.5	# # # 2	# 硬		

3'-25	表	6	底 部 平底	厚1.3 ハケ目	良 硬	第3層下 ブロック状層上 M.P.—95~105
26	壁	5.5	〃	〃	〃	以下全て同じ層内より
27	壺	4.5	〃	〃	#1.3 黒け青	
28	—	3	〃	〃	#1	〃 軟
29	甕	7.2	〃	上げ底+0.5	#1.3	〃 普通
30	壺	5.5	〃	平底	#1.6	〃 〃
31	—	5.4	〃	〃	#1.1	砂粒 多い 普通
32	甕	5.3	〃	上げ底+0.4	#1.1	〃 〃
33	〃	4.8	〃	平底	—	ハケ目 〃 軟
34	壺	5.7	〃	平底	厚1.7	良 〃
35	〃	4	〃	平底	#2	〃 硬
36	〃	4	〃	上げ底+0.2	#1.5	〃 硬

#### 4 区の遺構と遺物

##### 4区の遺構

4区も整塚によって、幅4mの範囲を除き破壊されており、遺構は限られた範囲の中においての部分的な検出である。

##### (1) PD-2 隅丸方形住居址

Tab 6 PD-2 柱穴一覧

柱穴の番号	P 1	P 2	P 3
柱穴基部の径	12	20	13
床面からの深さ	37	45	44

西側半分は不明であるが、東側半分から推定して、南北5m、東西約5m、約25m<sup>2</sup>の床面積を持つ隅丸方形住居址と考えられる。現存する壁高は、北側で7cm、東側10cm、南側8cmであり、ほぼ中央に灰、木炭及び

黒褐色土を堆積した東西1m、南北0.7m、深さ0.17mの窪地が掘られており、炉としての使用が考えられる。炉内部からは弥生式土器底部4-9、4-11等を伴出した。本遺構に伴う

第10図 PD-2, 3遺構図



柱穴としてP1～P3が該当する。西南隅柱穴は検出不能であるが4本主柱で、柱穴間の測定値は、P1～3m～P2～3.1m～P3である。床土は黄褐色の粘性土を敷いている。本住居址内からは4—3を中心とする弥生式土器を伴出している。他に中央部床面に密着して石錠とフレークを検出している。本遺構はD—2、溝—Cによって切り合い、複合遺構であるが、本遺構が先行するものである。

#### (2) PD—3 楕円形住居址

Tab 7 PD—3 柱穴一覧

柱穴の番号	P1	P2
柱穴基部の径	11 E 11	W 15
表面からの深さ	65	27

PD—2中心より南に7mの地点に位置するが、本遺構も全体の約 $\frac{1}{3}$ に過ぎない。掘り込みの状態から、南北幅4.5m前後の楕円(円?)形住居址と考えられる。現存する壁高は、北部9cm、西部15cm、南部17cmであり、掘り込みに沿う内部溝は無い。本遺構に伴う柱穴と考えられるP1、P2はいずれも、掘り込みの壁面に接して掘られており、柱心間の測定値は、P1～3.7m～P2であり、P1は2穴の可能性が強い。北部に寄った個所に南北2m、深さ20cm、東西約1.5mの灰、焼土を伴う土壇状の窪地を検出し、内部からは弥生式土器片と共に焼けた獸骨を検出しており、炉と考えられる。南側には、南北1.12m、東西0.6m、深さ10cmの窪地があり、内部より石錠を検出した。PD—3内からは、床面より+10で石包丁を検出した。床土は赤褐色粘性土で安定しており、伴出する土器は1～7を代表とする弥生式土器である。

#### (3) D—2 掘立柱式建造物

掘立柱の柱穴と考えられるP11～P22が検出されているが、一連の建造物としての測定値は得ておらず、桁行、梁間も不明である。柱穴基底部からは弥生式土器を検出している。

Tab 8 D—2 柱穴一覧

柱穴の番号	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22
柱穴基部の径	16	18	22	11	10	13	12	16	16	15	11	9
表面からの深さ	11	20	17	39	18	16	17	19	38	35	42	22

#### (4) 溝状遺構 溝—B、C

B溝は長さ4m、幅0.3m、深さ10～15cmの半円状の溝であり、住居址の掘り込みとも考えられるが、部分的な遺構であるため、現段階では、溝と把握している遺構である。内部からは、砥石、土玉を検出したが、それ以外は検出していない。

C溝は、層位的にはB溝、PD—2の上部に掘り込まれたもので、これまた部分的な遺構であり、最も現存する場所で、幅0.7m、深さ13cmである。

#### 4区の出土遺物

##### (1) 弥生式土器 (PD—2) (1～12)

1は口縁が外反し口唇が肥厚、上部が立ち上がる。2は複合口縁で頸部に刷毛目の調整がみられる。3~5は甕であるが、3は口縁がほぼ水平に外反し、胴張りも少なく、やや先行するものと思われる（甕I類）。4は（甕VII類）に属する。6は支脚であるが、支柱が1本であり、変種である。

### (2) 弥生式土器 (P D-3) (1~7)

1は壺と思われる。2は複合口縁であるがいずれも他の区からは類例の無い形態である。

4~6は甕形土器の、7は壺形土器の底部である。

### (3) 石 器

- 石鎌 長さ4cm、幅2cm、厚0.6cm、重さ4.5g、サヌカイト製、やや有舌状である。  
P D-2 内より出土。 4-3
- 石槍 長さ一、幅2.2cm、厚0.7cm、重さ4g、サヌカイト製、P D-3 内より出土。  
P D-3 内より出土。 3-7
- 石包丁 長さ11cm、幅3cm、厚0.5cm、片刃、1穴径0.3cm、綠泥片岩製、P D-3 より出土。 4-5
- 砥石 長さ14cm、幅3cm、厚2.5cm、4面使用。土塙Bより出土。 4-2

その他

土玉 高さ3cm、幅3.5cm、孔径0.5cm、焼成良、重量33.9g、土塙Bより出土。 1

Tab 9 4 区 出土土器一覧

単位cm \* 種原値

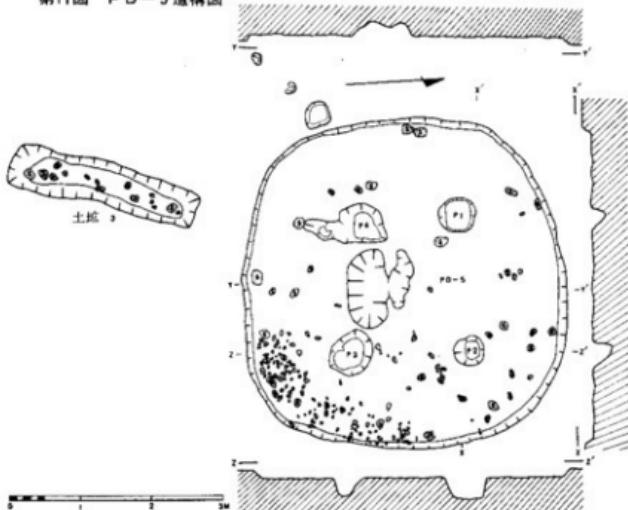
Fig	器種	計測値 口径	形 状 の 特 徴	胎土・焼成	出土場所、層位、M P - 値	土器種 出番号
4-1	壺	—	口縁部 口唇端がやや立ち上がって いる。	良 硬	P D-2 第4層内	
2	#	17.5 *	口縁部 複合口縁、頸部ハケ目タテ ナデ	砂粒 多い 軟	P D-2 #	
3	甕	19.5	口縁部 口縁がほぼ水平に外反する。	良 硬	P D-2 — 125	4-6
4	#	—	# 口縁が外反しさくらに持ち上 がる	粗 軟	# 第4層内	
5	#	—	#	良 軟	# #	
6	支脚	底部径 7.7	ほぼ完形であるが、支柱が1本であ り家種である。	普通	P D-2	— 122
7	甕	7	底部 平底 厚1 ヘラみがき	良 硬	#	
8	甕	5	# 上げ底0.3 厚0.7	良 硬	# 炉址内 — 150	4-20
9	#	7.2	# # 1.1 # 1.1	砂粒 多い 普通	# — 122	4-6
10	#	7.1	# # 2.5 # —	良 軟	# 炉址内 — 158.5	4-21
11	#	5	# # 0.3 # 1.3	良 硬	# — 126.5	4-1
12	#	3.7	# # 0.4 # 1.3 ハケ目 タテナデ	良 硬	#	
7-1	壺	20.5 *	口縁部 口縁へラ描き凹線1条、 頸部へラ割目	良 硬	P D-3 第4層内 — 150	
2	#	20.7 *	# 複合口縁、口縁へラ描き凹 線3条、径1cm有心円形布 文4個付す	良 普通	# #	

7-3	高环	-		良 硬	#	#	
4	甕	4.8	底 部 平底 厚1	砂粒 多い 普通	#	# - 153	
5	#	4.8	# 上げ底0.3 # 1.5 ハケ目 タチナデ	良 硬	#	#	
6	#	5.6	# # 0.3 # 0.8	良 敷	#	# - 156	
7	甕	6	# 平底 # 1.2	良 敷	#	# - 148	

## 5 5区の遺構と遺物

### 5区の遺構

第11図 PD-5遺構図



5区は塹壕による破壊をほぼまぬがれており、層位は上層から安定しており、第3層MP-90から土器片が含まれており、茶褐色粘性土の下層に遺構の存在が予測された。MP-1.05の面において東西に走る幅40cm、長さ5m、深さ10~15cmの溝を検出した。この溝は後述の6区より貫流しており、溝の内部及び同レベルにおいて土師器及び須恵器を出土しているが、これは遺構に伴うものでなく、この溝による流転堆積遺物と考えられる。

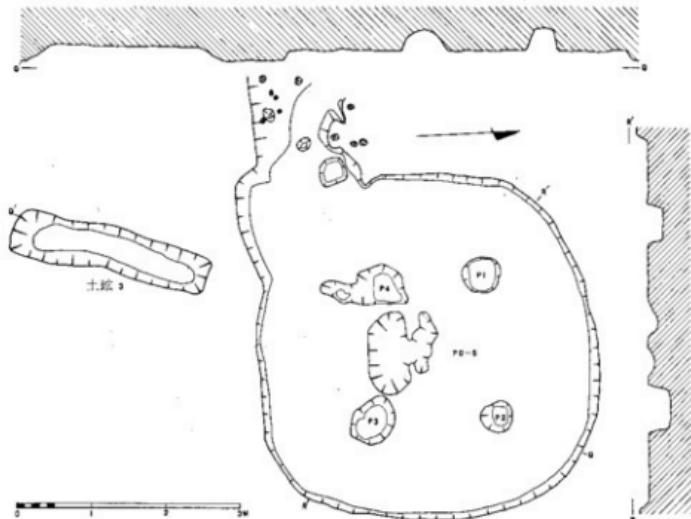
#### (1) PD-5 円形住居址

MP-1.26において、円形の黒褐色土を検出すると共に、同レベルにおいて多数の弥生式土器片を伴出した。掘り下げた結果、遺構は、東西、南北共に4.5mのほぼ円形の内部面積約16m<sup>2</sup>の4本主柱の住居址であることが判明した。掘り込みは垂直に近く、現存する壁高は、東側15cm、西側19cm、南側19cm、北側14cmである。中央部やや南よりに深さ8~10cmの不整

形な、灰、木炭及び黒褐色土を堆積する窪地が掘られており、戸と考えられる。4本の柱穴間の測定値は、その柱心において、P1～1.9m～P2～1.7m～P3～1.8m～P4～1.3m～P1で、P4は少し北に寄っている北側の柱穴が<sup>(1.8)</sup>、他の柱穴の、建柱後の石づめの方法と似ており、該当するものと考えられる。

床土は茶褐色粘性土であり、床面には礫が多く密着しており、特に東南部は石敷を思わせる状況である。本遺構に伴う土器は5-1, 5-23, 5-29を代表とする弥生式土器であり、床面より+20cm迄の含合土から数多くの土器の出土をみた。また、石鎌、土玉、砾石の出土と共に、分銅型土製品の破片を検出した。

第12図 PD-5、土塙3遺構図



Tab 10 PD-5 柱穴一覧

(2) 土 塙-3

柱穴の番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6
柱穴基底部の径	20	20	23	20	17	20
床面からの深さ	26	27	27	26	28	28

PD-5の南端より0.8m南に位置しており、南北2.7m、東西0.6m、深さ20～25cmの土塙であり基底部

は平坦である。堆積土は灰、黒褐色の土が下部まで堆積しており、土塙底部に密着して、5-15, 5-30, 5-29等の弥生式土器を検出しており、その土器の形状はPD-5内出土のそれと同類であり、本土塙はPD-5の住居外施設であると見てさしつかえない。

##### 5区の出土遺物

5区内より出土した土器はMP-1.1～PD-5床面のMP-1.45に至る遺物含合土より

出土したものが中心で、トロ箱に10箱検出している。器形、形状を知り得る遺物も若干あり、本遺跡の遺物を代表し、編年の中心をなすものである。出土した土師器と須恵器はPD-6より貫流する溝による流転堆積遺物であり、PD-5に直接関連のある遺物ではないと考えられる。

(1) 弥生式土器 1~59

壺形土器としては1~5はその口縁径からかなり器高のある壺形土器が考えられる。6~12は中型の壺の口縁であろう。いずれも口縁が大きく外反し、口唇端にヘラ描き凹線を2~5条つけており、1、4、10は口唇上部が立ち上がり、複合口縁化する傾向がみられる。胴~底部が併出していないので明瞭ではないが、2区出土の2-2、3の復原壺と同等の形状に近いものと考えられる。また小型壺の胴~底部としては、土城-2より出土している59が該当するものと考えられる。14は口縁が外反しかつ口唇端がかなり肥厚した形態で、他の区より出土は無い。

15~20は高環であるが、环部との接合状態、及び裾底部の外反から、15、16、17(高環I類)18~20(高環II類)の2形態に分類される。

23~42は壺形土器であり、43~52はそれらの底部と考えられる。30は完形品であり底部の小孔、胴部の煤の付着から帆として使用せられている。28、29は復原により完形品に近い形状である。出土している壺はその大半が器厚がかなり薄く、口縁は逆L字状を示すものからL字状を示すものへと変化する過程が把握できる。いずれも口縁径が胴径より上まわるという共通点を持っているようである。

上層から出土している壺は逆L字口縁でなく、かなり起きあがったL字状口縁状を示しており、その型も壺とも鉢とも判別のし難い形状である。

43~52は壺形の53~58は壺形の土器底部である。62は支脚で3本支脚で1支を欠く。

(2) 土師式土器

60は塔型土器で刷張りはゆるやかで刷毛目の調整がされている。61は器台状土器の上皿部と考えられる。

(3) 須恵器

63は环の蓋でつまみを持っており、高台环の蓋であり、7世紀中葉の手法の特徴を持つ。

(4) 壱製品

- |         |  |      |
|---------|--|------|
| ○手捏ね土器  | 口径5.7cm、器高4cm、底径3.6cm、上げ底0.6cm、厚0.8cm、焼成良    |      |
|         | PD-5 -125 出土                                 | 5-64 |
| ○       | 口径4.7cm、器高3.1cm、底径3cm、上げ底0.3cm、厚1.2cm、焼成普通   |      |
|         | PD-5 -120 出土                                 | 5-65 |
| ○紡錘車    | 直径4.8cm、厚0.8cm、孔径0.6cm、焼成良 PD-5              | 1    |
| ○分鋼型土製品 | 横約11cm、縦約10cm、厚1.8cm、形状約1/4、眉、目、つり下げ孔径0.2cm、 |      |

## (5) 石器

- 石鉄 長さ2.3cm、幅1.3cm、厚0.45cm、重さ1.18g、サヌカイト製、基部快入。5-5
- " 長さ2.6cm、幅1.6cm、厚0.54cm、重さ2.3g、サヌカイト製、基部やや快入。5-6
- " 長さ3.0cm、幅1.6cm、厚0.6cm、重さ2.3g、サヌカイト製、基部やや快入。5-7

Tab11 PD-5 出土土器一覧

単位cm \*復原値

Fig	器種	計測値(既往)	形・状・特徴	胎土・焼成	出土場所・層位・M P-値	土器辨出番号
5-1	甕	23.2 *	口縁部 口縁にヘラ描き四線5条 口唇上部が立ち上がる	良 硬	PD-5内 床面-20~15	
2	"	24.5 *	" " 2条	" "	"	
3	"	23 *	" " 4条	" "	"	
4	"	25 *	" " 2条 口唇上部が立ち上がる	" "	"	
5	"	27.5 *	" " 4条	" "	"	
6	"	17	" " 2条	" "	- 128	5-7
7	"	14.5 *	" " 3条	" "	PD-5内 床面-20~15	
8	"	12	" " 3条 口唇上部が立ち上がる	" 軟	土坑内 - 135	
9	"	12 *	" " 2条	" 普通	PD-5内 床面-20~15	
10	"	14 *	" " 4条 口唇上部が立ち上がる	" 硬	土坑内 " - 135	
11	"	12.5 *	" " 3条	" "	PD-5内 "	
12	"	12.5 *	" " 2条	" "	"	
13	"	19 *	" " 3条	" "	PD-5 第4層 - 111	5-31
14	"	31 *	口唇上部にヘラ刻目。 口縁にヘラ縁両文2条	砂粒 普通 が多い	- 113	
15	高环	19.5 縦部径 13	口縁にヘラ描き四線3条、脚部に5条、腹部に3条、脚中段に三角すかし10、内・外表面ハケ目調整、器高18.3	良 硬	上坡 - 138	
16	"	縦部径 12	脚部にヘラ描き四線9条、腹部に3条、脚中段に三角すかし5、底部に横を持つ。	良 硬	PD-5 第4層 - 113.5	5-35
17	"	縦部径 14	腹部にヘラ描き四線3条、底部がやや外反する。	良 硬	PD-5 内	
18	"	縦部径 10	脚部 縦部ヘラ描き四線1条	良 普通	PD-5	
19	"	8 7	縦部ヘラ描き四線2条	" 硬	" - 126	5-6
20	"	" 10	内・外表面ハケ目タテ、ヨコナダ	" "	" - 128	5-4
21	舞台	" 12.5	" 内・外表面共ハケ目タテ、ヨコナダ	" 軟	"	
22	高环	12	口縁部 口縁にヘラ描き四線4条、外表面ハケ目調整	" 硬	" 第4層下	
23	甕	17.5	口縁部	" 軟	" "	
24	"	16.5	口縁にヘラ描き四線1条、 口唇上部がやや立ち上がる、 底部ハケ目ヨコナダ。	" 硬	" "	- 110 5-34

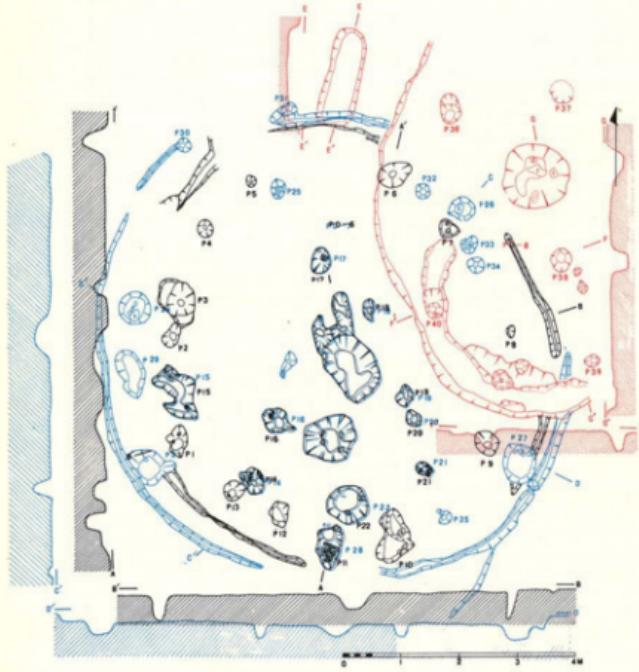
5-25	康	20	口縁部	口縁にヘラで凹状に削り、 口唇上部が立ち上がる。 頭部ハケ目ヨコナデ、内面 ハケ調整	良	普通	P D-5		
26	#	21.5	#	口縁が立ち上がり後、水平 に聞く。	#	硬	#	- 129	5-8
27	#	27.2	#	口縁にヘラ括き凹線1条、 口唇上部が垂直に立つ。 頭部にヘラ括き凹線2条。	#	#	#		
28	#	19.0 器高 6.4 29		口縁にヘラで凹状に削り、口唇上部 がやや立ち上がる。頭部に凹線2条、 頭部ハケ目ヨコナデ、削一底部ヘラ みがき、内部ハケ目調整。	#	#	#	- 110	5-34
29	#	19.5 器高 6 31.5		口縁にヘラで凹状に削り、口唇上部 がやや立ち上がる。頭部に棱線1条、 頭部ハケ目ヨコナデ、削一底部ヘラ みがき、内部ハケ目調整	#	#	#	- 126	5-0
30	#	19.7孔 1.8 5.8 器高 31.3		口縁にヘラ括き凹線1条、口唇上部 がやや立ち上がる。脣上部ハケ目タ テナデ、底部ヘラみがき、煤を付着 する。	#	#	土焼内	- 135	
31	#	14.6	口縁部	砂粒 多い	軟	P D-5			
32	#	15.3	#	口縁がく字状に聞く。	良	硬	#		
33	#	16.7	#						
34	#	12.7	#						
35	#	17.5	#		良	普通	P D-5		
36	#	16.6	#	割がかなり張り出し器高が 低い	#	#	#	- 114.5	5-5
37	#	22 備高 7.5 16.7		頭部にかけ外観ハケ日調整、底部上 げ底+1.2 厚0.7	#	軟	#		
38	#	32.2	口縁部	口縁にヘラ括き凹線2条	砂粒 多い	軟	#		
39	#	32.4	#	口縁にヘラ括き凹線2条、器部 に復原の貼り付け突起を付す。	良	硬	#		
40	#	28.6	#	口縁が水平に聞き口唇部が 上反する。	#	#	#		
41	#	22.4	#	口縁にヘラ括き凹線2条、 頭部にヘラ割目	#	#	#		
42	#	20.5	#	口縁にヘラで凹状に削り、 口唇上部がやや立ち上がる。	#	#	#	- 107.5	5-33
43	#	6.1	底 部 平底 厚1.1 ヘラみがき	良	#	#			
44	#	5	# # 1.3 #	#	#	#			
45	#	6.3	# # 0.3 #	#	軟	#			
46	#	6	# # 0.6 #	#	硬	#		- 128	5-21
47	#	6.1	# 上げ底+0.6 厚1.2	#	普通	#			
48	#	4.2	# # +0.2 # 0.8 底部 しばり	#	硬	#			
49	#	5.4	# # +0.1 # 0.5	#	普通	#			
50	#	7.2	# # +1.1 # 0.6	#	硬	#			
51	#	5.4	# # +0.5 # 1.4	#	#	#			
52	#	5.9	# # +0.8 # 1.1	良	普通	P D-5 第3層			
53	康	9	# 平底 厚2.5	#	軟	#			
54	#	5	# # # 2.3 ハケメタナデ	#	軟	#			

5-55	壺	10.3	底 部 平底	#1.4	良 硬	PD-5 第3層	
56	#	5.5	# #	#0.5	# #	# #	
57	#	8.1	# #	#1.3	# #	# #	
58	#	6.7	# #	#2.2 ヘラミがき	# 普通	# #	
59	#	6.7	器高約20cm。頸~胴部ハケ目調整 平底 厚0.7		# #	土埴内	- 138
60	壺	10.4	口縁部 小形壺型土器		良 普通	PD-5 第3層	- 115
61	器台	23	環部 口縁が水平に聞く		砂粒 多し	#	- 106
62	支脚	底径 8.2	器高約16, 3本支柱		普通		
63	蓋環	8.7	つまみ径1.4 ロクロ右回転		良 硬	PD-5 上部溝中より	- 101
64	杯	器高 4				PD-5	- 125
65	#	器高 3.1				#	- 120
66	分銅土 製品					PD-5 第3層中	

## 6 6区の遺構と遺物

### 6区の遺構

6区は発掘区域の西南隅に位置している。当区画のはば中央部には、南北に直径40cmの下  
第13図 6区の遺構図 (PD-6, 7, 8)



水管がMP (Master Point) -1.4mにおいて、幅70cmにわたり埋設されており、上層はかなり攪乱されていた。

MP -1 mにおいて東西に7m、幅50~70cm、深さ30cmの溝を検出した。溝内の堆積土は色の砂質土で、底部は砂砾を含んでいる。溝内からは土師式土器、須恵器を検出した。これらの遺物は、同溝の更に東方より流転堆積したもので、以下説明する6区内の遺構に伴う遺物ではない。この溝は先述の5区へと貫流するものである。

MP -1.3mにおいて堀り込みを発見し、その後木造構造は円形住居址2、楕円形住居址1、土址1の複合であることを確認した。従って、時期的に先行する遺構より記述する。なお、ピットの最下部は砂砾層である。

#### (1) PD-6 円形住居址

本遺構は、存在したと考えられる堀り込みの壁面下にある幅約10cm、深さ5cmの内周溝によって確認されたもので、その内周溝も断続的にしか残存していない。住居プランは、東西7m、南北7.5mで直径をほぼ7mとする面積約43m<sup>2</sup>の円形住居址である。床面は茶褐色の粘性土であるが、遺構の北東部はPD-8の切り込みによってかなり不整形である。

中央部には、南北1.5m、東西80cm、深さ22cmで、北側に浅い皿状の堀り込みを伴う不整形な窓池が掘ってあり、灰、木炭、黒褐色土を堆積しており、炉と考えられる。また、その30cm南にも直径80cm、深さ25cmの擂鉢状の窓地があり、内部からは焼土とともに燃焼のため表面が剥離した花崗岩の礫が3個検出されたため、これも前述の炉に対する補助的役割を果す炉と考えられる。両者とも後述のPD-7住居址の炉としても併用されたものであろう。

本遺構に伴う柱穴は、その形状及び深さの平均から、やや深く、いづれも中央の炉とほぼ等距離に存在するP1~13が該当すると思われる。柱心間は不均整であるが、主柱間の距離を約2mと仮定すれば、P1, 2, 4, 7, 8, 9, 10, 12は主柱穴とみて差し支えなく、従って9本あるいは10本を主柱とする構造が考えられる。炉址周辺のP14~22は柱心間の補助柱とも考えられるが、PD-7との併用も充分考えられ、重複するものと思われる。

Tab 12 PD-6 柱穴一覧

柱穴の番号	P1	P2	P3	P4	P5	P6	P7	P8	P9	P10	P11	P12	P13
柱穴の基底部径	20	12	10	8	8	10	16	14	14	18	21	19	11
床面からの深さ	56	40	53	33	10	43	36	50	38	30	38	33	45

#### (2) PD-7 円形住居址

PD-6円形住居址を更に拡張した形態で造られており、直径8mで、内部面積約50m<sup>2</sup>を持つ大形円形住居址である。現存する壁高は東側13.5cm、南側5.2cm、北側11.2cm、西側14cmである。内周溝は北、東、西側に本来存在していたと思われるものが幾分残されているにすぎないが、内周溝はPD-8楕円形住居址によって切り込まれた東北部を除いてほぼ一周している。雨落溝である内周溝は幅約10cm、深さ5cmにわたり壁面下に掘り込まれている。

中央の炉はP D—6の時のものをそのまま併用したと考えられる。

本遺構に伴う柱穴は、柱穴内部に礎石あるいは柱を固定する目的で詰められた楔石が検出される比較的浅く、径の大きいP 23～28がこれに該当すると思われる。ただP 28は他のピットに比してきわめて浅い。いずれにしてもP D—7はP 23～28を主柱とする6本主柱円形プランであると言えよう。P 33, 34は、P 26とP 27間の距離が他の主柱間に比較して長いため、桁材に添木をしたものではないだろうか。また、P 30, 31は壁に接して掘られており、内部施設のための補助柱の役割を果していたと考えられる。しかしながら柱穴に関しては前述したように、P D—6と併用した可能性が大きく断定し難い。

南側には堀り込みが南方に開いており、出入口かとも思われたが、発掘限界域に達しており、確認できなかった。

Tab 13 P D—7 柱穴一覧

柱穴の番号	P 23	P 24	P 25	P 26	P 27	P 28
柱穴の基底部径	30	23	17	26	40	22
床面からの深さ	23	30	26	13	29	10

P D—6との関連については、柱穴の配置状況から、P D—6のP 1, 3, 5, 7, 9, 11がそれぞれP D—7のP 23, 24, 25, 26, 27, 28

に拡張された可能性が強い。しかし、主柱数が9本ないし10本であったものが6本に減少し、しかも柱穴径の形状から柱材の大きなものが使用されていることから、内部面積を拡張すると同時に家屋構造にも変化を及ぼしたのではないか。

### (3) P D—8 楕円形住居址

P D—6, P D—7住居址の北東部に切り込んで造られている。しかし、既設校舎のため発掘区域を広げることができず全体の3分の1しか確認できなかった。堀り込みは西側と南側において最も現存しており、壁高は西側10cm、南側15cmである。

ほぼ中央部に直径1.2m、深さ25cmの鉢状の窪地が掘り込まれており、内部には、灰、木

Tab 14 P D—8 柱穴一覧

柱穴の番号	P 36	P 37	P 38	P 39	P 40
柱穴の基底部径	20	10	15	10	14
床面からの深さ	22	13	22	15	21

炭及び植物の炭化遺物を堆積しており、炉と考えられる。内部より熱焼のため表面が剥離した花崗岩の礫を3個検出した。

40が該当するが、その中で主柱の役割を果していたのはP 36, 39, 40であると考えられる。

床面は西南部において半円状に溝が掘られているが、本遺構に伴うものか、更に2次の遺構かの識別是不可能である。

### (4) 土塙—4

P D—7北側の壁面に接して掘り込まれており、南北1.5m、東西0.6m、深さ0.3mの土塙で、内部より弥生式土器片を検出している。貯蔵穴かとも思われたが、堀り込みの深さ及び

その形状から土括墓的性格が伺えるようである。

#### 6 区の出土遺物

6 区は遺物包含層が部分的には70cmの厚さもあり、かつ上層位の構の貫流により、土師式土器、須恵器の混入がかなり見られた。土器片の総数は600点を数えるが、遺構内に密着し、かつ形状を知り得るものはごく僅かである。

##### (1) 弥生式土器 1~32

1~6は壺形土器である。1は(壺・I類)に続く形状である。2は口唇が外方に裾ひろがりをみせている。4は複合口縁であるが、口唇の内傾が大きく、明瞭な凹線を付けており、他の区画よりの出土はない。(壺V類)5~7は(壺・II類)の系列に属するものであろうが、6は頸部に断面三角形の突帯をめぐらす。6は本遺跡初見である。10~13の甕は(甕IV類)に属するものが多い。14~21の高环は形状を伺えるものが無く、断定しかねるが、脚部に凹線を付けており、(高环II類)の傾向をひくものと考えられる。22~29は甕形土器の、31~32は壺形土器の底部と考えられる。

##### (2) 土師式土器 33~37

33、37は培型土器で、37は口縁が直立に近く内外面が刷毛目で調整されている。35は堆型土器の底部であるが、底部に煤を付着させている。34、36は碗型土器と考えられる。

##### (3) 須恵器 38~42

38~40は环の蓋で、38、39は稜を明確に付けている。41~42は有蓋环で身の返りは高く同一手法である。いづれもロクロで整形、ヘラみがきをほどこしている。ロクロ回転は38、40、42右、39左である。

##### (4) 土製品

- 紡錐車 4.7×4.2×0.5大で土器片を転用したものである。孔径0.5、焼成軟 2

##### (5) 石 器

- 石包丁 長さ6.5、幅4.8、厚0.5、片刃、2穴、径0.4、石質赤色硅岩製、磨製 6-4
- 石 刃 長さ6.3、幅6.3、厚2.2、磨製、石質綠泥片岩製 6-2
- 石 刃 長さ13、幅4.6、厚3、磨製、石質綠泥片岩製 6-1

Tab15 6 区 出土 土 器 一 覧

単位cm \*復原値

Fig	器種	計測箇所 口径 底径	形 状 の 特 徴	胎土・焼成	出土場所・層位、M P - 値	土器検出番号
6-1	壺	21	口縁部 口縁部 口唇部が肥厚	良 普通	P D - 6 床面~ M P - 125	
2	#	19	口縁部 口縁部 口唇部が肥厚する	良 硬	#	
3	#	25.5 *	# 口縁にヘラ描き凹線4条	*	#	
4	#	30	# 複合口縁、口縁にヘラ描き 凹線6条、底部ハケ目ヨコ、 タナナテ調整	*	#	

6-5	発	13.5	口縁部 口唇にヘラ描き凹線3条、 口唇上部が立ち上がる。	良	軟	P D-6 床面～M P-125 の遺物含合土より出土	
6	#	13.3	# 口縁にヘラ描き凹線2条、 頭部に三角突唇を配し、指 圧を付す。	砂粒 多い	硬	#	
7	#	15	■ # 口縁にヘラ描き凹線2条	#	硬	#	
8	#	15.2	# 口唇上脣が立ち上がる。	#	軟	#	
9	#	14.7	■ #	良	軟	#	
10	腰	24.2	# 口縁にヘラ描き凹線2条	#	硬	#	
11	#	17.4	■ #	#	硬	#	- 120 6-13-10
12	#	16.5	#	#	#	#	
13	#	13	# 塗成は土師質に近い。	#	#	#	
14	高环	-	坏 部 梁を持つ	砂粒 多い	軟	#	
15	#	-	脚 部 円形すかし、径1.3ヶ所	#	普通	#	
16	#	-	脚 部 脊にヘラ描き凹線4条	#	硬	#	
17	#	-	# 脚部にヘラ描き凹線8条	良	硬	#	
18	#	脚部径14.4	脚裾部 円形すかし 径1.3ヶ所 内面ハケ目ヨコナデ	良	普通	#	
19	#	-	脚 部	#	#	#	
20	#	-		#	硬	#	- 145
21	#	脚部径 8.7	脚裾部	#	軟	#	- 131.1 6-20
22	腰	10	底 部 平底 厚0.5 外面へラみがき	#	#	#	
23	#	6.3	# 平底 厚1.9 外面へラみがき	砂粒 多い	#	#	- 125 6-13-7
24	-	4	# 上げ底+0.2 厚0.8	#	硬	#	
25	#	7.5	# # +1.8 #1.5	良	#	#	
26	#	5.5	# # +0.3 #0.7	砂粒 多い	軟	#	
27	#	4.7	# # +0.3 #0.7	良	普通	#	
28	#	8.3	# # +1 #1.4	#	硬	#	
29	#	6.1	# # +1.1 #1	#	#	#	
30	-	2	# 平底 厚0.8	#	#	#	
31	壹	7.3	# # #1.4	#	#	#	
32	#	7.5	# # #2	#	#	#	
33	増	9.8	L4縁部 上師器	#	#	#	
34	碗	12.7	# #	#	#	P D-6	- 120
35	-	3.4	底 部 平底 厚0.7 突付着	良	普通	#	- 120 6-12
36	-	1.7	# 平底 はりつけ厚0.6	良	#	表接	
37	増	10.4 器高 1.7 19.2	口縁～脚外側 ハケ目ナデ 内面ハケ目ヨコナデ	良	硬	#	- 112.7
38	蓋環	14.8	器高 4.7 梁 ロクロ右 へラみがき	#	#	#	- 111.9 6-18
39	#	14.7	# 4.8 # #左 #	#	#	# 表接	
40	#	15	# 4.3 # #右 #	#	#	#	- 120 6-6
41	有蓋 环	14.7	身の返り 1.7 ロクロ右 へラみがき	#	#	# 溝内	- 105
42	#	15.1	# 1.8 # 右	#	#	# #	- 110

## 7 石器とその他の遺物

### 石 錫

石錫の出土例は7点であり、石質はサヌカイトである。

出土地点	形	状	側辺形状	剝離面の残状	調整打	長×巾×厚	重量
1 P D 2	平基無茎式	直	線的	中央部にあり	密	復元 2.8×1.5×0.3	2.3 g
2 P D 3	凸基無茎式	直	線的	大剝離面両面	粗	3.1×1.2×0.4	1.5 g
3 P D 4	凸基有茎式	直	線的	片面中央部	密	4.0×2.1×0.6	4.5 g
4 P D 7	凸基無茎式	外	湾弧	両面に大剝離	粗	2.8×1.3×0.4	1.0 g
5 P D 5	平基無茎式	左右非相称		片面に大剝離	やや密	2.3×1.3×0.45	1.1 g
6 P D 5	凹基無茎式	直	線的	両面に大剝離	粗	2.6×1.6×0.54	2.3 g
7 P D 5	凹基無茎式	直	線的	片面に大剝離	密	3.0×1.6×0.6	2.3 g

8 愛大 平基無茎式 不明 片面に大剝離 密 2.4×1.6×0.5 1.94 g  
(以前に出土)  
上図に示す、各遺物の特長はみられるものの出土例は少なく、土器でみられるパターンに平行する遺物決定にまではいたらないが、ただ凸基有茎式の石錫は有茎とはいえ錫身と茎とは明確ではない。やや変形に呈する石錫である。ただあえて触れるならば、文京式に共伴する時期の石錫は、母石よりの剝離面を残した刃部の調整が行なわれている点においては共通性を見出しえる。

剝離片7, 8の他に2点同様の剝離片を検出しているが、用途については不明である。

### 石包丁

石包丁は、表採遺物を含めて5点の出土を見た。これらの内、完形なるものはP D 7より出土を見た26図4の5でやや内弯刃の石包丁と、明らかに外弯刃の石包丁26図6の4とわずかに外弯の刃をもつ石包丁と半ば損失しているが、打製矩形の石包丁と推察できる1と3がある。1, 2は一方からの穿孔によるものに対して2, 4, 5は、両面よりの穿孔となっている。石質は5点とも伊予の青石と呼ばれる緑泥片岩を使用している。

また石包丁N O 5は一つの穿孔に対してN O 3も一孔と考えられるが、他の3点については2個の穿孔を持つ石包丁と見るべきである。

更に1~3は両端を明らかに打法による調整にするのに対して4と5は研磨による調整となっている。また背部にも調整を行なうものに2~5があるが、体部の研磨は刃部に対して平行に実施されているもの3と刃部に斜行研磨となるもの4と平行と斜行を併用したものに5がある。1と2とは、刃部に平行する半磨製である。

出土層位から考察すれば、2, 3は弥生式土器と共に伴したものであり、本稿で記述したいわゆる文京式土器にともなうものであった。4, 5は、P D 6及びP D 7より出土したもの

であり、これと共に伴するものは我々がすでに調査報告及び概報にて公表した釜ノ口及び北久米遺跡より出土例を見ているものと共通する土器（大空、安国寺）が、いや筆者等の考察を次期報告書にゆだねている古式の土師式土器（布留）に共存するものと見ているものである。

### 石斧

石斧の検出は P D 6 の遺構に伴なって出土をみた 2 例は共に破損しており、石質は緑泥片岩を利用したものであり、全面を磨製調整しているが、石斧 1 は両端を欠損しており不明、2 は扁平な端部のみの出土であり不明であるが、石斧と見ればかなり大型なものとなり先端部の調整から見る限り石斧と見るより石棒とすることは如何であろうか。

### 砥石

砥石として利用された顕著なもの 5 点を図化したが、石質は 4 区で出土した砂岩の砥石以外は俗にいう伊予砥である。伊予砥は、当地より南方の愛媛県伊予郡砥部町より産出する砥石である。

これら 5 例の砥石の内使用上の位置関係から区分すれば、ある一定の位置（場所）で使用したと推察される砥石 3, 4, 5 がある。これに対して携帯用の砥石と推察される 1, 2 とに分類され、ただ共通する条件として考えられるものに、研磨のために使用した研磨面が 4 の 2 面の外はいずれも四面を用いている。

研磨面に残された条痕からして鉄器を研磨した砥石と考えると共に、P D 3, P D 5 において検出された砂岩砥石には明らかに利器の刃先調整の跡を残しているほか、出土砥石のすべてに利器の刃部の刃こぼれの跡が残されている。研磨角度から見れば 1 ~ 2 の砥石においては、緩やかなカーブを描くのに対し、3 ~ 5 の砥石における研磨角度は丁字状の急なカーブとなっている。この角度の差異は、3 ~ 5 の砥石は研磨を主目的とした砥石に対して、1 ~ 2 は使用時の刃部の調整に主たる目的をもつ砥石と理解し、この事により 1 と 2 を携帯用もしくは仕上げ砥石としての役割を果たしたと見たい。

鉄器の出土こそ見なかったが、これら砥石の状態からして文京式と呼ばれる時期には鉄器を中心とする工作用具の普及が考えられるとするならば、これに伴う木器の発達が著しくなり、農耕用具や屋内外の生活用具の考察がなされるにいたったと理解する。

これら木器類の松山平野における発掘による検出例は毎年増加し、34 年の土居窪遺跡の平鍬を検出以来久しく発見例を見なかったが、47 年度の古照遺跡をはじめ、<sup>註 1</sup>バイパス工事に伴う発掘調査において、釜ノ口、福音寺竹の下、小坂 3 丁目遺跡等から北久米前川遺跡、数多くの木器及び木器未完成品を出土しており、弥生後期から古墳初期における松山平野の農耕生活の発展に平行して木工用具の舞台へと発展したことが立証される。<sup>註 2</sup>

その他に卵状の磨製石器を検出している、用途については不明である。

注1 土居塗遺跡の発掘調査 岡本・西田

注2 墓藏文化財発掘調査概報 市教委

釜ノ口発掘報告書 市教委

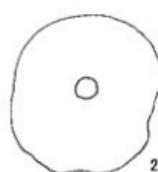
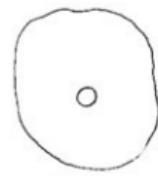
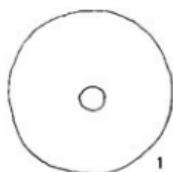
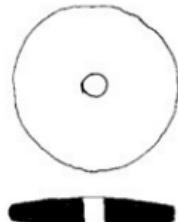
### 土製丸玉

土製丸玉はP D 4とP D 5よりそれぞれ1個出土しており計測値は

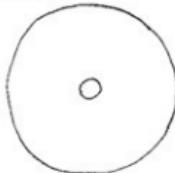
出土地点	形状	穿孔	重量	色
No.1, P D 4	卵状	0.5cm	33.9g	0—14—0
No.2, P D 5 (ソロバン玉)	球状	0.3cm	37.3g	(4—16—4 4—13—3)

N O 1 の I 玉は穿孔による片面に突起状の突出しの稜が見られる。また色調面でも胎土色がうかがえない程に媒煙が付着しており、焼成時のすすと見たい。

### 紡錘車



第15図 紡錘車実測図



(十亀幸雄氏実測)

紡錘車もP D 5とP D 6より出土している。その計測値は、

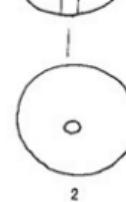
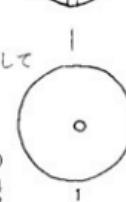
形状	穿孔径	重量	色	調	径	厚み
N O 1 円 盤	0.7cm	22.1g	0—12—0		5 cm × 0.5—0.8cm	
N O 2 陽丸方形	0.6cm	12.0g	4—16—4	(たいしゃ色)	4.6cm × 0.45	
以前出土円 盤 状	0.7cm	31.5g	6—16—3	(黄茶)	5 cm × 1.1cm	

N O 1 は意図的に作成したものと考えられる遺物であるが、N O 2 は器物の破損品を応用して第2次的な加工したものである。工学部本館建設時出土のものは有意的土製品。

### 分銅形土製品

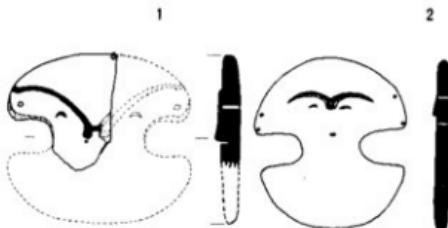
本遺跡での出土遺物の内、特記すべき出土遺物の一つである分銅形土製品の破損遺物がある。

第14図 土製丸玉実測図



遺物は $\frac{1}{2}$ 程度のものであるが、器には眉、目、鼻穴、垂飾穴が明らかに残っており、図の如き復元図となった。

第16図 分銅形土製品実測図



本遺跡出土分銅形  
土製品復元図

松山市御幸寺山東山麓で発見した  
分銅形土製品（市重要文化財）

本県における銅土製品の出土例としては4例を上げ得る。その内完形品としては図示した御幸寺山東山麓で発見をしたもの以外は、破損品である。また現在までの発見例は、松山平野で3例と北条市の発見例のみである。松山市における他の1例は、県立運動公園予定地内の発掘調査による発見と北条市において出土遺物であり、北条市における遺物は下部のみの発見であり、上半部の形状は不明である。  
(注1)  
(注2)

残る3点の対比について述べ若干の考察を加えたい。

県立運動公園（南丘遺跡）の出土遺物は現在県立歴史民俗資料館に展示され、一般公開をされているが、現段階では計測不可能のため形状のみに触れたい。南丘出土遺物も本遺跡出土品と同様に $\frac{1}{2}$ 程度の破損品である。出土遺物は、頭部と推定される部分に0.1~0.2cm程度の突刺しの痕が10数個みられると共に他の2例に見られる垂飾のための孔は、3個見られる3点、眉は御幸寺山東山麓出土の土製品と類似しているが、眉の下部に鼻と推定される穿孔がある。全体の色調は黒くすすけて見えた。図示第17図の2に見られる土製品は完品である。現在の遺物表面はやや磨耗しており、出土当時に推定されていた頭部の刺突は判別しがたい。優美な眉と三ヶ月形の目、うつろなる口はまさに女性を表わすかに見られる。垂飾孔は左右に2個穿たれているが、右の間隔は倍となっている。その計測値は、

上下最大長	中	胸部のくびれ	脇部	厚さ	鼻	重量	色調
御幸出土10cm	9.1cm	2.8~3.1cm	3.4cm	0.8cm	0.3cm	85g	4-16-4(明るい茶)
文京遺跡10cm	11cm	2.8cm	5.5cm	1.2cm	0.4cm	60.3g (240g以内) 復元	4-16-4(塗泥色)

以上の計測値の示すごとく、文京遺跡の出土品が、やや肉厚で重量の復元値から見れば約3倍となる。さらに土製品の上面の容姿の差異は眉、目、鼻孔などにも見られる。四線文をともなう文京式土器群と共に、しかも住居址内より出土していることに特に注目をしたい。

注1 愛媛の文化第3巻

注2 北条市的人文、自然 昭和40北条市刊。

## 第V章 土器分類

本遺跡の各造構の出土遺物をP D—5住居址出土遺物を中心とした関連図を作成することによって、遺物の分類を試みた。頭番号は区画、尾番号は実測番号を示す。

Tab 土器分類一覧表

壺			甕		高環			
A	B	C	A	B				
			I類 4-3 5-26 II類 5-23~25 2-12	V類 1-1 甕類 5-40 4-4				
I類 2-7, 8-9 3-4 3-1 5-7~12 5-59	2-2, 5, 6	2-1, 4	III類 5-27~30	IV類 3-7 5-39	I類 5-15, 17 3-15	1-6 5-16 5-22	2-15, 19	
II類 6-5, 6, 8	Y類 5-14 6-3 W類 6-4 2-10, 11, 14	N類 3-9, 13 5-42	IX類 3-6 5-38 3-8 5-41 6-10	II類 2-14, 5-18~20 1-5, 6-16, 17	目類 3-16~19 5-14, 15 18-20			
N類 3-10, 6-11, 12		Y類 3-11 5-31~35						

Tab 内の枠組み内の土器群を一セットと見なしたのは、P D—5住居址南の土坡底部に密着した形で、甕5—30、高环5—15、壺5—59、同口縁5—8、10を出土しており、これらの土器は、全て、P D—5住居址内出土の各土器及び1~6区各造構内の出土土器の形状と同一、一致していることによるものである。さらに壺A、B、C、高环A、B、Cは一連の凹線を付してあり、甕Ⅲ類と共に本遺跡内における最も多数をしめる出土遺物であることを考え合わせ、壺I類(A, B, C) 甕Ⅲ類、高环I類(A, B, C)をもって本遺跡の一標準様式を設定し、本セットを持って文京式土器とするものである。(土器相対編年図参照)

この文京式土器を細区分するならば、壺I類、高环Ⅲ類、甕I類をもって文京式I、壺II類、甕IV類をもって文京式IIとするものであるが、双方にさほどの年代差は認められないものである。

また、逆L字口縁から派生した甕形土器はI類からV類に分化され、これらの甕型土器を総称して文京式甕型土器とするが、類系的に把握できうるのはI~IV類までである。

(以下土器番号は「松山平野部弥生式土器編年図」の番号と一致するものである)

## 1 壺I類 A (1~12)

口縁径12~16cm、器高約20cm前後的小型壺である。いずれも口唇端にはヘラ描きヨコナデによる凹線文を2条~4条付しており、口唇上端が肥厚し、若干立ち上がりを示す形状である。いずれも口縁内面~口唇~頸部外面にいたるまでヨコナデがほどこされており、ヨコナデの際の押圧により、口縁下にゆるやかな突出を示すものもある。(2, 3, 5, 6, 11) 頸部にかけてはヨコ刷毛目によって調整されており、胴~底部にかけてはヘラ磨きによる調整もみられる。(12)

### B (13~18)

口縁径17~23cmの中型の壺であろうが、器高は不詳である。Aと同じく口唇端に凹線文を2~4条付しており、口唇端が肥厚し、若干立ち上がるものと、大きく肥厚し外反するもの(17)もみられる。(16)は凹線文を3条めぐらした上に、円形布文を貼りつけている。いずれも口縁内面~口唇~頸部にかけてヨコナデがほどこされており、頸部に若干、ヨコ刷毛目で調整しているのもみられる。(15)

### C (19~27)

口縁径23~27cmで、器高は約50cm前後の壺と推定される。口唇端に凹線を2~5条付して(19, 20の復原値より)おり、口唇上部が肥厚し、かつ立ち上がりをみせ、複合口縁化する形態もみられる(21, 24), (21, 23)では凹線を付した上に、ヘラによる刻目をほどこしている。(20)では頸部に凹線と刻目を、(21)では頸部に指頭によるひねり貼付文2条を付す。いずれも口縁内面~口唇~頸部外面にかけてヨコナデがほどこされており、(21)は頸部外面にヨコ刷毛目、頸部下にタテ刷毛目による調整がなされている。底部は(20)においては平底である。19, 20の復原状態では胴部の形状が定かではないが、卵状のふくらみを持つ胴を持っているものと考えられる。壺I類A, B, Cは口径こそ違えども、用途による大小の差であり、形状的には同一手法の壺型土器と理解できうるものである。

## 2 壺II類 (28~33) [31~33は東雲神社長者半出土]

口縁径13~19cm、器高28~33cmの壺型土器である。口唇端にやや弱い凹線を付しているが、頸部から口縁にかけての曲りがやや大きくなっている、頸部断面3角形状の貼付突帯をめぐらし、指頭压文を付している(30)。(32, 33)では突帯のみ、(31)は刻目を付す。いずれも口縁端はヨコナデによって変化しており、立ち上がりをみせるもの(31)、さらに下方にくびれるもの(32)、上部を削るもの(33)などである。口縁内面~口唇~頸部外面をヨコナデしており、頸部にはタテ、ヨコ刷毛目による調整がみられる。(31, 32)は胴部は卵状の丸みを持っており、底部は平底であるが、(33)は若干上げ底ぎみである。(31, 32)は壺全体としてのひずみがあり、(32, 33)の底部に近くには意図的にあけられたとみられる破孔がうがってある。これら(31~33)の壺型土器は祭祀用の土器と考えられる。

**3 壺III類** 本遺跡では該当なし、但し、愛媛大学構内より出土しており、他地区の類似する壺とによって形式設定することが可能である。

#### 4 壺IV類 44~46

口縁径13~17.5cmであり小型の壺であるが、く字状口縁に続く胴が丸くなっている、かなり胴のふくらみを感じさせる。ハケメで調整されているものもあるが(44)ほとんど胎土、焼成が悪く、粗雑である。(44)は口縁径17.5cm、(45)は同13cm、(46)は同14cmである。

#### 5 壺V類 (34~36) [35は愛媛大学構内出土]

極端に口唇部が肥厚した形状を示している。(34)は口縁径31cmで口唇内傾面にヘラ描き山形文を2列めぐらし、口唇端に刻目で付す。(35)は口縁径33cmで口唇端にヘラ描き凹線を5条付す。いずれも口縁を溜斗状に開き、口唇端を極端に肥厚化する事によって、複合口縁化している。(36)は口縁径25.5cmで、口唇端に凹線を4条付す、いずれもヨコナデがほどこされており、35はヨコ刷毛目がみられる。

#### 6 壺VI類 (37~43) [37, 38, 41は愛媛大学構内出土]

壺VI類は、口縁を折り上げ複合口縁にしたもの(37~39)と口縁部に、別途に整形した口唇を貼り付けたもの(40~43)に大別できよう。

(37)は口縁径32cmで口唇端に5条の凹線を付す、(38)は口縁径33.5cmで口唇端に4条の凹線を付す。(39)は口縁径30cmで口唇端に6条の凹線を付す、口縁内面~頸部にかけてヨコナデをほどこし、頸部にはタテ刷毛目調整がみられる。(40)は口縁径21cmであるが口唇端に施文はない。(41)は口縁径24cm、口唇端に櫛描き流文文をめぐらす、口縁内面~頸部にかけてヨコナデをほどこしており、頸部にはタテ刷毛目調整がみられる。口縁内面における口縁と口唇の接合部分にヨコナデによる接合を容易にするためのヘラによる切りこみ跡が頸著に残っている。(42)は口縁径20cm、口唇端に櫛描き流文文を二列めぐらす。(43)は口縁径23cmで口唇端に凹線を3条付す。

#### 7 壺I類 1~4 [3, 4は北代出土]

口縁径19~20cmと30cmの二種類であるが、いずれも口縁は逆L字状に水平に開き、頸のくびれも、胴部の張りも見られない形状である。(3)は口唇端に凹線を1条付している。口縁内面~口唇~頸部外面にわたって、ヨコナデがほどこされている。器高は30cm内の豪華かと推定される。色調 明るい茶(4-16-4), 胎土色調灰茶(4-16-2)

#### 8 壺II類 5~8

口縁径17~23cmで、口縁はほぼ水平を保っているが、口唇上端がヨコナデの圧力のためか立ち上がり、口唇が凹状に、かつ肥厚された形状であり、(8)には明瞭な凹線を1条付す。いずれも口縁内面~口唇~頸部外面にかけてヨコナデがほどこされている。頸から胴にかけて、若干の張り出しが見られる。(6)は頸部にタテ刷毛目をほどこし、その上部口縁下にヨコ刷毛目による調整をしている。頸内部に斜め刷毛目をみられる。(7)は頸部にヨコ刷毛目、頸部下にタテ刷毛目をほどこしており、タテ刷毛目は(8)にも胴部にかけてほどこされている。器高は慶田類と同等と考えられる。色調 茶色(4-14-4)

#### 9 慶II類 9~12

口縁径19cmと27cmの二種類である。口縁は慶II類より起き上がりく字状を形成はじめている。口唇端上部は明らかに立ち上がり、口唇をヨコナデし突き出したものをさらに引き上げた形状であり、(12)には明瞭な凹線を1条付す。いずれも口縁内面~口唇~頸部外面及び底部にヨコナデをほどこしており、頸部から胴部にかけてタテ刷毛目、胴部から底部にかけてヘラ磨きによる調整をほどこしている。内面にはタテ刷毛目があり、(10, 11)には口縁下にヨコナデによる細突起線とヨコ刷毛目を付す。底部はいずれも平底で、下底部から直立した部分にはヨコナデがみられる。(12)は胴部に煤が付着しており、底部の小孔から帆として使用せられたものであろう。器高は29~32cmである。色調 明るい茶(4-16-4)

#### 10 慶IV類 13~22(15は北代出土, 16~21は東雲神社長者平出土)

口縁はく字状に内側に起き上がった形状をなしている、口唇端はいずれも、施文は無いがヨコナデによって口唇端上部にかけて凹状になったもの(13, 22)と、単にヨコナデをし、下にくびれたもの(18)かるくヨコナデをしているのみ(14~17, 19~21)とがある。いずれも口縁内面~口唇~頸部外面にかけてヨコナデをほどこしており、さらに(16~19)は口縁内外面をヨコ刷毛目によって調整している。(16, 17, 19)は底部から胴部に、(17)は頸部にも煤が付着している。形状的には胴のふくらみが、慶2類よりはややあり、肩上がりぎみな慶といえよう。しかし、慶I, II類と共に胴部径が、口縁径を上まわるものではないという共通点は維持している。底部は(13~15)では明確でないが、(16~20)においては上げ底であり、底部はくびれた後、再び襷を開いている。底部にはいずれもヨコナデがほどこされており、(17~19)は胴部から底部にかけてはヘラ磨きもほどこされている。器高は21が26cm, 20が33cmである。

#### 11 慶V類 23~30

口縁径は12cm~18cmであり小型化しており、形状も胴張りのない系列で口縁はいずれもく字状に開いているものであり、口縁部内外にヨコナデが見られ、刷毛目で調整されたのもあ

るが、その形状、胎土、焼成も、甕I～IV類と比して粗雑であり、(31, 33)はその焼成において土器に近いものである。

#### 12 甕VI類 (34, 35) [34は北代出土]

口縁径32cmで、口縁は水平に開き、頸部に突帯を持つF字状口縁を形成している。口縁～頸部にかけて、ヨコナデをほどこし、口唇端に刻目を付し、頸部には指ひねりによる指頭圧文突帯をめぐらす。

#### 13 甕VII類 (36, 37)

口縁径28.5cmで、口縁は水平に開き、口唇端を上部に屈折させており、口縁内～外面にヨコナデをほどこしている。類似形の出土例は少ない。下底部の形狀は不詳である。

#### 14 甕VIII類 (38～40) [38は北代出土]

口縁はいずれもく字状に開いているが、その口縁径、施文は異なる。(38)は口縁径18.5cm、口唇端に瓜形の押圧文を付し、頸部には指ひねりの指頭圧文突帯をめぐらす。(39)は口縁径32cmで、口唇端に明瞭な凹線を2条付し、頸部には指ひねりの指頭圧文突帯をめぐらす。

(40)は口縁径は26cmで、口唇端に明瞭な凹線を2条付し、頸部にはごく薄く櫛目を流水状にめぐらしている。いずれも口縁内面～口唇～頸部にかけてヨコナデをほどこしている。

(土壓印式の甕には凹線は付されてないが、形狀において類似性を求めることができる)

#### 15 甕IX類 (41～45)

形狀的には(45)が胸張りを持っているのを除けば、口唇端に2, 3条の凹線を付しておらず、(41)は口縁径32cmが最大で43は口縁径20cmである。(45)の頸部にはヘラによる刻目をめぐらす。

#### 16 高坏I類 A (3～5)

口縁径20cm、器高18cmで凹線を内反した口縁部に3条、脚部に5条、裾部に3条、付しており、その中間に二等辺三角形状の透孔を縱方向にうがっているが透孔はいずれも内側には達していない。口唇上端はヨコナデによって凹状になっている。口縁内面～外面、及び裾部にはヨコナデかほどこされ、口縁および裾内部にはヨコ刷毛目が、坏部外面～脚上部にかけてはタテ刷毛目による調整がみられる。裾底部はヨコナデにより肥厚し、上方に立ち上がる。坏部と脚部とは別造りによる整合形態でありこれはB, Cにも共通する。

(1)では脚部に施文はほどこされていない。脚もしばられていない。  
B (6～8)

口縁径12cm、器高約16cm、高坏Aに比して坏部が碗状をなす。口縁に凹線を4条(6)、脚部に9条、裾部に3条付し、その中間に二等辺三角形状の透孔を5方向にうがっているが透

孔は内側には達していない（7），口縁内～外はヨコナデ，口縁部にヨコ刷毛目，坏部はタテ刷毛目によって調整しており，脚部にもタテ刷毛目及び裾部外面にヨコナデが見られる。

**C (2, 9, 10, 11, 12)** [12は伊佐瀬出土]

口縁径23.5cm，器高20cm，（9）では口縁に凹線を4条付し，（10）では，脚部に4（5？）条，裾部に5条，裾底部に2条の凹線を付し下段に二等辺三角形状の透孔を6方向にうがちいずれも内側に達していない。（2）では脚上部に5条，中部に4（5）条，裾部に4条，裾底部に2条の凹線を付しておらず，上，下段にやはり二等辺三角形状の透孔を10方向に穿つものである。（12）は坏部を欠いているが，（2）と同じく二段に二等辺三角形状の透孔を上段は17方向に，下段は19方向に穿つ。（14）も脚の開きから二段の透孔を持つものと考えられる。いずれも口縁，脚裾，外面にヨコナデをほどこしているが若干時期は下るものである。

これらの高坏I類，A，B，Cは口径，器高の大小はあるが，凹線文の配列，及び透孔の形状等から同一技法によるものと理解することがより妥当である。

**17 高坏II類 (13~21)**

（15, 16）は脚裾に底部との稜を設け，（16）には凹線を1条，（18）には2条めぐらしている。（17）は口径24cmで，坏口縁が垂直に立ち上がり（19）は口唇が水平に開き，口唇端をヘラヨコナデで調整している。

**18 高坏III類 (22~28)** [22, 23は愛媛大学構内出土]

いずれも，破片で，形状を知り得ないが，脚部に，（22, 23）は円孔を4方向に（24, 25）は3方向に穿つ，（26~28）の脚は柱状脚に近い形状をしている。

**19 底部 (1~29)**

土器底部（1~7）は平底で底部が下底部から直立しており，ヨコナデがみられる，脚部にかけてはヘラ磨き調整がされている，變I~III類の底部と考えられる。（8~20）は上げ底で底部はくびれたのちに裾をひらく，ヨコナデがほどこされ，脚部にかけて，ヘラ磨きもされている。變III~IV類の底部と考えられる，（21~29）は底部も小型であり，變V類に該当するものであろう。

## 第VI章 土器の相対年代

文京式土器は、各土器の口縁部、口唇端に、ヘラヨコナデによる凹線文を数条付けるという特徴を持つ土器である。この凹線文をほどこしている土器群は、瀬戸内海沿岸の各地域に、畿内の影響を強く受けながら急速に伝播、派生したものと考えられ、弥生時代中期後半迄には、各地に浸透、普及していたものとされている。

松山（道後）平野においては、平野北部の山系に沿って、松山市道後祝谷地区、同市南町地区、同市文京地区、同市鷹ノ子地区、同市今吉地区に、また、平野部では、同市久万ノ台地区、同市中村・小坂地区、同市東石井地区、同西石井地区、同市来住地区に出土例があり、南部の山系に転ずれば、伊予市行道山一帯、松山市高尾田地区、同市津吉地区、温泉郡重信町下林地区等に出土例があり、平野全域にわたって凹線文系の土器を出土すると言つても過言ではないであろう。また、温泉郡中島町中島、由利島にもその出土例が見られる。

これらについては出土例はあるものの、断片的な発見に留まっており、遺構に伴う土器は少く、さらに住居址内より併出するものは僅かである。したがって、断片的な遺物による略編年もなされてはいるが、ここでは、文京遺跡の住居址内より出土した、文京式土器を松山平野における標準形式として、現在の時点において、各地区より出土している土器類を文京式土器と関連づけ、同系列の土器群について総括してふれると共に、文京遺跡の成立年代を換言するものである。

なお本文中の番号は巻末に付した「松山平野部弥生式土器編年図」に対応するものである。

注1 伊予市行道山（標高403m）、山頂から山麓にかけて凹線文系土器を出土しているが、複合口縁土器が大半をしめており、若干時期は下るが、高地性遺跡として把握されている。

注2 松山市久谷地区から、伊予郡砥部町原町にまたがる「県営運動公園」建設予定地内の糸迦面山、西野田区からは凹線文を付す多くの土器が出上している。この遺跡は、昭和48~50年度にかけて愛媛県教育委員会が実施し、西田栄を調査團長として、犬飼徹夫、大山正風、河野藤吉、芝田幸光、長井數秋、秦清昭、森光晴、守田五男、八木武弘、山本雅夫、吉本拡、米倉豊等が調査員として従事した。出土遺物の一部は愛媛県立歴史民俗資料館に公開展示されている。

注3 重信町誌 P-68、図3

注4 十亀幸雄 歴史学研究月報--59-- 愛媛大学歴史研究会

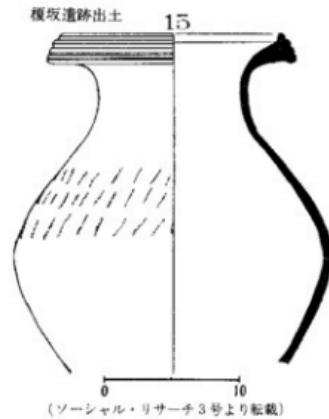
### 1 臨I類 (A, B, C) 1~27

型の大小の差は認められるが、同一の技法を持って製作された土器と考えられる。この四

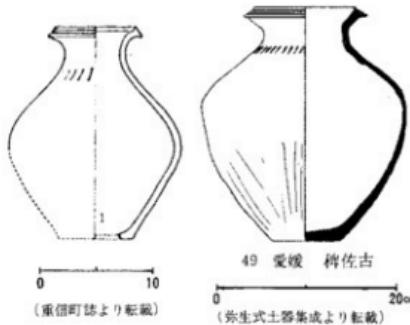
縦文を口縁、及び口唇端に持つ類似壺型土器を県下に求めるならば、最もその形状において温泉郡重信町下林仙寺幸寺芋根出土の壺型土器、及び松山市上野～伊予郡砥部町原町にまたがる、県営運動公園建設敷地内の釣跡面1号住居址出土の壺型土器、越智郡上浦町櫻坂遺跡出土の壺型土器が該当する。県外では、岡山市上伊福遺跡、同県児島市葦池遺跡、香川県三豊郡詫間町紫雲出山遺跡より出土する、紫雲出山II様式に属する壺A<sup>2</sup>にその類似性を求めることができよう。

これらを比較するに、凹縦文の施文、ヨコナデ、タテ刷毛目、頭部の指ひねりの指頭圧文、ヘラ描き線、口唇部が肥厚する等の共通性を持っているが、口唇部の立ち上がり、外反、頸部から胴部へのふくらみ等に若干の相違が認められる。新居浜市船木の檜端遺跡より出土する壺にも共通点が見られ、今治市阿方大池周辺にも壺I類A型に類似する壺の出土例が知られる。以上の土器群との関連から、弥生時代中期中葉後半に位置すると考えられる。

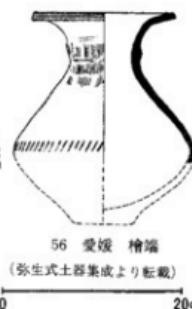
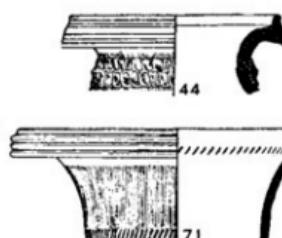
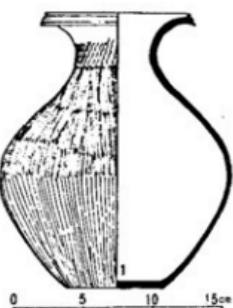
櫻坂遺跡出土



下林仙寺幸寺芋根出土



紫雲出山II式壺A



注5 弥生式土器集成 P49 P L35-22

注6 " P51 P L36-54

注7 " P52 P L25-55, 56

注8 同池周辺より壺I類A, 高环I類B, 壺IV類を出土する。(八木武弘氏の教示による)

## 2 壺II類 (28~33)

口唇端に凹線文を僅に残しているが、口唇上部が起き上がると共に、頸部に断面三角形状の突帯を一条めぐらし、刻目あるいは指頭压文を付している。東雲神社長者平出土の壺では、その形状は球～卵状の胴部のふくらみを持っており、これらの中基本形式は今治市中寺付近より出土する土器群を一形式とした中寺式の壺型土器の中に一例を求めることができる。しかし、中寺式を継承するという意味ではない。近辺では、松山市道後アリ山より出土のアリ式の壺形土器、土居塗遺跡出土の壺形土器にも壺全体の形態において類似性を求めることができる。後述の壺IV類とセットをなすものであり、壺I類即ち文京I式と若干の年代差を生じながら存在したものと考えられる。本遺跡内での壺II類は全てP D-6～8住居址内遺物含合土中より検出しており、P D-5住居址との建築年代の差を示すものであろうか。

注9 中寺式と称す一群の土器は阿方系列下の各種、かなり幅広い範囲を持って示されており、将来編年上再検討しなくてはならない。ここで言う中寺式とは施文が省略され球～卵状の胴を持つ壺型土器を示しており、便宜的に中寺II式としておく。

注10 アリ式土器、壺に2形態あり、併出するも、口唇端にヘラ描き沈線、頸部に9条の断面三角形状をめぐらす壺と、頸部にヘラ描き文を持つ卵状の胴部を持つ壺とは、その焼成、胎土とも異っており一形式に分類されるには問題を残しており、検討の余地を残している。

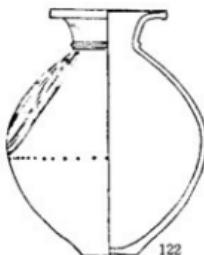
## 3 壺III類

本遺跡では出土例をみなかったが、愛媛大学構内より出土しており、IV類の先行形式として想定される。教育学部周辺より出土した口縁部は口縁径15cmで、口唇が肥厚するものの、

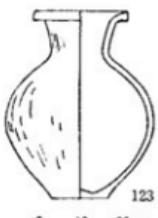
中寺式土器



121



122



0 10 20cm

(「愛媛の文化三号」より転載)

口縁から頸部にかけてゆるやかにく字状に開いており、同類似形は、松山市御幸寺山東麓、同市垣生八反地、同市三津久万ノ台大塚より出土する土器に求めることができる。これらの壺は、その形状からみて弥生時代後期初頭に位置づけられるものであろう。これらの壺Ⅲ～VI類に関しては、国道11号バイパス各遺跡等より出土している弥生式土器、及び土師式土器との関連把握の段階において、後日論じたいのでここでは計測値のみ記する。

御幸寺山東麓出土一口縁径13.5cm、頸部に突帶を持ち、刻目を付す、胴径20.5cm、平底径6.8cm、器高28cm。

垣生八反地出土——口縁径14cm、頸部に無文の突帶をめぐらす、胴径20.5cm、平底径8.5cm、器高28.5cm

三津久万ノ台大塚出土一口縁径11.5cm、口縁外側にヨコ刷毛目、底部にかけてヘラ磨き、胴径20cm、平底径5.5cm、器高24.5cm

#### 4 壺IV類（44～46）

形状は口縁から頸部が楕端にくびれており、胴部は球状を示す、弥生時代後期終末期の壺と考えられ、く字状の頸部に統く胴部はかなり丸くなつており、壺とも甕とも判別し難い器形にかわりつつあるようすが伺える。これら小型の壺の類似形を求めれば、愛媛大学構内出土の壺と、松山市南町、北条市上難波夏カリ出土の壺に求めることができる。これらについても計測値のみ記する。

上難波出土一口縁径10cm、頸部にかけてヨコ刷毛目、胴径15.7cm、平底径5.7cm、器高17.5cm。  
大学構内出土一口縁径12.5cm、頸部に0.2～0.3cmの小孔を四方向に穿つ、胴径15cm、上げ底+0.4cm、径6.5cm、器高15cm。

南町出土——口縁径16.5cm、胴部径18.5cm。

#### 5 壺V類（34～36）

口縁部が大きく漏斗状に開き、口縁径からかなり大型の壺型土器と推定される。これらの特徴は口唇端を極端に肥厚させており、他に例が無い。瀬戸内一円にその類似性を求めて、中期～後期の各遺跡からの出土の適例を求めて得られなかった。この肥厚口縁は壺I類の肥厚した口縁内傾面に肉付けすれば生じる形であり、そのあたりに基盤が求められよう。この肥厚した口縁の内傾面、及び口唇端内側を削り落とせば、複合口縁の断面と共に通する形状となりうるわけであり、筆者達はこの壺V類が複合口縁化にいたる過程の原形ではないかと把握するものであるが、出土例が少いことから今後の比較検討を待ちたい。時期的にはその施文のヘラ描き鋸歯文や凹線から、中期的要素を持っていると考えられる。

#### 6 壺VI類（37～43）

口縁だけで、器形を知り得るものはないが、口縁から口唇にかけて逆く字状を示しており、複合口縁状を示す。その口唇部の整形から、口縁を折り上げたものと貼り付けたものの二種類が考えられる。折り上げた形の口唇部（37～39）断面の外側の形状は壺V類のそれと近似しており、口唇の高さも一致している。貼り付け口唇（40～43）はかなり内傾するものも見られる。口唇を貼りつけた接合口縁の方は弥生時代後期の特徴を持つ土器であり、終末期～土器師へと継承されている形態である。施文はヘラ描き沈線、ヘラ凹線、櫛描き凹線、流水文など多様化している。県下各地からもその出土例は多いが、この壺V、VI類に関しては標準となる形式設定も確実にされておらず、特に壺V類の例から、その初現を、県外に求める必要はないと考えられる。

壺V、VI類に関してはP D—5遺物含合土の上部層及び攪乱層から検出されており、遺構に直接結びつく土器ではない。

## 7 壺I類（1～4）

非常に薄い口縁が水平に開き、口縁から頸部にかけての形状は逆L字状である。口縁内面～口唇端～頸部外縁にヨコナデを見るも、施文はほどこされていない。頸部のふくらみはほとんどない。この薄手逆L字状口縁の壺I類に該当、あるいは類似するものを県下に出土例を問えば、松山市平野では、松山市土居窪遺跡、同市津吉伊勢山、温泉郡重信町上村に求められ、その他では、越智郡生名村立石山遺跡近辺、同郡上浦町櫻坂遺跡より出土しており、<sup>(注11)</sup>これら以外には管見では、出土例を知り得ない。視野を瀬戸内海沿岸の弥生時代前期～中期の各遺跡に求めたが類似、及び原型を見い出すことができず、局地的な一地方の独特な形態として発展したものではないかと考えられる。松山平野部と越智郡島嶼部との間に何らかの伝播ルートが存在したものと考えられるが、これらについても把握し得ず、先学諸氏の教示を受けたい。

立石山遺跡はその性格において特殊性をおびてるので同一視できないが、櫻坂遺跡出土の壺に関しては類似点がかなり認められる。これらの壺に関して長井敏秋氏は口唇が肥厚し凹線を付し頸部に刻目突帯をめぐらす彫が先行するとされているが、文京遺跡出土の壺I類～壺V類における限り、口唇端無施文（I）→ヨコナデ四状（I～II）、→同肥厚（II～III）→同凹線文（III）と変容しており、同氏の言われる彫は、その口縁部の断面、逆L字状は似るもの、同種の壺ではなく、肥厚した口唇は凹線を付すための造作と考えられないであろうか、初現的には形状が同じならば、無施文、装飾のないものが先行すると筆者達は考える。器形がその後、口縁がく字状に変容していくことに関しては文京壺I～V類においても同じであり、異論をはさむものではない。

これらの壺I類は、その形状を完全に把握しているものはなく、文京I式（壺IV類）における完形品から押しなべて、その形状を推定するにとどまる。しかしながら文京式壺類の特

徴は、紫雲出山II式甕2が口唇部が肥厚し、明瞭な凹線を付し、口縁部径より胴部径が上まわっており、甕内の影響を強く受けているのに対して、文京甕類は胴部径が口縁部径を上まわることなく、底部にいたる形状を示しており、北九州の影響をやはり継承していると推定しえよう。しかしいずれにしろ、これらの甕の初現する遺跡の発見にはいたっていない。したがって、島嶼部への伝播に関しては、本四・今治～尾道間の架橋ルート内に点在する数多くの遺跡の発掘調査の結果を待ちたい。

さて、この逆L字薄手水平口縁の甕はいかにして出現したかという疑問が生じるのであるが、この甕I類より先行するのではないかと考えられる甕が、松山市津吉中野山、同土居窪遺跡より出土している。これらの口縁部の形状は、口縁が水平からさらに外下方に下がっており、口唇上端はヨコナデによるヘラ調整がされている。これは阿方・片山における前期甕型土器の口縁のそれと同じ技法によるものであり、器形的には同一であるが、若干器厚が薄(注14)いためと、阿方、片山式の壺、甕がおびただしい施文を持つことから、この無施文の甕は、阿方、片山式に分類されずに現在に至っているのではないかと筆者達は考える。これは全くの私見であるが、今治市阿方大池周辺より文京I式の甕が出土することから、また、後述の筆者達が入手した松山市東雲神社長者平、同市道後北代、同縁台よりの壺型土器片、及びアイリ式壺Aはあきらかに阿方、片山式の系列下に組みこまれるものであり、これらに関連づけて、甕I類の原形を阿方方面に求め得ることも可能であろう。しかし、甕の技法においては北九州より、壺の技法においては甕内の影響を受けており、ここに瀬戸内海沿岸中央部の地域性があり、特に原形を東西に求める必要もないと考えられる。したがって、いずれかの時点において、その地域性に応じて発生、かつ派生した甕と考えられないであろうか、いずれにせよ、前期終末には出現していたと考えるのが妥当であろう。これら、甕I類の発生地、派生、伝播等は筆者達の興味ある課題である。

さて、筆者達は甕I類との類似性において、最も近接する土居窪遺跡において、いずれの様式に属するかを検討した結果、甕I類は見い出せなかったが、先行形態、文京I、文京II式に類似する甕型土器片を認めた。しかし、岡本健児氏はその報告書「土居窪遺跡」の中で、筆者達が類似性を認めた甕を土居窪I～V式のいずれにも分類されておらず、筆者達は更にその類似性を他に求めた結果、アイリ山より出土している甕型土器に類似点を発見した。(注15)

アイリ山出土の甕型土器は、土居窪II・III式のF字状口縁甕型土器の特徴である、口唇端刻目を付し、頭部に断面三角形状の突帶をめぐらし、刻目をつけている。しかし口縁の開きは、後述の文京甕IV類（文京II式）のそれと同等であり、ここに筆者達は接点を求めていた。文京式甕型土器、土居窪式甕型土器、アイリ式甕型土器のそれぞれに相互の類似性が生じており、アイリ式土器の分析から、押しなべて文京式甕I類の編年値を求めようと、筆者達は着眼したのである。以下、アイリ式、及び関連性を認められる土器に関して記述する。

アイリ式は、松山市祝谷通称アイリ山中腹の果樹園造成の際に出土した3個の土器を示す。その実測値及び観察は次の如くである。

#### 壺A

口縁径約18.5cm、胴部径23.3~23.7cm、平底径9.5cm、器高31cmで、口縁部と底部との間に約1cmのひずみがみられる。口縁内面～口唇～頸部外面にかけてヨコナデをほどこしており、口唇端にヘラ描きの山形沈線文をめぐらし、頸部に断面三角形状の貼り付け突帯を9条めぐらし、その上5列は磨滅により判別し難いが、下4列には僅かながら刻目を残存さす。頸部下から胴部上にかけてはタテ刷毛目、胴部から底部にかけてはヨコヘラ磨き調整をしている。明るい茶10(4-16-4)、明るい茶10(4-16-4)、胴部は黄茶17(6-16-3)で、底部の一部が黒い灰95(0-13-0)の黒斑状を示す。更に突帯から3列下、及び頸部のくびれ部に器厚が若干異なる箇所があり、輪積による製作が考えられ、その口縁形状は、朝顔型（両方）口縁の端を切り落した退化形式とも考えられ、大洲市新谷都出土の壺に似る。

#### 壺B

口縁径約13.5cm、胴部径22cm、上げ底+0.2cm径6cm、器高28.5cm、口縁部と底部との間に約0.8cmのひずみがみられる。口縁内面～口唇～頸部にかけてヨコナデをほどこしており、口唇端上部は僅かに肥厚する。頸部には右上から左下へ、ヘラ描きの列線が付されており、頸部から胴部にかけてタテ刷毛目、胴部から底部にかけてはヘラ磨きによって調製されており、頸部下において器厚の差が生じており、輪積による製作が考えられる。色調は口縁部う黄椎(16-19-2)、胎土灰ずみ(0-12-0)である。なお、頸部から底部にかけての外面に、整形時における爪先の押し跡がかなり不規則につけられている。

#### 甕A

現物が所在不明であるので、岡本氏の実測値によれば、口縁径25.7cm、胴径25cm、底部を欠いており、く字状に開く口縁を持ち、口唇端に刻目、頸部に突帯をめぐらし、刻目（？）を付す、突帯下に3本の沈線（？）を付すとされている。

以上の土器の観察において、筆者達の見る限り、壺Aの頸部下にはヘラ描きの沈線は存在しない。確かに糸状の線はあるが、沈線ではなく細突起線であり、ヨコナデの際に生じたものとするのが妥当であり、同氏の言われる甕Aも同じとするならば、これもまたその可能性が強い。また甕Bの頸部の施工方法は、ヘラ圧痕でなくヘラ描きの列線である。

これらの土器を同氏は当初一括形式とされていたが、その後、壺Aと甕Aを土居窪III式とされ、甕Bは紫雲出山II式の壺との共通性を指摘されている。さらにその後、甕Aを土居窪III式から分離されている。<sup>(注15)</sup>したがって、形式設定されているのは甕Aのみと考えられる。

これらを筆者達が見る限りにおいて、甕Bの形状は、松山市東雲神社長者平出土の一連の壺型土器と一致する点が多く、すなわち文京II式の壺の系列に属すると考えることがより妥当

である。また甕Aは施文こそあれ、その形状は文京II式（甕IV類）に該当しており、施文の継承は甕No38によってもうなづけるものである。すなわち、壺B、甕Aは文京II式のそれであると換言できよう、したがって、アイリ式を細分化すれば、壺A=アイリI式、壺B、甕A=アイリII式=文京II式となろう。しかしながら、僅か3個の断片的な土器を以て形式設定することは、はなはだ不合理と考えられ、このアイリ式はいずれかの時点において、改めて該当しうる形式に吸収されるものであろうが、それは文京II式の範疇に入るものである。

筆者達はこのような問題を少しでも解決するために、断片的ではあるが新資料を得ておりこれらについて関連づけながら今しばらく記述する。しかし、形式設定を求めるものではない。

岡本氏は「愛媛県土居窯式土器の検討」の中で、故長山源雄氏採集の祝谷土居ノ段出土の壺型土器口縁部（口縁径24cm、頸部に断面三角形状の貼り付け突帯を2条めぐらし、口縁内<sup>(注17)</sup>の頸部への内傾面に直径1.8cmの円形布文2個一対を付す色調、茶褐色）をもって、土居窯III式の壺型土器の具詳例とされた。それは、同氏設定の土居窯III式に属する壺形土器の頸部<sup>(注18)</sup>と一致することによると思われる。以下、昨今入手した新資料の計測値、及び観察から、この土居窯III式との比較を試みる。出土した場所は松山市道後北代（0-6, 0-8）、同縁台（0-7, 0-11, 0-12, 0-13）で土居窯遺跡より若干上方に位置しており、いずれも下水道工事の掘削により出土している。

◎0-6 口縁径28.7cm、頸部径11cm、口縁内面～頸部外面にかけてヨコナデをほどこし、口縁口唇に近い内傾面肩部に直径2cmの円形布文、2個一対を3方向に配す。口唇上端には刻目をめぐらし、頸部への内傾面に、櫛の突刺による列点文を付す、頸部には断面三角形状の貼り付け突帯を3(?)条めぐらし、口縁外面にタテ刷毛目調整がみられる。刻目と櫛目の突刺文は、左手で左内側に廻しながら右手で施文したと考えられる。また口縁外面に器厚を調整したヨコナデがみられ輪積による製作が考えられる。頸部外面色調、しら茶（6-18-2）、胎土色調ねずみ色（0-16-0）。

◎0-7 口縁径27cm、頸部径10cm、口唇～頸部にかけてヨコナデがほどこされており、口縁内面口唇部への肩部に円形布文2個一対を3方向に配す、口唇上端にヘラ刻目（一部ヘラ描き列線）をめぐらし、頸部には断面三角形状の貼り付け突帯を3～(?)条付す、口縁内傾面において器厚が異っており、輪積による製作が考えられる。頸部外面色調黄茶（6-16-3）、胎土色調たいしゃ色（4-16-4）。

◎0-11 口縁径25cm、口唇端～頸部にヨコナデがみられ、口唇端にヘラ描きの山型沈線文が施文されている。頸部にタテ刷毛目が付けられている。色調は胎土共にたいしゃ色（4-16-4）。

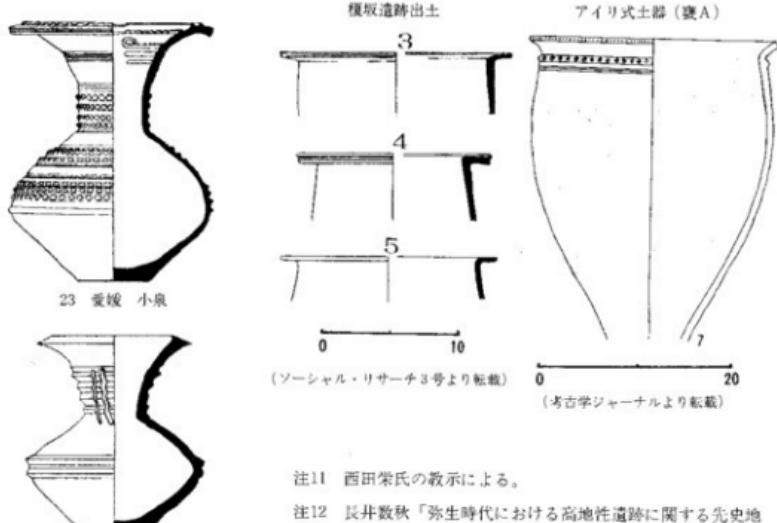
◎0-12 口縁内傾面の頸部に近い個所に円形布文を付ける、断面三角形状貼り付け突帯2条をめぐらす。口縁外面タテ刷毛目、突帯にはヨコナデ、色調は胎土共にたいしゃ色（4-16-4）。

同氏はさらに土居窪III式に該当する壺形土器として、口唇端に八字文のヘラ描き施文があるとされており、これらを総合的に把握すれば0—10—0—13の形態が最も土居窪III式に近似すると理解できる。これと0—6—0—8とを比較するに、その口縁の外反において大いに異り、円形布文の場所、突帯の列数、口唇端の刻目、及び胎土、色調において相違点がかなり見られあきらかに、(0—6)系は(0—10)系より先行する形状と認めざるを得ないものである。そして口縁～頸部の形状は阿方式の壺形土器にもその類似点を求めることができよう。このことから、土居窪III式よりは先行し、あるいは土居窪式以外にその位置を求めてことについてはやぶさかではない。この0—6—0—10系もいずれも胴～底部を欠いており、確実性に乏しいが、その出土例がかなり見られることから、阿方→0—6系→0—10系へと技法の継承が考えられる。換言するならば文京I式にいたる迄の空白を埋めるものではないだろうか。そしてその形状から、中寺I式に該当しうる土器群の存在が推定し得ると筆者達は考えている。

さて、ここで本題の甕I類に戻して論をすすめる。中期中葉後半に位置づけられたアイリ式が不確実な以上、筆者達は再び土居窪遺跡の甕型土器にその論を返さざるを得ない。松山平野における弥生時代中期前半～中葉に位置づけられる土居窪遺跡出土の土器群と文京遺跡出土のそれと比較検討を試みた結果、土居窪I式は文京I式より先行する土器群であることは否定できない事実であり、その形式を遵守するも、筆者達は甕型土器に関しては先述の疑問点を解決し得なかった。これに対して岡本氏からは、記述されていなかった甕型土器に関しては【現在の時点において、第4図の21は阿方系列に属し、中期初頭。22は土居窪III式。  
23はアイリ式。24は阿方系列前期末葉ではないかと考える】という内容の御教示を頂いた。<sup>(注21)</sup>

筆者達はこれを細分析し考察をすすめた。そして、逆L字水平口縁(甕I類)より前記21の下降口縁が先行するという見解に立ち、(21)→文京甕I類→(24)文京甕II類→(22)文京I式→(23)文京II式=アイリ甕Aと口縁の形状の変容に沿って位置づける方が、より妥当であり甕I類は、弥生時代中期初頭に位置づけられるという結論に達した。また、土居窪II式、及びIII式の土器群は、先述の壺形土器の例からも考えられるように、その形式は遵守するも、筆者達は発掘調査に基く、安定した層位、及び確実な遺構に伴う遺物であるか否かという資料の持つ確実性に帰属する問題が生じていると考えている。換言するならば、同遺跡の断面図を見る限りにおいて、第III層～第V層は砂質粘土と砂層の互層であり、かつ不整合である。第III層からは前期弥生式土器、第IV層からは中期弥生式土器、第V層からは前期弥生式土器を出土していることから、第III～V層内の遺物類は、上方からの浮遊、流転堆積遺物と見ることができないであろうか。土居窪I～V式はこれらの遺物によって位置づけられており、筆者達は、遺物の持つ確実性に疑問を抱くものである。いずれにせよ土居窪遺跡出土遺物は再分類される時期に達しているといえよう。これらの事象例から、筆者達は文京I式を松山平野における弥生時代中期の標準形式としてとらえる方がより妥当であるという

結論に達した。また、昨今筆者達が入手した資料も断片的であり、確実性を明かに欠いており、さらに混乱を防ぐためにも、広義に梶谷地区出土土器の再検討、かつ松山平野における弥生中期～前期の状況を把握するためにも、同地域の学術発掘調査の必要性を痛感するものである。これらの結論はあくまでも筆者達の私見であり、先学諸氏の御指導、教示を頂きたいたい。



注11 西田栄氏の教示による。

注12 長井数秋「弥生時代における高地性遺跡に関する先史地  
理学的研究」ソーシャル・リサーチ I 1972

越智郡生名村立石山頂上(140)にあり、巨石から、祭祠  
遺跡と考えられている。

1975. 10. 西田栄を中心に行なった結果、ナイフ形石器、  
弥生式土器、須恵器、土師器を併出している。

注13 長井数秋「愛媛県生名村立石山遺跡並に上浦町横板遺跡  
の弥生式土器について」ソーシャル・リサーチ III 1974

注14 松岡文一「愛媛県下の弥生式土器—1」P40, 85. 図版  
愛媛の文化II 1965

注15 岡本健児「愛媛県土居底式土器の検討」西四国III 1970

注16 岡本健児「弥生式土器—入門構成—考古学ジャーナル  
1974

注17 岡本健児—注15—10頁第1図

- 注18 岡本健児氏実測による、但し現物はS51。1現在、県立吉田高等学校には保管されていない。
- 注19 岡本健児「愛媛県土居洋遺跡—第4図No20—」日本農耕文化の形成 1960
- 注20 岡本健児「同 上 —第4図—No21~24—」日本農耕文化の形成 1960
- 注21 岡本健児～森・大山の書簡による教示。1976. 2.

### 8 瓢II類、瓢III類（5~12）

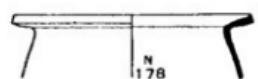
本遺跡より最も多く出土した瓢はこの瓢II、III類であり、P D—5住居址からはIII類を出土している。これらの瓢は口縁部が水平で口唇上端がヨコナデによって肥厚し立ち上がるII類と、口唇部は同じ形状ながらも、口縁が水平から、やや内側に起き上がるIII類とに分類されるが、若干II類が先行するものと考えられる。これらはいずれも瓢I類の手法を引きものであるが、口唇端がヨコナデによって肥厚し凹状となり、明確な凹線によって施文され頸部には1条～2条の凹線、あるいはヘラヨコナデによる細突起線文を付している。底部はいずれも平底直立て、ヨコナデがほどこされていると共にヘラ磨きによって胴部から調整されている。瓢II、III類は瓢I類に比して、口縁部に発達がみられるが、この口縁部の類似性は紫雲出山II、III式の瓢1瓢2に求めることができる。が、紫雲出山のそれの如く口唇部における発達も口縁の起き上がりも少く、最も異なる点は、紫雲出山II、III式の瓢が胴部径が口縁径をうわまわるのに対し、本瓢II、III類は胴部径が口縁径と同等か、またはそれ以下であり、やはり瓢I類の様式を強く継承するものであり、これは瓢IV類にいたるまでみられるものである。

I類より若干時間をおいてII類が、さらにIII類が続行するものであろう。

### 9 瓢IV類（13~22）

口縁内面～頭部外間にいたるヨコナデ、ヨコ刷毛目調整、胴部のヘラ磨き等の整形は、ほぼ瓢III類と同じ技法を持つが、瓢III類程の肥厚は口縁にみられないと共に、口縁部がく字状を示している。東雲神社ではこの瓢IV類と共に壺II類を併出しており、若干、瓢III類より退化しているが、施文を除けば、アリ出土の瓢と、その形において類似点を持つことができる。した

紫雲出山 I、II様式  
(紫雲出山より転載)



がって甕IV類は甕III類の次に位置づけられよう。

その時期は弥生時代中期後半であろう。

#### 10 甕V類 (23~30)

その形状から弥生時代後期の甕と考えられる。これら後期に属する甕は、PD—5住居址の上層、及びPD—6住居址内より、その多くを出土しており、遺構の存続年代を示すものと考えられる。これらの甕に関しては、本文京遺跡のみならず松山平野においては、国道1号バイパス等の各遺跡等から夥しく出土しておりその様式は大空Aに求めるものもあれば古式土師に求める事もでき、これらの土器群の相互比較によって、改めて論ずるものとする。

#### 11 甕VI類 (34, 35)

その形状は土居窪III式に属する甕と同形であり、全く寸分違わぬ形状といえよう。しかし口縁部だけで、器形を完全に把握できていない面がある。

#### 12 甕VII類 (36, 37)

その口縁部の形は特徴を持っているが、頭部からの口縁の開きは甕II類と類似しており、亞流形状と考えられる。

#### 13 甕VIII類 (38~40)

VIII類に属する甕は、施文が多様であることに、その特徴がみられる。すなわち、頭部にみられる指頭压文は甕VI類の技法をひいており、口唇端の凹線は甕I類にみられるそれである。口縁の形状はF字口縁と水平逆L字口縁のそれぞれの技法を継承しているとみられる、甕I類、甕III類と同時期の甕と考えられる。

#### 14 甕IX類 (41~45)

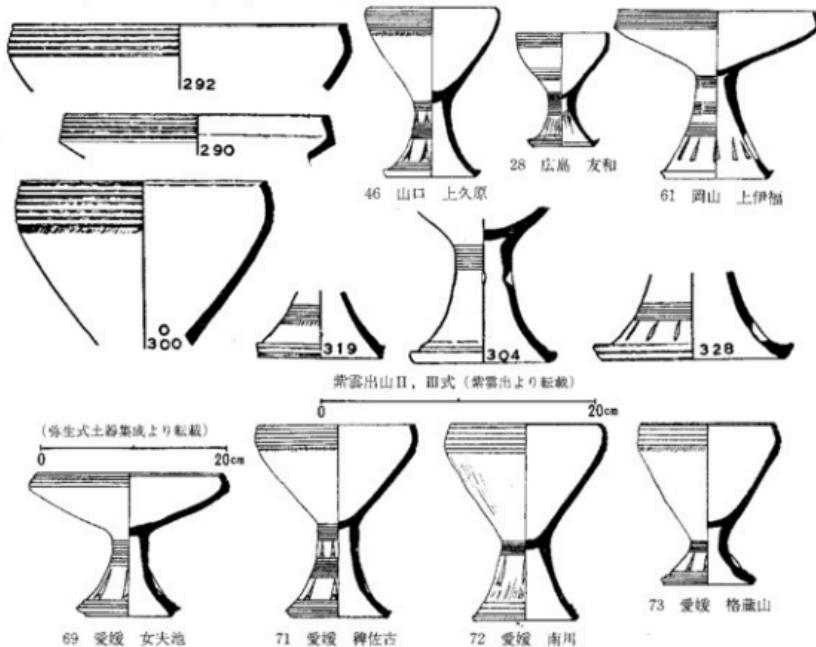
甕IX類は形状的に甕VIII類の系列に属しており、施文が口唇端の凹線文のみになり簡素化した形式といえる。類似を求めれば北条市菖蒲谷、同椋ノ原高地性遺跡2号住居址より出土するものに求められるが、甕、甕の判別し難い形状に変容しつつある。

菖蒲谷出土 口縁径17.5cm、口唇端に凹線を1条付す、口縁内面にヨコ刷毛目、胴径17cm、平底部径5.7cm、器高14cm。

椋ノ原2号住居址出土 口縁径15.4cm、口唇端に凹線を2条付し、やや立ち上がる、口縁内外面ヨコ刷毛目、底部にかけてヘラ磨きがされており、平底部径6cm、胴径16cm、器高14.3cm。

### 15 高環 I 類 (A, B, C) (1~11) [1は中村出土, 2は東雲神社長者平出土]

形状に若干の差はあるが、口縁、及び脚裾部に凹線文を付し、脚部に二等辺三角形状の内側に達しない透孔を配すなどの共通手法を持つ、この高環 I 類の形狀を県下に求めれば、北条市萩原（稗佐古、女夫池）、周桑郡小松町南川、及び格戻山、松山市駿遊面、温泉郡重信町（注22）下林仙幸寺芋根にその類似性が顯著にみられており、さらに瀬戸内海一帯に眺めれば、岡山市上伊福、広島県佐伯郡佐伯町友和、山口県玖珂郡周東町上久原、同県熊毛郡田布施町奈良（注23）、高知県香美郡土佐山田町造川、及び紫雲出山II～III式に属する高環B 2、D 1脚台 2 に（注24）その類似性を求めることができよう。さらに同類系の技法を持つものが、愛媛県周桑郡小松町藍荘山、東子市旦ノ上字権木、周桑郡丹原町古田字明堂、越智郡朝倉村古谷、今治市阿方コイデ、同大池周辺、松山市御幸寺山麓（文京地区）より出土している、がそれらは凹線、二等辺三角形状の透孔等の装飾がかなり発達しており、脚部の形狀にも若干の相違点がみられ、画一的ではない。これらは松山市駿遊面以外は突發的に出土しており、またその出土する遺跡の遺構も、その性格も知られていない。I 類の最も簡素な例として、松山市中村一丁目 P D-1 円形住居址前庭の土壇より出土の高杯は、これと伴出する壺形土器、及び甕形土器から、文京 I 式より、若干先行するものと考えられる。



- 注22 弥生式土器集成本編 33 P L25—69～73  
注23 " 45 P L33—28  
注24 " 40 P L30—46  
注25 " 35 P L27—24

### 16 高環II類（13～21）

高環II類は、高環I類にみられる凹線文を頭部あるいは裾部に残しているが、文京I式とはかなり差違が生じており、この間に12, 0—21～0—24の施文が発達したものが考えられ、これらがかなり退化して小型化するものと、脚部が発達し、大型化し、器台状を示すものみられる。これらは、高環I類の施文が発達した段階から退化していく過程の高環と把握したい。（19）の水平口縁を持つ形狀は、竹ノ下遺跡より出土のそれに共通点が認められる。  
（注26）脚部の施文具（金属器？）による山形の沈線は壺III、及びIV類の複合口縁にもみられ、ほぼ時期を一にするものと考えられる。なお類似するものが、越智郡上浦町稲坂遺跡にもみられる。

### 17 高環III類（22～28）

高環III類は形狀がかなり簡略化した形狀を示し、脚に三角透孔の代りに円形透孔を穿っており、その数、位置も一定ではない、また脚が柱状に近い形を示しつつあり、土師器への移行段階に位置づけられるであろうが、これらの弥生時代後期終末期に属する土器に関しては、壺III～VI類、甕V類と共に、松山市内国道11号バイパス建設内の各遺構より出土したおびただしい土器群の編年を待って、あらたに論じたいので、ここでは割愛する。

- 注26 松山市福音寺町竹ノ下遺跡、川付川の旧河道と考えられ、その堆積土中よりおびただしい土師器、須恵器が発見されており、それらが国道11号バイパス内の各遺跡より出土しているものと一致するため松山市平野部の土師器、須恵器の位置づけが可能となっている。

### 18 土師器、須恵器類

土師器は各遺構の上層より若干出土しているが、層位的には住居址等の遺構に伴うものはP D—1の建造物址内出土の鉢型土器等であり、その他は遺構に伴うものではなく、上層の擾乱層中を中心にしており、かりに生活基盤面の存在があったとしても、把握できない現状であり、単に遺物の比較資料としての取り扱いしかできないと考える。その形狀も弥生時代終末期の形狀を示すものもあり、筆者達の弥生時代後期～土師器（8～9世紀）にいたる編年図作成の段階で改めて述べたいと思う。

須恵器はいずれも遺構上層の小川による流転堆積の可能性が強く、これもまた資料提示にすぎない。多くの須恵器を出土した国道11号バイパス各遺跡との比較検討にゆだねここでは割愛させて頂くが、松山平野の6世紀後半に位置づけられる須恵器が大半である。

文京式土器に関する土器編年表

前回の略編年表を作成するにあたり、筆者達は次の観点にたち作成を試みた。最も基盤とするものは、文京式壺型土器I類～V類であり、これを併存する壺、高杯に波及させたものであり、その中心は文京I式に示す土器群である。また施文の変化より、器形の変容に着眼したものである。

以下、図表にしたがって概略を説明する。文京式壺型土器（薄手逆L字口縁）と土居窪遺跡出土のそれとの比較においては、壺I類の項で述べた如く配列されるものであり、両者の一致する接点は、文京壺III類～VI類～土居窪II式であり、資料の持つ確実性から、文京壺III類即ち文京I式に吸収されるものであろう。しかしながら、土居窪II式に属する、頸部に断面三角形状の突帯を持つ壺型土器口縁は、文京I式の壺には該当し得ないものである。これは文京I式より先行する形態と把握したい。されども、土居窪II式の壺型土器に対応するものとは考えられない。また土居窪II式に分類されている壺型土器口縁は松山市潮見出土の如く片山貝塚出土のそれであり、II～V式の壺、壺類はその大半が、文京I式、II式、あるいはそれ以後に相互に吸収される土器である。換言するならば、土居窪II式の形式設定は研究の余地があり、再検討をする必要があると指摘せざるを得ない、これは流転堆積遺物という土居窪資料の持つ性質に帰属するものと筆者達は考える。以上のことから、松山平野における弥生時代の編年において、土居窪式には論を及ぼすことをやめ、遺物に関しては、土居窪遺跡出土一括遺物として取り扱うことが適切であると考えられる。

したがって、土居窪式の呼称を継承するならば、新土居窪II式と仮称しておくにすぎないが、その位置は、文京I式より先行し、北代、縁台出土の同類型よりは後に位置づけられよう。

ここにおいて、文京I式より先行する形態を新土居窪II式（仮称）及び、北代、縁台の朝顔形の口縁を持ち、頸部に断面三角形状を持つ壺形土器群に求めることができよう、しかし筆者達は、その完全なる器形を松山平野部において知り得ず、文京I式におけるそれとの比較検討において疑問の余地を残している。そこで、筆者達は間接的ではあるが、その器形を放岡岡一氏設定の中寺を中心とする一群の中寺式に求めた。

中寺式は阿方式土器群の系列下において発達した中期初頭に位置づけられる土器群ではあるが、形状、施文も画一的ではなく、現在の時点においてはこれも再検討を要するであろうが、今治地区における発掘調査による資料検出のない以上、これに準じて考證するをえないであろう。筆者達は、その土器群の中に口縁部の施文の違いはあるが、口縁～頸部の形態において、周桑郡丹原町古田宇明堂、東予市安用、今治市町谷等よりの出土壺形土器にその類似点を求めることができた。また、松岡氏は新土居窪II式か否かは現在においては判別しかねるが、やはり、その断片を中寺式とされている。中寺式が阿方系列下に属するならば、北代、縁台～新土居窪II式も阿方系列下に属するものであり、松山市中村1丁目1号住居址内出土の壺形土器からも、筆者達は、中寺式に相当、あるいは類似する一群の土器形式が松山平野部に存在したものと推定するが、それは中寺式系列下という総の位置づけでなく、阿方

(注27)

系列下における併存として位置づけたい。

文京I式には中寺式に見られる三角突帯は消滅し、そのかわりに頸部及び口唇端に数条の凹線をめぐらし、頸部には指頭圧文、ヘラ描き文をめぐらしており、凹線の施文が一つのパターンとして定着した時期のものと理解でき、北条市稗佐古、温泉群重信町下林、松山市糸迦面とほぼ時期を一にするものと考えられる。

文京II式は口唇端に僅かに凹線を残しながらも、再び頸部に三角突帯をめぐらしており、その器形は若干小型化する傾向がみられる。

甕に関しては先述の通りであるが、阿方、片山式においても、甕の口縁が水平で薄手のもの（A）と厚手（B）が、既に存在しており、口唇端が外下方に開く形状も見られる。したがって文京式甕型土器群は片山式系列下に属するも、施文の省略から形式設定されずに現在に及んでいたものと考えられる。文京甕I類の位置づけは、同III類より押し上げたものであり、今後の相互検討が必要となるであろう。<sup>(注14)</sup>

高环に関しては、川之江市大江遺跡、紫雲出山I様式E1にみられる高环が、松山市吉藤町より出土しているものの、器形において、あまりにも異り、凹線を付す高环の初源を求め得ない。ただ、脚台が低く、脚上部のしばりもなく、凹線等の施文も簡素な高环が先行するならば、松山市中村出土のそれが該当しうる。文京I式の高环は北条市稗佐古と時期を一つにして、凹線文がパターン化はじめた頃のものであり、文京II式は施文が発展した段階のものとして把握ができるであろう。

以上を総合しての位置づけは、弥生時代中期を、I—中期前半様式、II—中期中葉前半様式、III—中期中葉後半様式、IV—中期後半様式に細区分するならば、IIIの位置に求められるであろう。

この編年値を求めるといった中期の各様式に分類されている土器群は、その大半が、断片的な資料、あるいは突発的事象において出土した土器類の編年であり、発掘調査によって、層位的に、遺構に伴って把握された出土遺物の相互検討によって得られたものではない。したがって、編年者にとって都合のよい我田引水的設定の可能性が考えられる。また、遺構の持つ性格差は、土器にも波及しているであろうし、祭祀遺跡や高地性遺跡の出土遺物と住居址内出土のそれとを同一視することも不合理と言わざるを得ない。しかし、現在の時点において、本文京式の位置づけも、その枠から脱するものでなく、その位置づけに一抹の不安を残すものであり、今後の筆者達の課題であると共に、現在迄に設定された個々の土器形式を再検討されることを提唱したい。

なお、筆者達は文京Iを標準形式として松山平野（一部北条平野を含める）における弥生式土器編年図を作成した。これはあくまでも現時点における筆者達の私案であり、先学諸氏の御教示を賜りたい。と同時に、筆者達は弥生時代後期～土師器（7～8世紀）にいたる編年図を作成中であり、諸氏の資料の御教示を賜りたい。

本編年図作成にあたり、故松岡文一氏、西田栄氏、柴村敬次郎氏の実測図にうるところが多大であり、先学の研究に対して、あらためてここにおいて謝意を表すものである。

注27 松岡文一「愛媛県下の弥生式土器II」P25岡版 愛媛の文化III 1966

本遺跡のもつ土器編年を試みるにあたり、先学の土器編年の推移をたどりながら、文京式なる土器形式と編年について考察をこころみたのでその一覧表を付す。

1939 小林行雄 「弥生式土器集成」		1949 杉原莊介 「伊予阿方遺跡、 片山遺跡断綱、 考古学施設」		1955 岡本健児 「各地の弥生式 土器—因縁、 日本考古学講座4」		1959 岡本龍児 「入田(多教文土器作成) 符田 阿方 片山」		1960 杉原莊介 「農業の発達と 文化的な変化」 世界考古学大系2		1961 杉原莊介 「日本農耕文 化的生成」	
(西都原戸内)		西都原戸内		北四国・南四国		四国		北四国		西都原	
前 期	A様式 阿 片 方 山 中 山	前 期	列 方	前 期	入 田 符 田 阿 方 片 山	前 期	入田(多教文土器作成) 符田 阿方 片山	前 期	阿 方	前 期	阿 方
中 期	B様式 置 中 寺 上 久 原 中 寺	中 期	中 寺	中 期	小 泉 ？	中 期	小 泉 ？	中 期	七 居 底 中 寺	中 期	七 居 底 中 寺
后 期	C様式 總 案	中 高 上 和 田	後 期	後 期	中 寺 松 坂 大 坂	後 期	中 寺 神 西 大 坂	後 期	大 寺 大 坂	後 期	大 坂

1961 岡本健児、 土居屋道郎報告書	1964 小林・杉原 先生式土器叢編 (本編)	1966 和島誠一編 日本の考古学直 覗見法	1969 大塚照雄・関野作 七器の編年表 新版 考古学講座4巻 基本	1972 長井教秋 八雲山報書 天山報告書	1975 岡本健児 考古ジャーナル・先生土器(四国)
日本農耕文化の生成北四国(松岡文一)		北四国		北四国	
		西部	東部	西部	中央部
前 期	入田1 土居屋 井 持田 土居屋 阿方・片山	室本1 前 河 阿方 五条期	持田室 前 三井 行末 五条期	室本 前 阿方	前 保ヶ河 法華寺 期
中 期	土居屋3 中 寺	中寺3 中 检端(土居屋) 小松4	土居屋日 五条田 中 寺 中 寺 紫雲出	北谷 中 寺 中 寺 紫雲出	中 都 中 寺 中 寺 后 期
后 期		後 大塚5 期	大内 大内 大内 村 期	大空 大内 原	若木 木由利、检端 天山。八空 大 内山2、大塚 原

(森光晴・大山正風)

編年図引用土器一覧表

番号	出土地	所蔵(保管)者
0-1	香川県觀音寺市高室町室本	觀音寺市立高室中学校
2	愛媛県松山市御幸町山東麓	松山市教育委員会
3	" " 持田町	不詳
4	" 今治市小泉	今治市立西中学校
5	" 松山市東雲神社長者平遺跡	松山市教育委員会
6	" " 道後北代	"
7	" " " 緑台	"
8	" " " 北代	"
9	" 北条市以下不詳	北条市 得居義治
10	" 松山市道後祝谷町地	愛媛県立歴史民俗資料館(現有)
11	" " " 緑台	松山市教育委員会
12	" " " 緑台	松山市教育委員会
13	" " " "	"
14	" " " 祝谷土居ノ段	不詳
15	" 北条市椋ノ原	北条市 得居義治
16	" 松山市中村町2丁目1号住居址	松山市教育委員会
17	" " 道後内代	不詳
18	" " 中村町2丁目1号住居址	松山市教育委員会
19	" " 道後アイリ山	愛媛県立歴史民俗資料館(現有)
20	" " 衣山町うやま	松山市教育委員会
21	" 北条市菖蒲谷	北条市 得居義治
22	" " "	"
23	" 松山市天山西麓	松山市教育委員会
24	" " 道後アイリ山	愛媛県立歴史民俗資料館(現有)
25	" " 文京町愛媛大学構内	愛媛大学
26	" 北条市菖蒲谷	北条市 得居義治
27	" 松山市久万ノ台大塚	松山市故松本常太郎
28	" " 御幸寺山東麓	松山市教育委員会
29	" " 垣生八反地	松山市 武市昇
30	" " 今在家町	不詳
31	" " 福音寺町竹ノ下遺跡	松山市教育委員会
32	" " 南町2丁目	愛媛大学
33	" 北条市上難波夏カリ	北条市 得居義治
34	" 松山市文京町愛媛大学構内	愛媛大学
35	" " " "	"
36	" " 福音寺町竹ノ下遺跡	松山市教育委員会

0-37	愛媛県松山市福音寺町竹ノ下遺跡	松山市教育委員会
38	" " "	"
39	" " "	"
40	" 今治市片山遺跡	今治市 玉田栄二郎
41	" " "	明治大学
42	" " "	愛媛県立今治西高等学校
43	" 松山市吉藤町	不詳
44	" " 道後祝谷土居窯遺跡	済美高等学校
45	" " " アイリ山	不詳
46	" 北条市菖蒲谷	北条市 得居義治
47	" " 梶ノ原高地性遺跡 2号住居址	愛媛県立歴史民俗資料館(現有)
48	" 松山市津吉町野山	不詳
49	" 温泉郡重信町上村	不詳
50	" 北条市内坂内	北条市 得居義治
51	" 松山市御幸寺山東麓	松山市教育委員会
52	" " "	"
53	" " "	"
54	" " 以下不詳	"
55	" " 福音寺町竹ノ下遺跡	"
56	" " 以下不詳	"
57	" " "	"
58	" " 福音寺町竹ノ下遺跡	"
59	" " "	"
60	" " 文京町愛媛大学構内	愛媛大学
61	" " 御幸寺山東麓	松山市教育委員会
62	" 大洲市新谷郡	大洲市教育委員会
63	" 松山市東雲神社長者平	松山市教育委員会
64	" " 文京町愛媛大学構内	愛媛大学
65	" " "	"
66	" 北条市上郷波どろ池	北条市 得居義治
67	" 松山市久万ノ台大塚	松山市故松本常太郎
68	" " 御幸寺山東麓	" 教育委員会(松山市指定文化財)
69	" " 伊佐瀬波神社出土	愛媛県教育委員会

注 弥生式土器集より転載(0-1, 0-4, 0-40~42)

考古学ジャーナルより転載(0-45), 西四国二号より転載(0-14)

西田栄氏原図 (0-10, 0-17, 0-48, 0-49)

柴村敏次郎氏原図 (0-3, 0-9, 0-15, 0-21, 0-22, 0-26, 0-27,

0-29, 0-32, 0-33, 0-35, 0-44, 0-46, 0-50)

十亀幸雄氏原図 (0-25, 0-34, 0-60) 長井敏秋氏原図 (0-69)

## ま　と　め

### （文京遺跡の由来）

すでに遺跡の環境・遺構・遺物とその相対年代などについては、それぞれの執筆担当者が詳説しているので、ここにはそれらの相互関連と、これらについての包括的約言ならびに若干の補足を加えて結ぶことにする。

当遺跡一帯は明治以降陸軍練兵場となるまで清水地区東端の田畠として存し、今次発掘地域の西南端近くには、水口町の名が嘉永六年（1853）の松山城下図には見える。現在、調査地点の西南隅には鉄砲町電車停留所があり、つゝ通りが幕藩時代の鉄砲隊所在に因むか鉄砲町と呼ばれている。なお練兵場跡地は終戦後耕作畠とされたこともあったが、西端は松山北高校・松山商大に蚕食され、中央部大半は愛媛大学（教育・教養・法文・工学・理学部）と市立御幸中学校・東雲小学校、並びに日赤病院の敷地に吸収されてしまった。このように当地帶は主として学校街となつたためか昭和39年文京町と改称されたので、その中心に近い当遺跡も便宜的に文京遺跡と呼ぶことにした。

さて、この練兵場跡地に現在の工学部本館（第1号館）建設前、昭和22年付属小学校舎が仮設され、その後この校庭から複合口縁の弥生式土器や穿孔ある石包丁などが発見され。それらは当時の発見者たちの在学した当学付属小中学校にいまもなおかなり保管されている。この仮設校舎敷地へ新居浜工専から移管の工学部本館が建てられるに先立ち、遺物包含地としての事前調査が同学部の故松岡文一氏らにより昭和37年5～6月に行われた。この時の出土物は現在愛媛県歴史民俗史料館に収納されている。この遺物中には漏斗状～朝顔形・逆L字状・F字状・凹線文などの口縁をもつ中期土器片や複合口縁の後期土器、紡錘車・石包丁片・石鎌などもあり、今次の調査報告中にもこれら往年の出土品もいくらか引用した。

### （文京遺跡の立地）

さて、今次の発掘調査は、さきの工学部本館建築時調査箇所に西接する工学部新館（第2号館）一元付属児童生徒の遺物発見地一の西端部に位し、最近開設の海洋工学科のための増築地に當り、愛媛大学城北校舎の西南端を占めている。本調査は工事日時の関係や周辺既存施設などの制約下で行われたが、遺構遺物については既述の通りである。いまこれらの主なるものを要約すれば、遺構としては弥生住居と推定されるもの不完全なもの・重疊したものと含めて計8例、うち平面遺構のは、完きものはP.D.5号、遺物としては弥生中期中葉後半の凹線文の土器ならびに石包丁、石鎌、砥石、紡錘車、土玉、分銅形土器などが著しいものとして挙げられよう。

これら遺物のうち土器についてはその相対年代的考察においてある程度の位置付けがさきの筆者によって行われた。またその他についてもすでに触れられているが、遺跡関係や分銅形土製品について若干の補足を行いたい。

まず当遺跡は環境の所で説かれているように周辺に多くの遺跡を控えているが、いま少し立地について補説すれば、当文京遺跡の北側に古くは石手川の旧河道があったのは、およそ事実であろう。そしていまなお当遺跡の北方を限るかのように石手川の分流が大法寺川一約1km下流に沿ってある大法寺なる寺院に因む（上流の道後方面では義安寺や石手寺の古刹とともに弥生遺跡一の門前を流れるため御手洗川と呼び、3kmほど下流の古照遺跡付近では近くの朝日八幡前を通るため宮前川の名をえている）が東から西流しまは三津港に注いでいる。なお古地図や発掘の結果当遺跡を東南から西北に蛇行し或は貫流して大法寺川に合流する流路もあって、それら小河川のなす淀みや泉池がいまの松北高の校庭北にあった事実は当住居跡周辺の耕地や通水路ないし清水の給源としてもった意義の深さを考えさせられる。

つぎに、この東西に走る御手洗川—大法寺川は当文京遺跡地区東北部（理学部構内東北端）近くの極又なる地点で北方の祝谷扇状地から流下する祝谷の川に分水し、当分流は西北して和氣湾堀江方面に注いでいる。この両河によって南を限られた祝谷扇状地の端辺中央に木銀を出した土居窪弥生中期遺跡があった。またこの扇状地のかなめの所に祝谷本村、丸山、アイリなどの弥生中期中葉とそれに先立つ遺跡がある。またこの扇の両翼の先端の一方に御幸山東麓の弥生前期の綾杉文土器や完形分銅形土製品を出した祝谷—山崎—三丁目遺跡があり、他方東端に縄文後期～弥生期の土器石器、並びに白鳳の古瓦をも出した土居の壇遺跡など祝谷遺跡群とも言うべきものがある。

さらに大法寺川—御手洗川にその南幅を洗われている道後冠山は縄文式土器と石鏃や弥生前期の木葉状文入りの凸帯文土器とを出し、南に分岐した道後公園の丘の東麓からは日露役中捕虜収容所の運動場括張工事で平形銅劍3口出土。公園西方の道後南町、持田町辺では木葉状文をもつ前期中葉の土器やそれらに次ぐものが発見され、さらに上一万・中一万・西一万・通町・府中町（いまの半和通り）も弥生中期～後期の遺物包含の遺跡群である。中一万にはいま埋めて遊園地化された土器壠があつたし、上一万の約200m北の旧称一万市筋（いま道後北今市）1053番地—文京遺跡の東端（日赤の東北端約90m、東雲小学校正門東約50m）では明治42年水田地下で平形銅劍10口出土東博蔵となっている。さらにこの北約100m（文京遺跡の東北端、理学部の東北隅より北20mでも平形銅劍数口の出土を伝え、いまも市内の旧家に分散宝蔵されている。

以上、当遺跡周辺で石手川分流を挿んで直接する主要遺跡と、その特長的出土品を列挙し当所の立地を明かにした。次ぎにこれら遺物を通して当遺跡の考古学的位置を考えて見よう。

### (文京遺跡の考古学的位置)

松山城の北東部の諸地域では縄文遺構は未だ確認されていないが、縄文人の来去して残したと思われる遺物は道後冠山の土器片と石錐、旧祝谷土居壙や土居窪、道後公園の山丘などで收拾されている。いずれも小破片で縄文前期、後期、晩期のものである。松山平野で縄文遺構の発見は確実なものとしては久谷地区西野谷田第2遺跡と安城寺船ヶ谷遺跡の晩期のものにとまる。これら晩期人の生活の延長展開かどうかは不明であるが、弥生前期初頭の壺が堀江昭和町の掘井で発見、前期中葉後の遺物が吉藤、御幸寺山東麓、延山、南町、持田に出、從て持田～祝谷間の低地部で弥生農耕が始まったのであろう。その証拠として、この間の低地土居窪（いま北代一湯築小学東側）で稻作農耕の拠点を物語る木鍬、櫛状木器（または祭儀用木剣？）木代、礎盤、板木、柄入り木材、カンナ形石斧、石錐、巾広の糸と稻藁等<sup>(注6)</sup>が発見された。ここでは弥生中期中葉までの生活が見られるが、中期後葉に入るとさらに舞台は広まり、当文京遺跡の主要土器文様の凹線文入りを帯びた上器形式の出土地は祝谷の丸山・長谷・御幸寺山東麓・義安寺・東雲神社境内、釜ノ口遺跡をはじめとする国道11号線バイパスにも、県運動公園駅跡面山、西野田遺跡、北条市八反地のゴルフ場遺跡、全女夫池など、小松南川、新居浜検端などに見られる。南予では宇和町田苗向平山に漏斗状口縁をもつ壺に1例を見る程度であるが、内海島しよう部では越智郡吉海町の八幡山遺跡、上浦町榎坂、生名村立石山などほとんどが凹線文をおびた同形式に近い。これら島のものには地形的な制約その他戦乱説もあるが高地性遺跡が多い。しかし当遺跡は松山城山の北斜面の平準化地点に位し平和な存続を見たらしい。

そして当文京遺跡の主要類型につぐ壺第IV V VI類は「く」の字口縁から複合口縁化の過程に立つものであり、高環第III類などと共に後期とその終末近くへ続くものとされる。この種のものは今日松山平野に広汎に見出され、土師器と混淆されるほどであり、特に城南の国道バイパス沿線や古墳遺跡への漂着破片中にも数多見出され當時広大な生活面がうかがわれる。

ところで当文京遺跡の主要形態をP D 5遺構を中心とし、この出土物に重点をおいてみると、考古学的にはどのように位置付けられるであろうか。

まず遺構としては、松山地方の弥生中期の住居址の例にならひほ、円形で規模は県運動公園での駅跡面山遺跡等のそれに比し、地形的関係もあるが、やや小さい。しかし全公園内の谷田IIIの住居址遺構とは、同大であり、谷田のような鉄器は見出しえなかつたが砥石の磨滅痕等から鉄器の使用されていたことの推測も不可能ではない。なお谷田IIIでは柱穴が確認しがたかった事例もあるが、文京第5では4本柱穴を認めた。しかしその間隔差にお究明を要するものがあるかに思う。谷田III遺跡との著しい共通点の一つに分銅形土製品の出土がある。すでに遺物の項で周知の祝谷御幸寺山東南麓出土品との計測値が対比的に器形写真も併用して記されているが、ここでは谷田III遺跡の丘陵端の土塙中から収納された破損品（b）

（目下県歴史民俗資料館に展示中）をも引例して、当文京遺跡第5住居址出土の半壺品（c）

と三者を比較的に考えながら当時の生活面をもうかがってみよう。

弥生時代の分銅形土製品は主として瀬戸内沿岸地域に出土し、そのもつ正確な意味はまだ明瞭とは言えぬが、一般的には巫祝的乃至護符的な役割を帯びていたものではないかとされている。ところで前掲の祝谷出土品（a）は眉目秀麗の女性を象ったかのような面貌をもつ完形品で、眉が浮彫り的であること、目口などが何れも単一線で描き込まれていること、耳の位置あたりに吊り下げ用らしい研孔をもっていること、四線文手法をもつ弥生中期後葉の土器を出す遺跡であることが三者に共通して言える。さらに言えば人面を象っていることも。しかし、こまかく見れば当文京遺跡出土のcは眉のつり上りか際立ち、やや忿怒の形相を思わせる所があるが、目の訴え方はaとbとの間に位して無表情で、aが目の細さとオチヨボロによって女性的ないし神秘的巫女性を、またbが眉目のなだらかさと口の可愛さにより平和な幼童的愛らしさを示すのに、cは得体の知れぬ犬か狐を思わすような巫男？とも呪術者とも見取れる。しかしいずれにしても人面を象って巫祝的乃至護身的役割を演じるのに用いられたものであろうか。何かに吊り下げて奉斎？しながら。

この分銅形土製品の源流は系譜的には繩文土偶に求められないでもないが、むしろこの最初のものが具象的の面貌をそなえていないという説に従えば弥生時代農耕文化に伴う独自の発生であろうか。もしそのように具象化した人面をそなえていないのが先行するとなれば、<sup>(注7)</sup> 弥生中期後葉の四線文を帯びた高环を作出した北条市萩原女夫池の分銅形土製品（下半欠如）の方が松山平野の三者に先立つものかもしれない。もっとも女夫池のは残存の円周の縁に毛根状の穴を3列併走させている。この手法は谷田の前頭後頭に3~4列の毛穴、祝谷の前頭部のみに2列の疑似繩文の条痕を走らせているのに酷似している。しかし、女夫池のには眉目や口の描出が認められないので、やはりこれだけは<sup>ハジカ</sup> 描写や刺突を主として用いた抽象的な例の名残りであろうか、それとも欠失部分に顔面があつて顔輪を象った部分と言えぬでもないが、これはやや無理な推測で、むしろ抽象形と具象形の中間に位するものとでもしておこう。

ともかく当遺跡の分銅形土製品は北条の先行されており、また祝谷や谷田よりも後れているにしても、最も具象性が強いように思われ、これを住居ないし個人的な所有物として当遺跡の居住者達が日常をこれをもつ巫術者の言う所に依て生活したこととも偲ばれ、また同様の事例が真向いの御幸寺山麓で行われたことは印象的である。さらに当地区の東北50~100mに接して埋納されていた平形銅劍は平底をもつ弥生式土器を伴出したことなどからその時代は若干推定出来るがこの青銅器のもつ意味は未分明である。しかしこれらは近畿の銅鐸同様わが国で鑄造された儀器らしいことは一般に言われており、それが水稻農耕にまつわる大地の靈をなだめ祀るなどの祭儀に農業共同体によって用いられたものであろうこともほぼ肯定されているかにみえる。してみれば当文京地区に隣接して上記のように10数口も、道後公園分を合せれば20口にも近い平形銅劍が出土したことは、域北地域一帯の農耕集団の弥

生中～後期の盛大きさにも相応する当然の出来事だったかに思える。と同時にさきの分銅型土製品が御幸寺山東南麓にも文京遺跡にも存し、この真近かに対置する弥生中期後葉の原始的社會の個人的氏族的儀礼で巫覡的役割を果たし、さらに平形銅劍がこれら社會の形成した農業共同体ごとの祭儀に何か重要な寄与をなしたことと思うと、これら稀有の土製品（愛媛県で4カ所・香川3例・岡山7例・兵庫4例・大阪1例・鳥取3例・鳥根1例・山口5例）や平形銅劍（松山20口・越智朝倉5・東予広岡2・周桑丹原6・新居浜中萩2・川之江垣添2・宇和清沢3）をほゞ同一地域で併出させた文化状況を想察せしめられ奥深く感じる。そしてこれらの遺品が今次調査に若干の意義を付加したとするならば何より幸である。

#### （文京遺跡の性格）

当文京遺跡が松山城北山麓の緩傾斜地帯を占め、ほゞ平準化した地点とはいってもなお古い河道を北方に控える微高地の平和な居住地帯であったことは今日同様である。

当所での生活は弥生中期中葉後半から全後期に亘るものであり、今日の発掘地域で最確実なものを中心述べれば、中期中葉後半に位した遺物を最も多く出土し、一般集落址における遺物をほゞそろえており、それらの中には、それが武器だったか狩猟具だったか明かでないにしても石鎌もあり、生産を物語るものとしては土製紡錘車が当初から意図的に紡錘用に作られたものもあり、また破損土器片をも穿孔加工して応急利用したものを残すなど紡織生活の忙しさを示すかのようなものもある。木だ鉄器は不幸発見しえなかつたが、これが用いられた使用痕が数ある砥石に見られたことはさきの筆者も指摘している。

しかも、こうした稻作農耕に伴うかなり安定した生活が当所を中心に展開するに至るまでは、これに先立つ弥生前期～中期中葉の生活が、より日当りのよいすじ向いの御幸寺山東麓から展開する祝谷扇状地や、道後温泉周辺から南町持田町微高地一帯で次第に進行していくことはすでに見た。もちろん耕営地域としては当文京地区と持田一帯との作る微高地と上記祝谷扇状地との間の低湿河川地帯が極めて良好な水田農耕地を供し、その南側に当る遺跡がすぐれて恵まれた安住地を供したことは中世までの連続遺物包含によっても窺えよう。

これを当所の弥生中期に限って言えば、当代特異の分銅形土製品を同族一家の巫覡的ないし護符としてもつたものが、旧河道を捕んだ僅か500mの好条件地に相対的に存していたり、や、おくれた後期初頭あるいは前半に平形銅劍を10、7、3口と三ヶ所に収納しうる程の農耕共同体の集群がこの城北平野に展開していたことは当所の文化的性格を語って余りがある。

もちろん当文京遺跡が文京1式に代表される弥生中期後葉にはじまつにしても、それ以前の遺物も若干含み、さらに後期末にも及ぶ複合口縁の土器も当構内では周辺地域と共にかなり出しているので当所が特に恵まれておよそ紀元初年以降長期間安らかな生活を享受したことが察せられる。

周辺の文化と比較しても、松山城南、城東城西にも弥生中期・後期の遺跡もあり、石劍の

出土・前方後円墳などの存在も伝えられているが、具象化の頂点に立つ分銅形土製品、儀器化の極を行く鋭い突刺をもつ平形銅劍、さらにこれに付説するならば劍の関部の鷲両側の文様中に対置された鹿の姿を鏽出している一万市筋（いま今市町）の銅劍をはじめ諸文様をもつ平形銅劍を10数口以上もこの城山の東北地区から出していることは城北地帯の文化（小さくいえば精神的ないし宗教的生活面）での一異彩といえよう。<sup>(注8)</sup>

土器石器の系統論については直ちに言及しがたいが、分銅形土製品や平形銅劍を通して言えば瀬戸内文化の特徴を十二分にふまえながらも、当地域の特色を發揮し、畿内文化との関連も北四国の道前地域（新居浜・西条方面）を経て享受しながら、なお東九州（大分方面）<sup>(注8)</sup>や山陽西部（山口・広島）など伊予灘・斎灘を経ての文化交流も考えさせられる。かくて当遺跡は次の弥生後期に城北だけでなく松山平野周辺にまで広く漫透して行く一中心になったとも言えよう。（西田栄）<sup>(注9)</sup>

注1 伊藤義一氏解説付松山城下町絵図 嘉永六年（1853）版 地研創 1975復刻刊

注2 鶴久森経峯氏前出論文

注3 注1に同じ

注4 紫村敬次郎氏ら 分銅形土製品の新資料 私たちの考古学4—2 昭32.

注5 筆者。銅劍・銅鉢に関する若干の考察・全補遺 愛媛大学文理学部歴史学紀要 第2・3編 1953～54

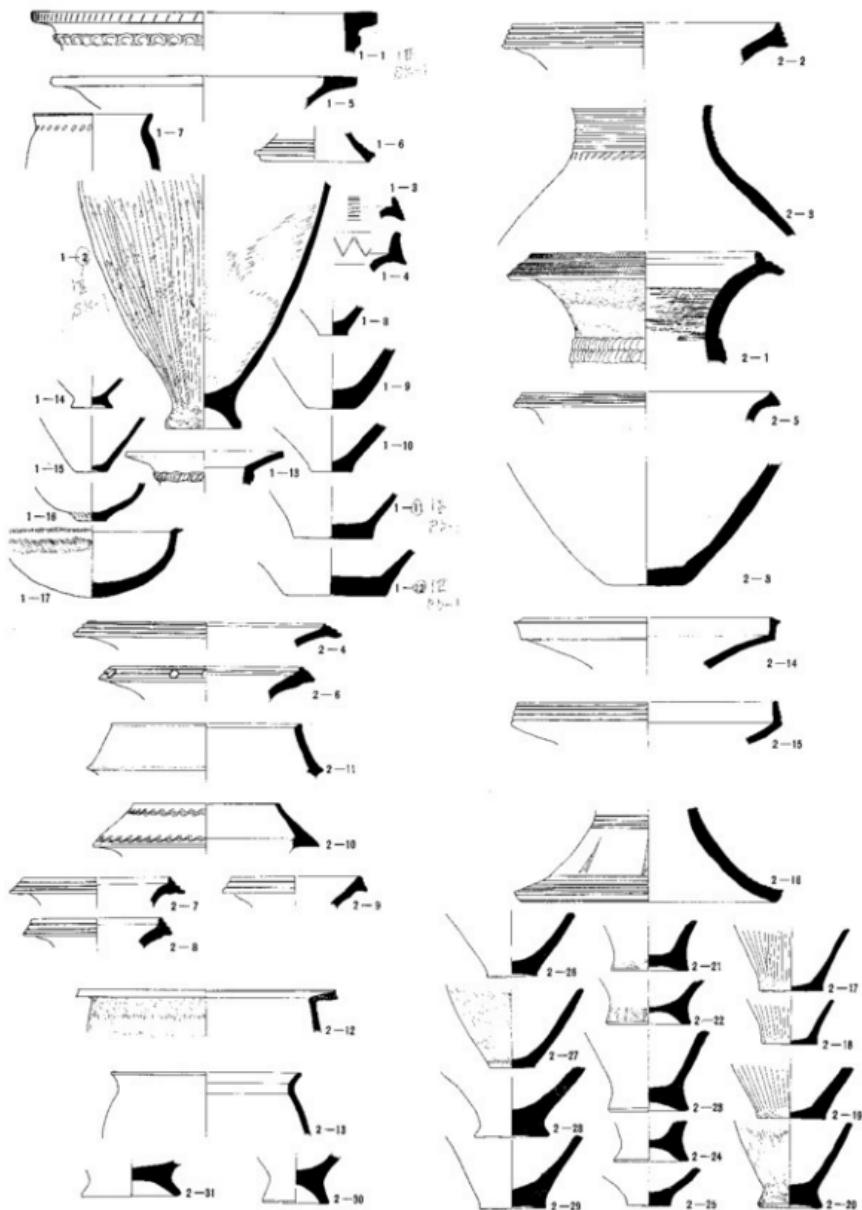
注6 国本健児氏 前出土居窪遺跡に関する論文

注7 得居義治氏 北条市の弥生遺物について（愛媛考古学3）1959

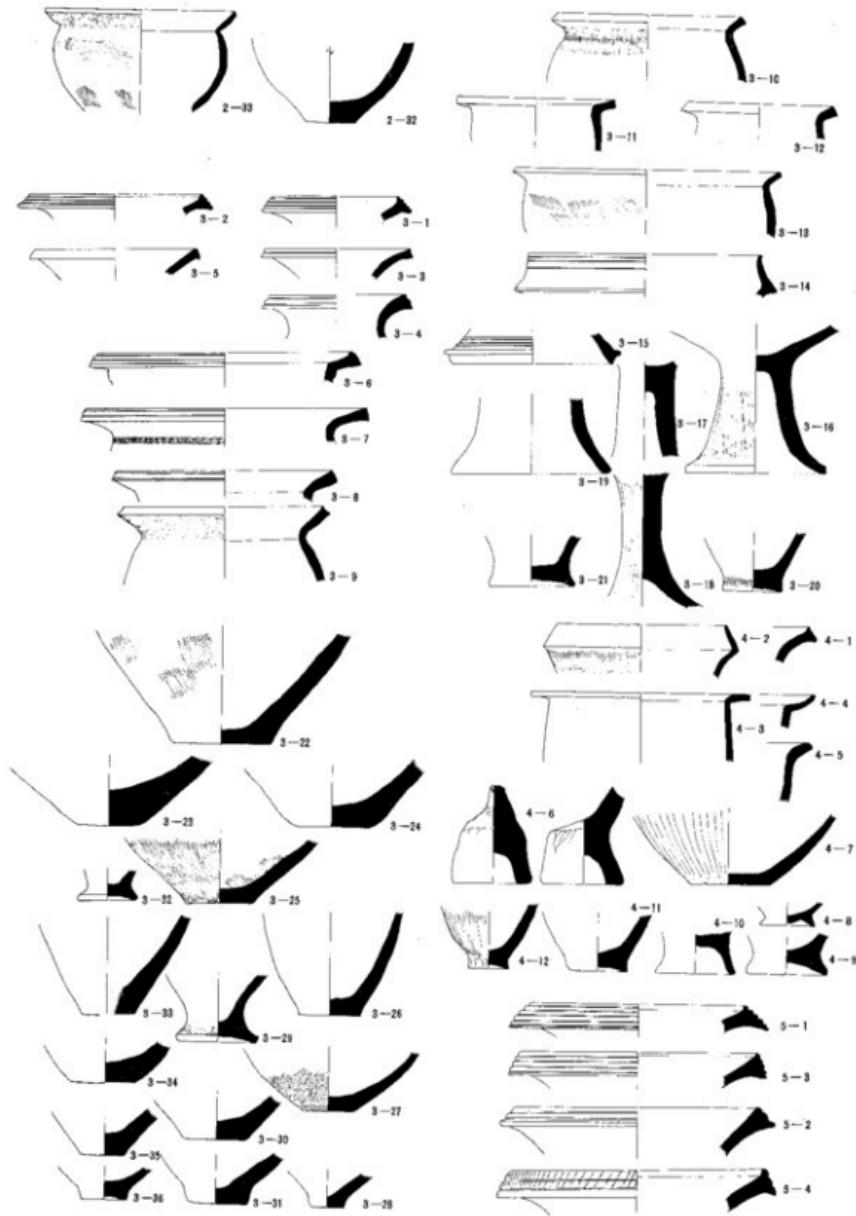
注8 近藤喬一氏 平形銅劍と銅鉢の関係について（古代学17—3）1970

注9 正岡陸夫氏 愛媛県温泉郡中島町の弥生遺物（古代学研究71）1974

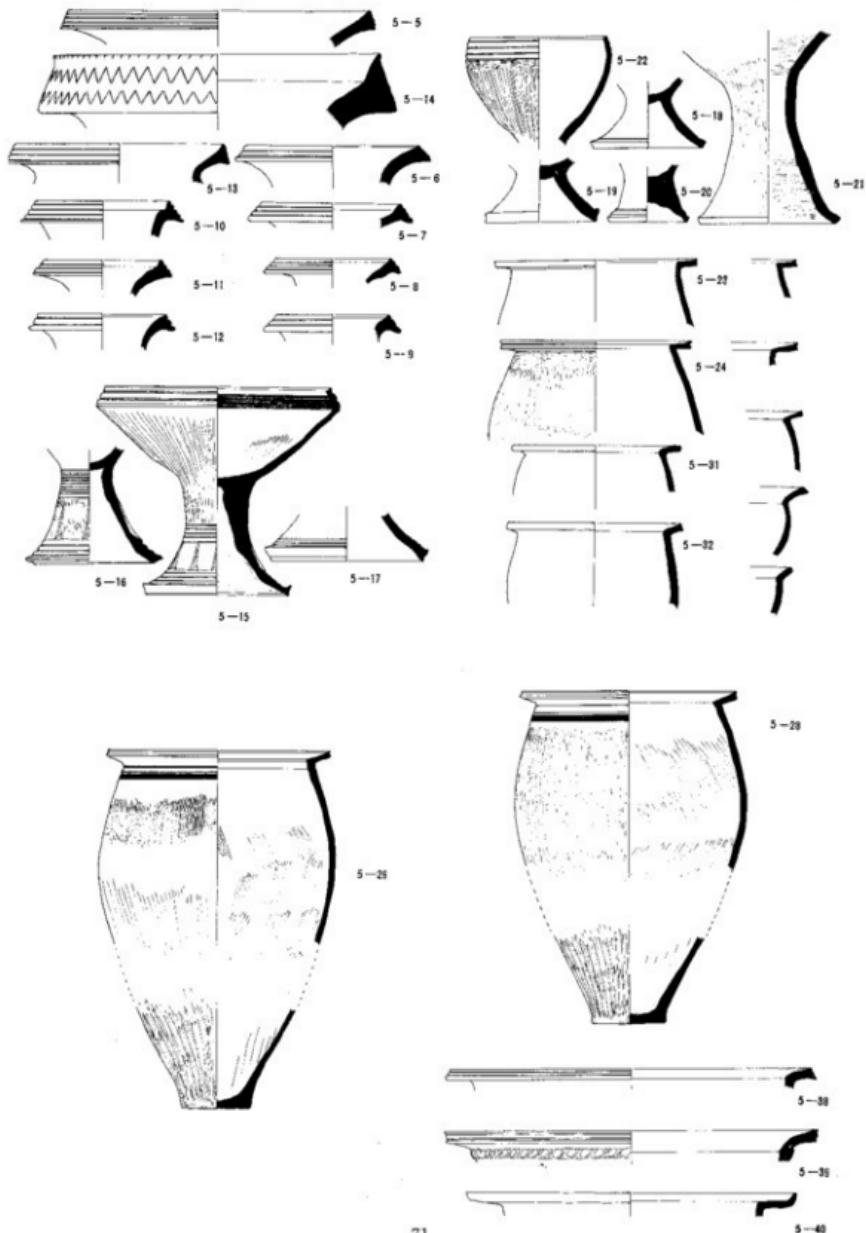
挿図1 1区～2区の出土遺物実測図



插図2 2区～5区の出土遺物実測図



挿図3 5区の出土遺物実測図



挿図4 5区の出土遺物実測図

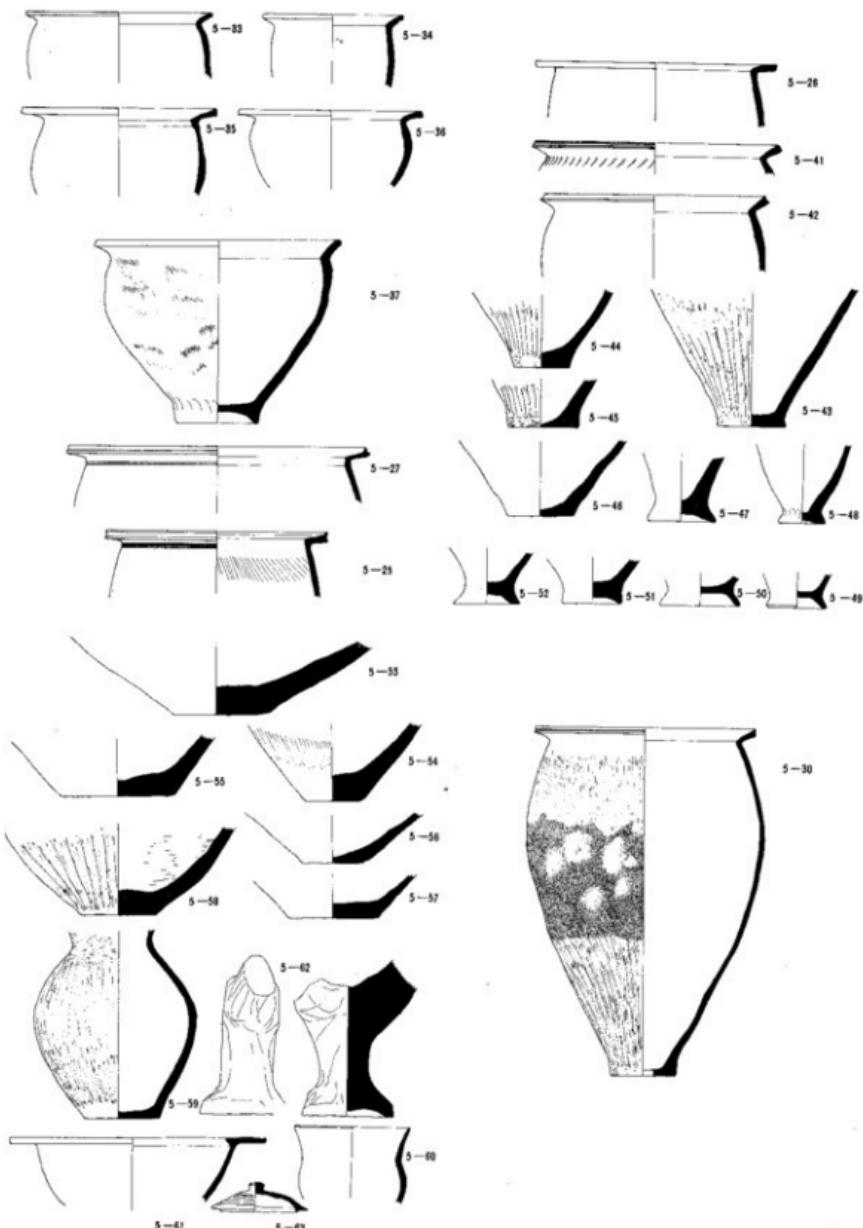
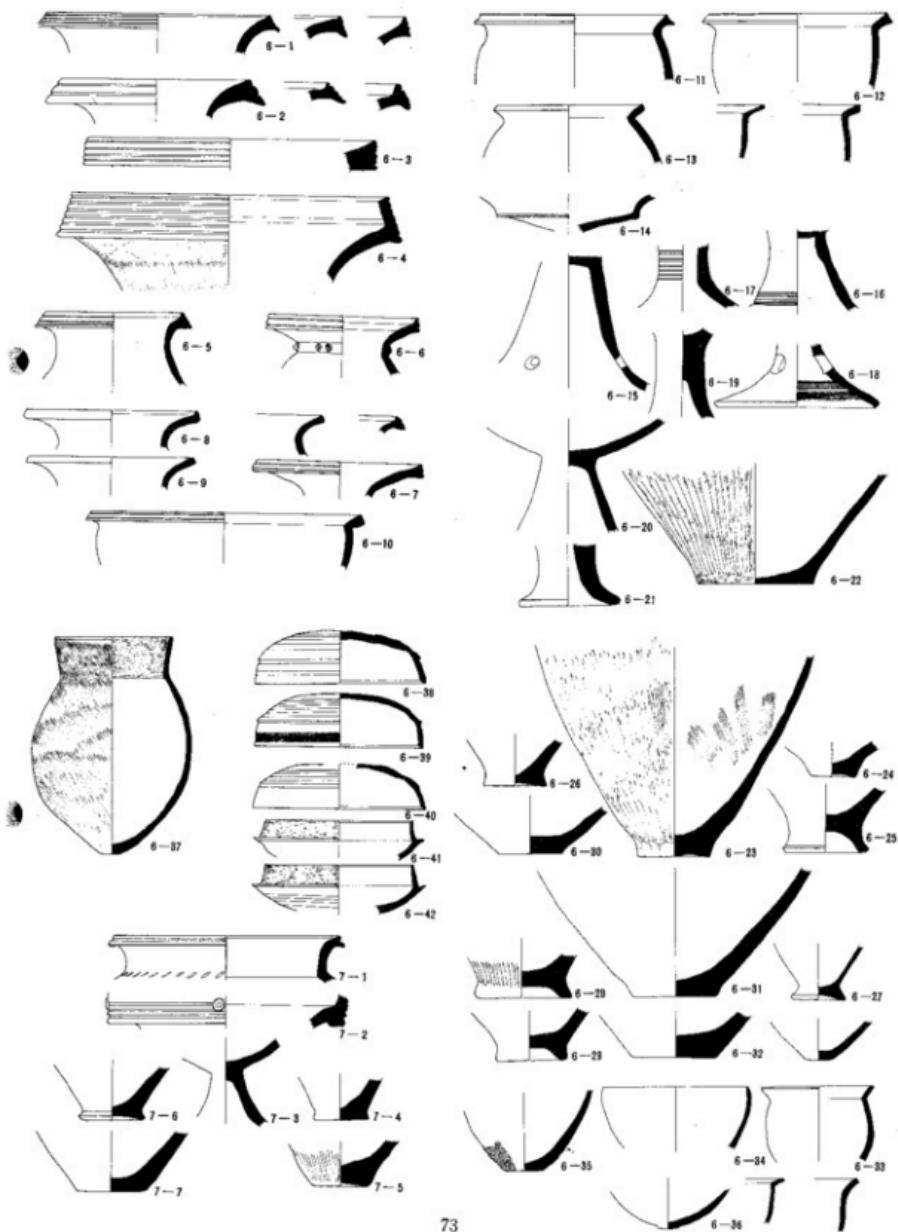
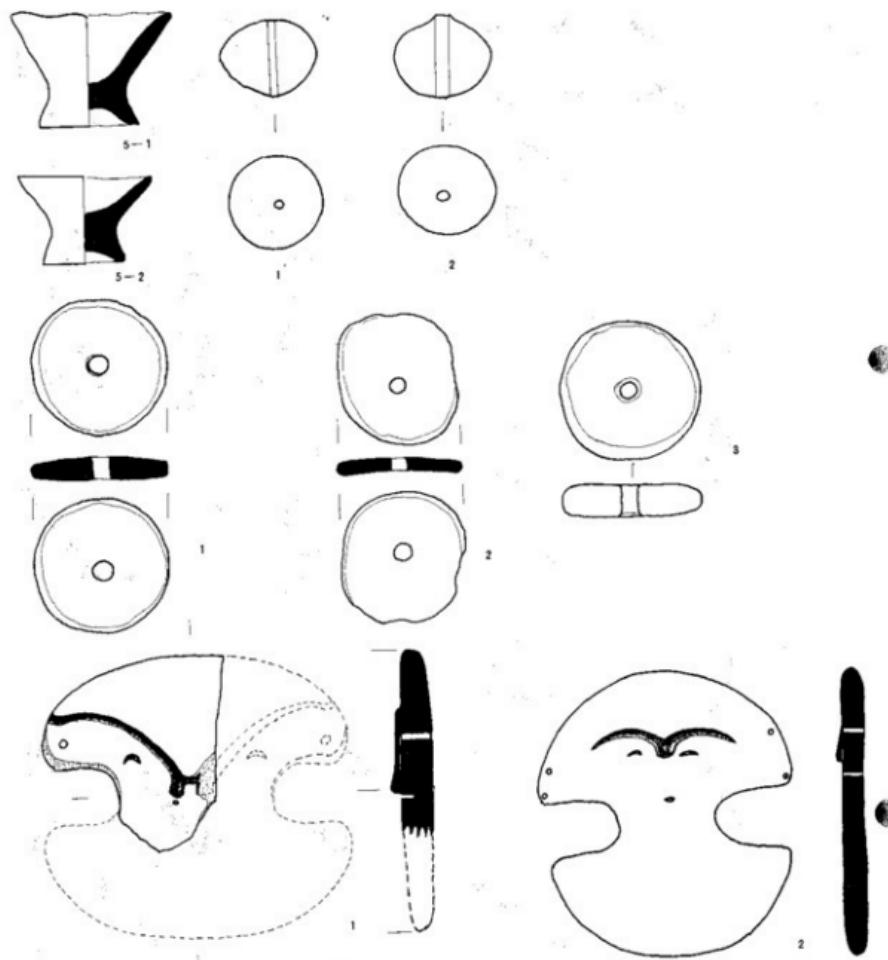


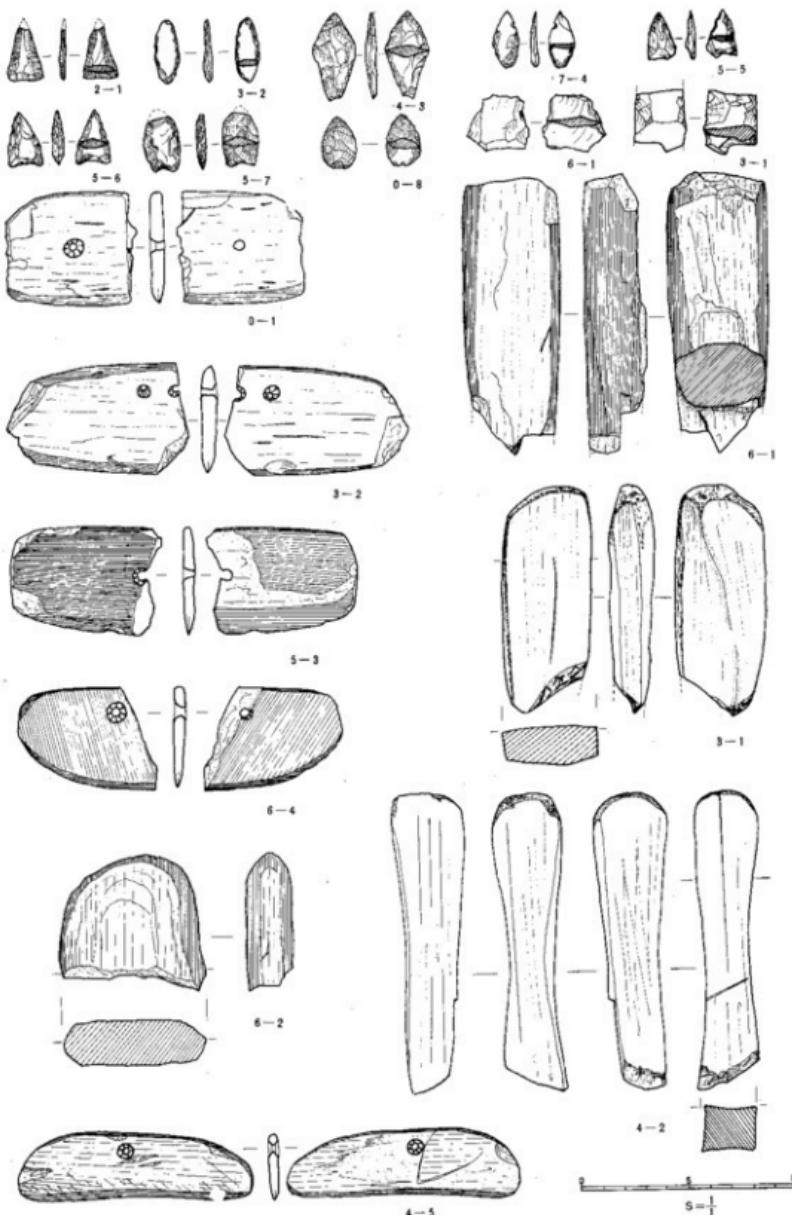
図5 4区、6区の出土遺物実測図



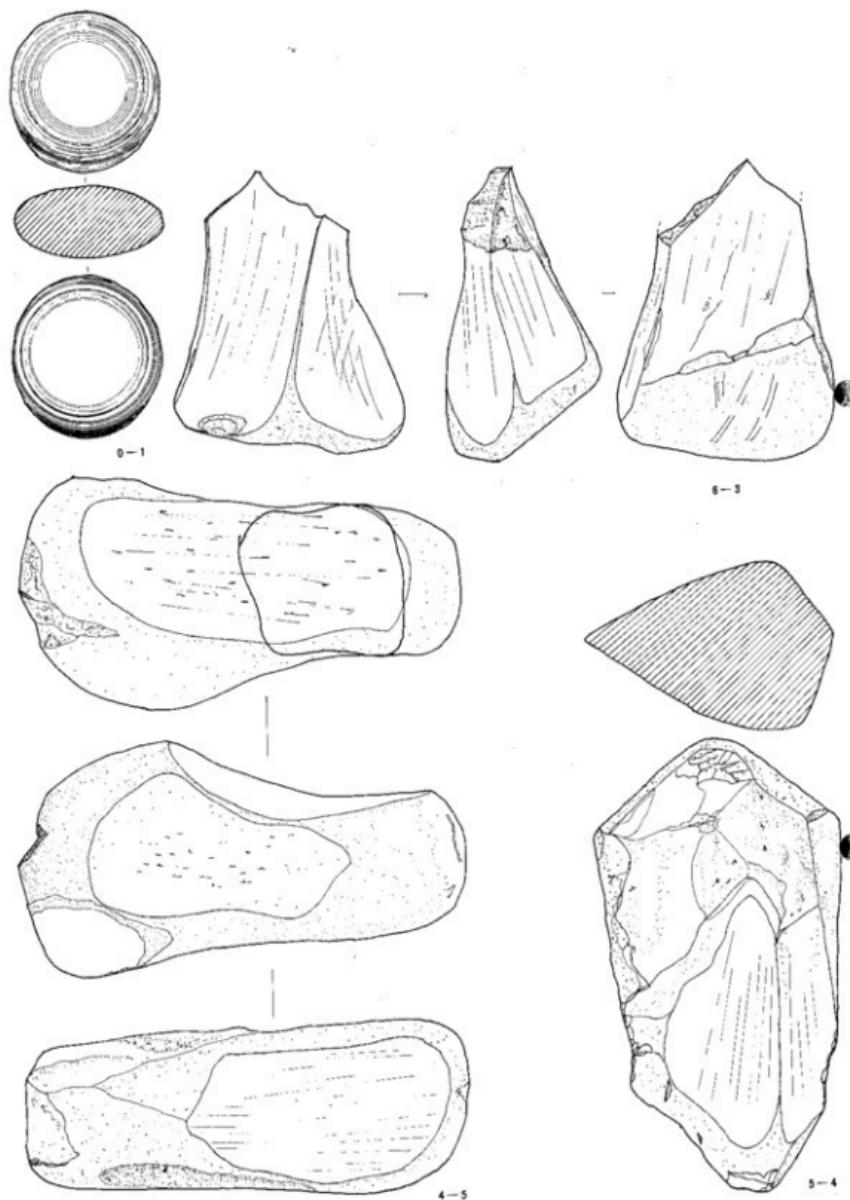
挿図 6 特殊土製品実測図



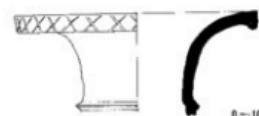
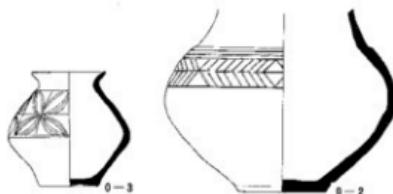
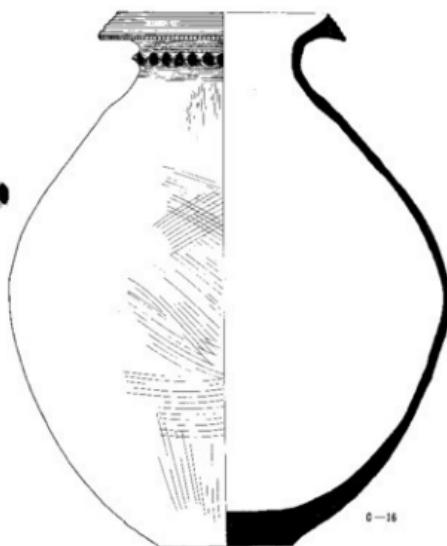
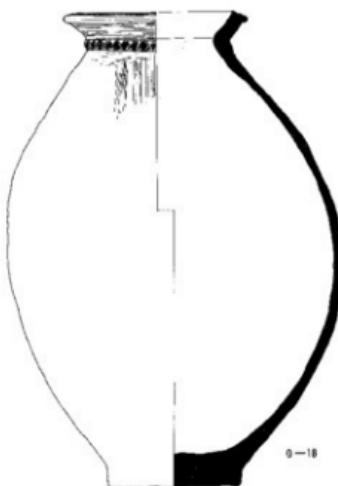
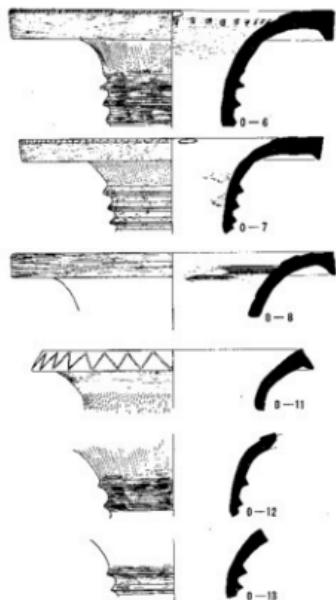
挿図7 石器類実測図



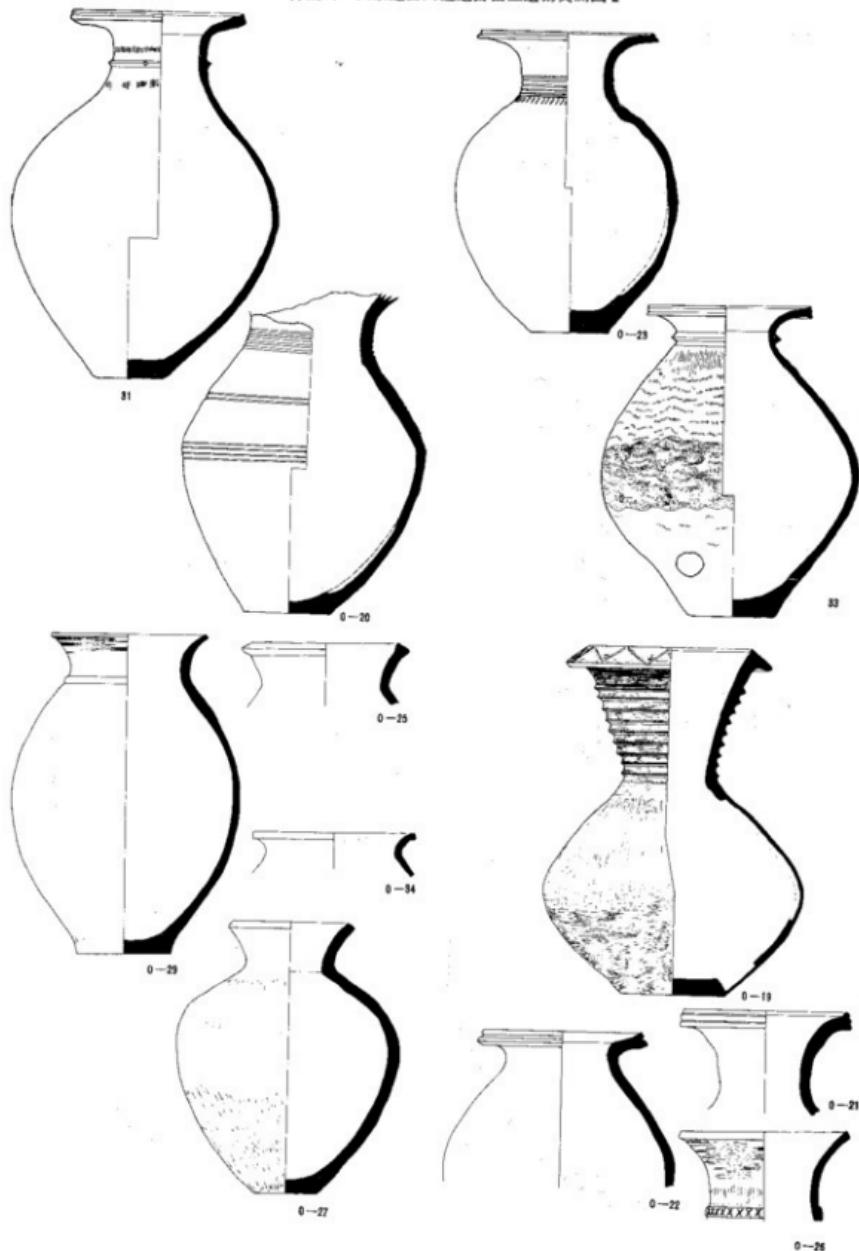
挿図 8 石器類実測図 2



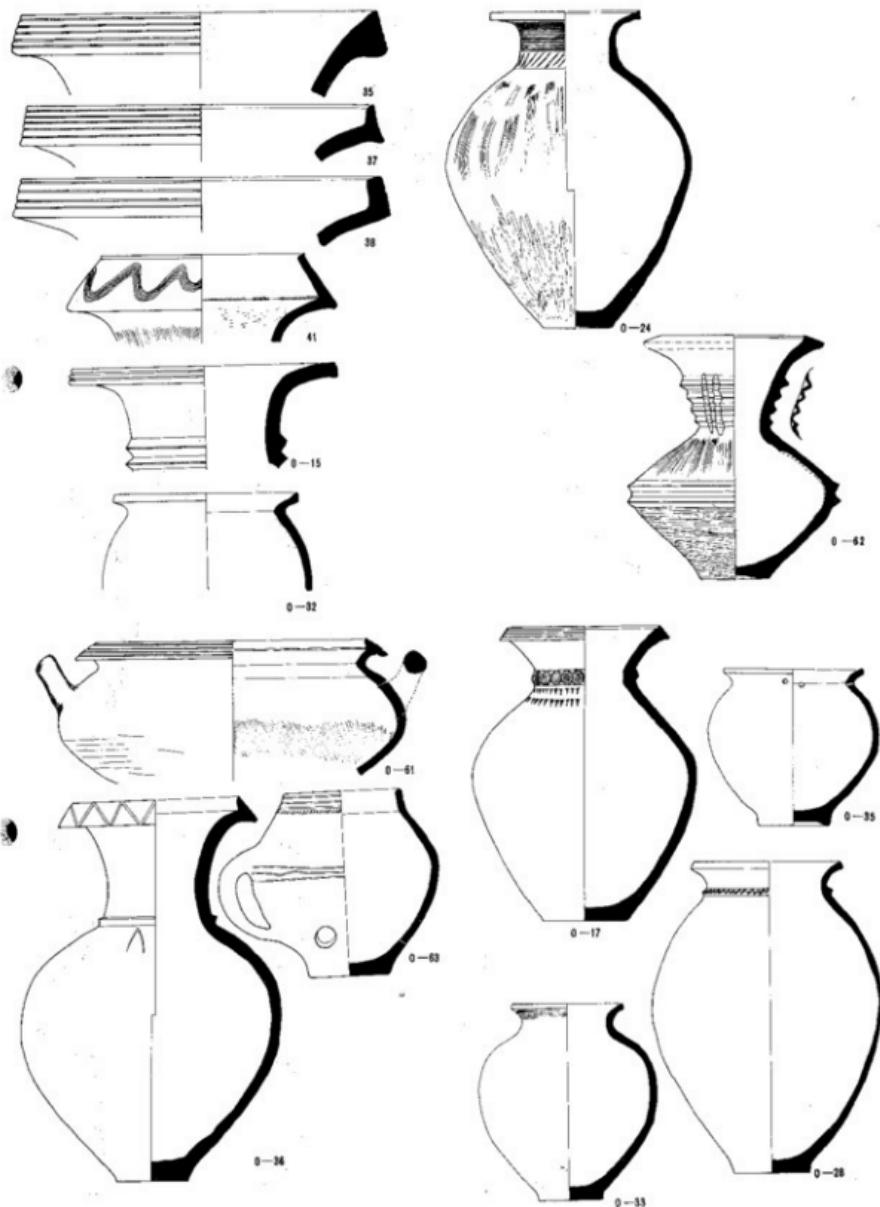
挿図9 文京遺跡周辺遺跡出土遺物実測図1



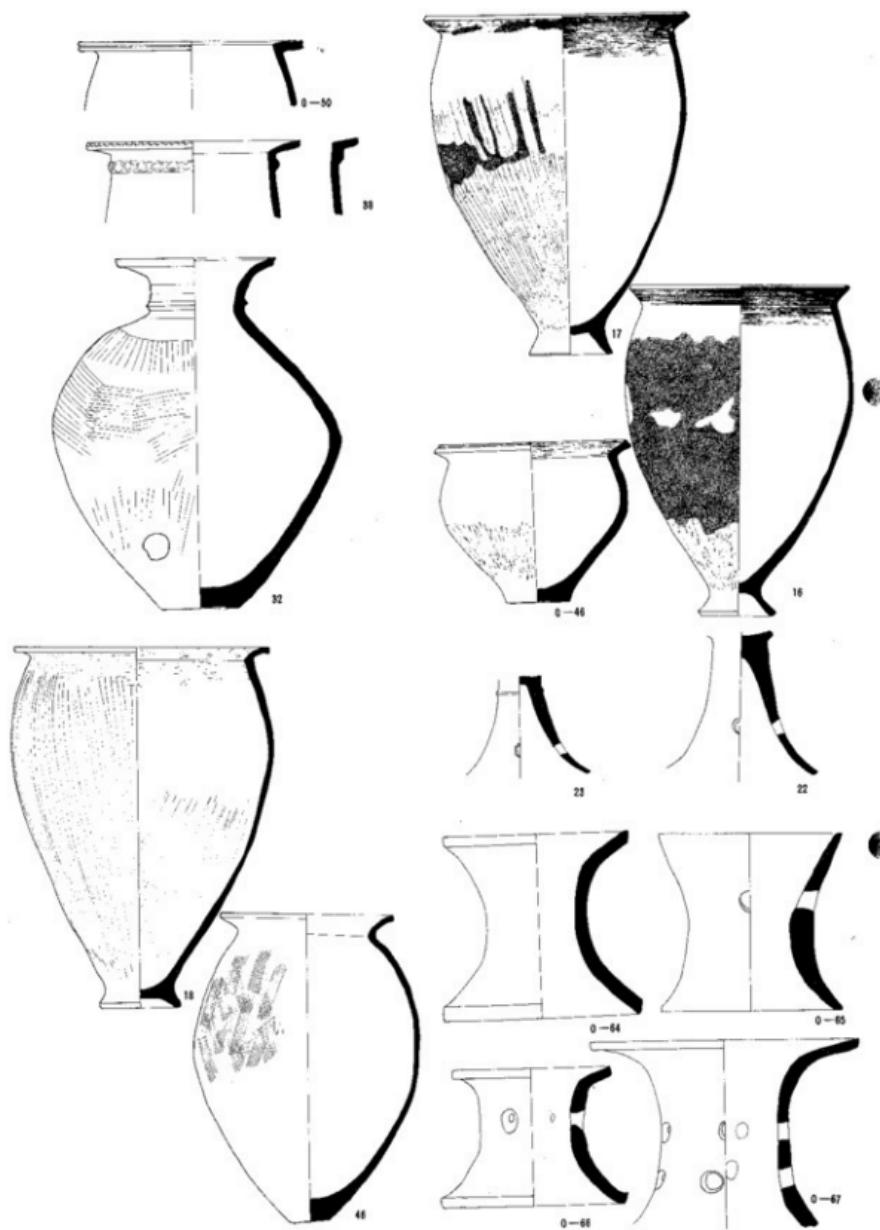
挿図10 文京遺跡周辺遺跡出土遺物実測図 2



挿図11 文京遺跡周辺道路出土遺物実測図 3



插図12 文京遺跡周辺遺跡出土遺物実測図 4



挿図13 文京遺跡周辺遺跡出土遺物実測図 5

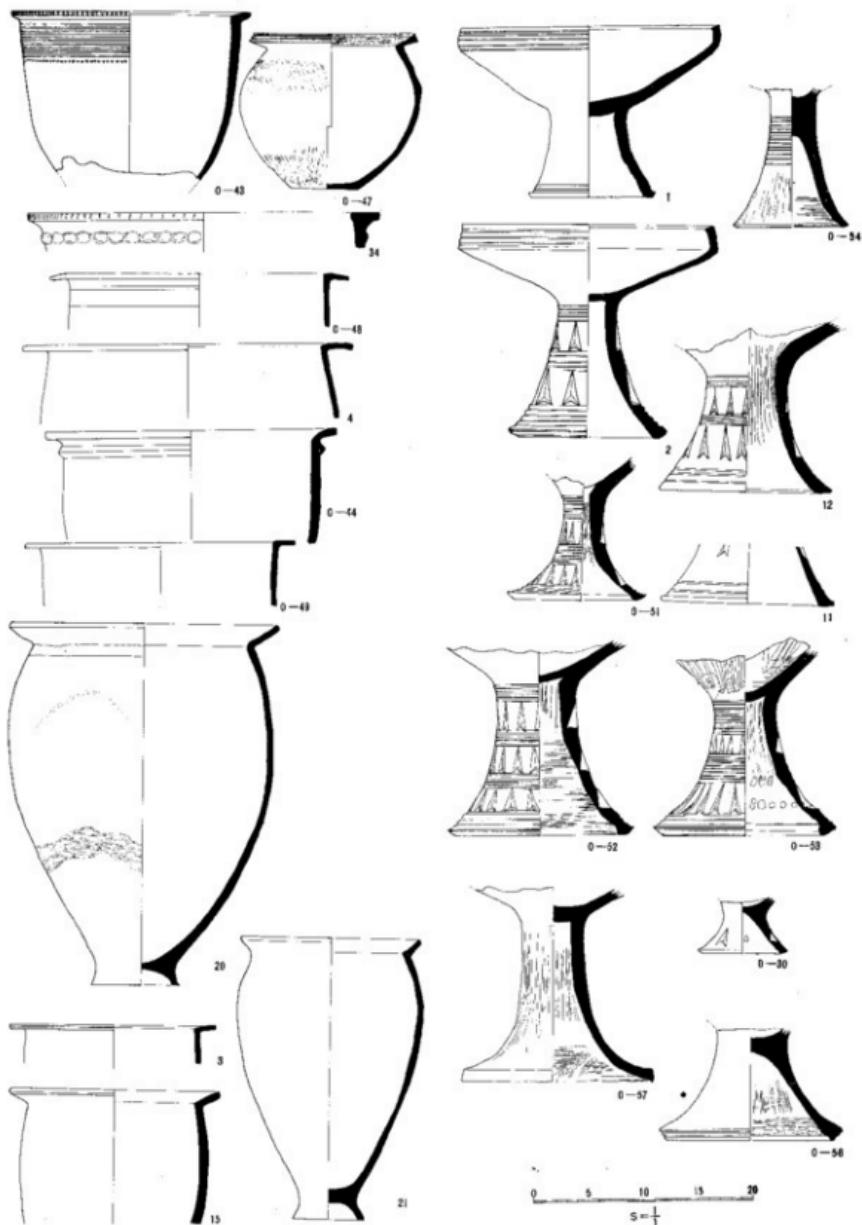
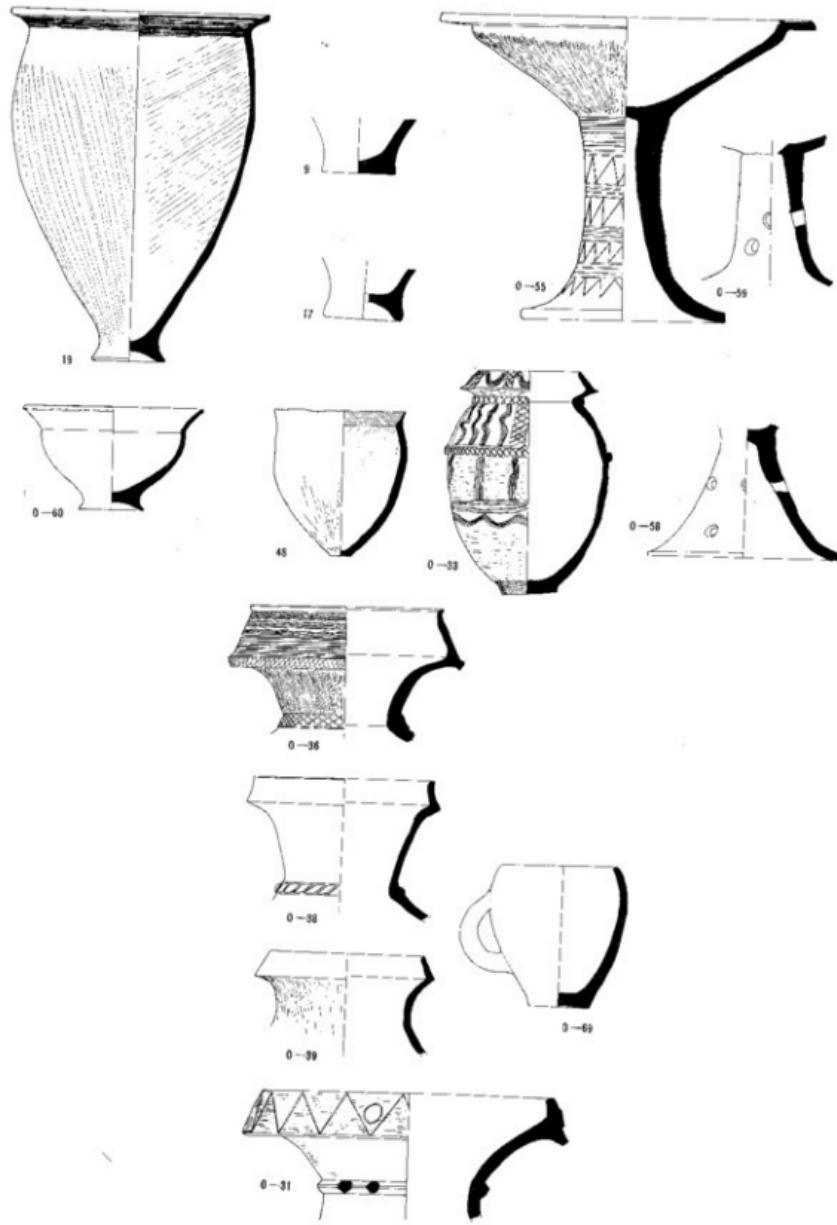
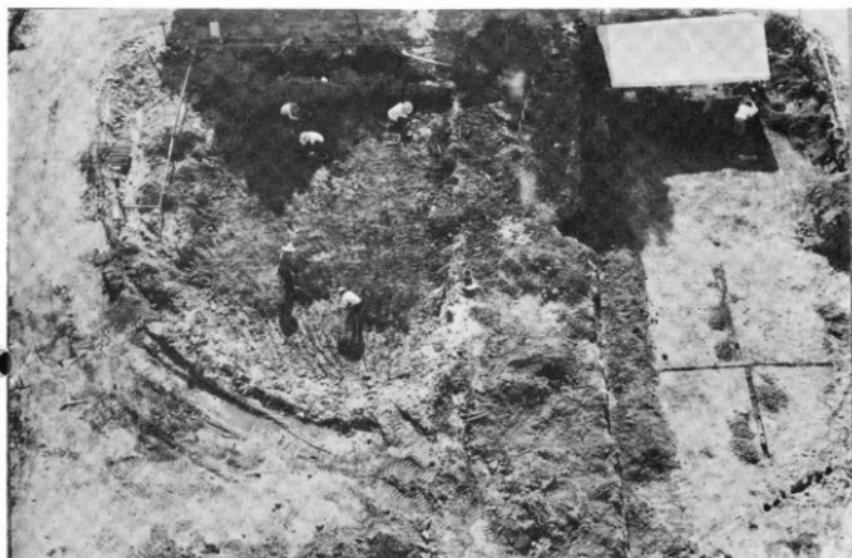


插图14 文京遺跡周辺遺跡出土遺物実測図 6



図版第1 文京遺跡全景



東より撮影



南西より撮影

図版第2 造構の発掘状況1



I区 PD-1

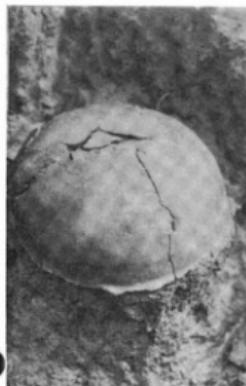


5区 PD-5



6区 南西より撮影

図版第3 遺構の発掘状況 2



左 PD—I の遺物  
右 PD—I の遺構



4区 PD—2, 3



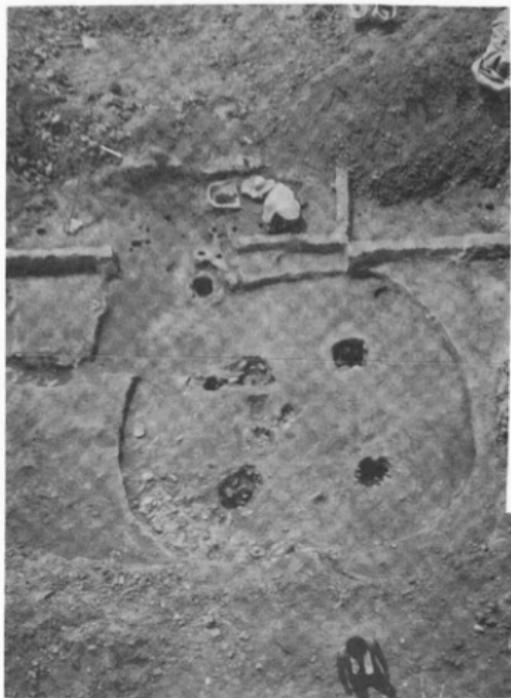
4区 B溝, C溝



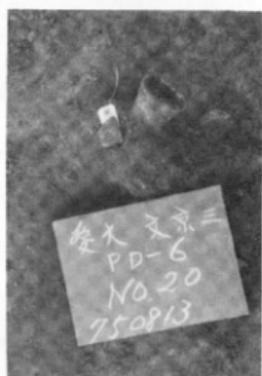
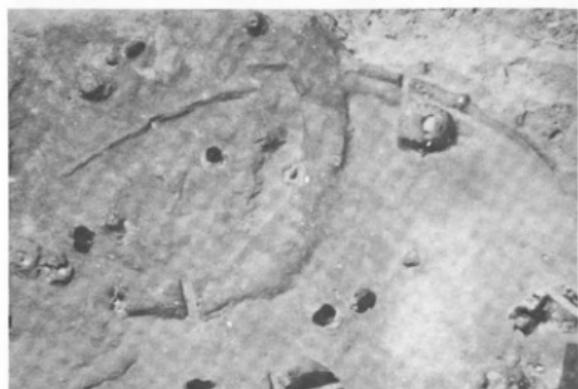
4区のピット



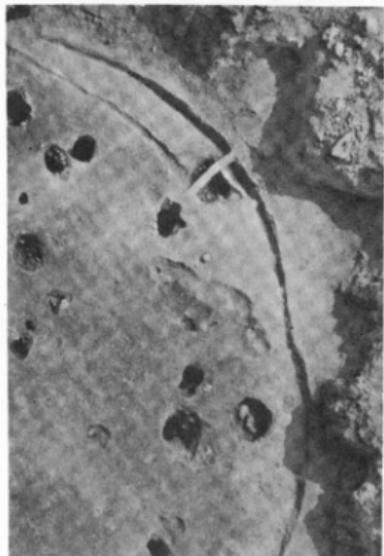
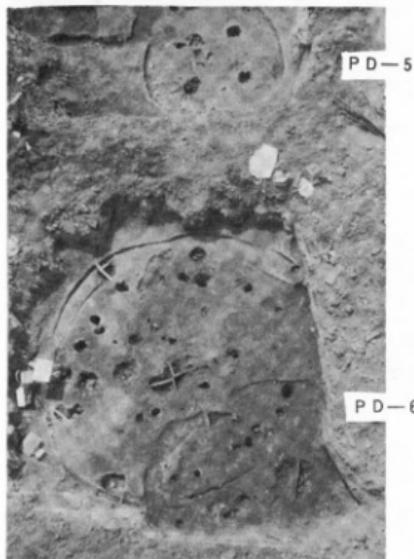
5区 土塹 3



5区 PD—5



左上 6区 PD-6, 7, 8  
右上 " " P I  
左中 " " PD-6  
右中 " " PD-6 高坏  
左下 " " " P 4





PD—I 碗



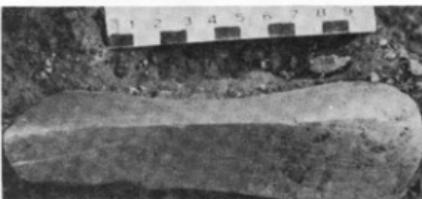
4区 土器底部



4区 壺型土器、砾石



PD—5. 土器 3



4区 砕石

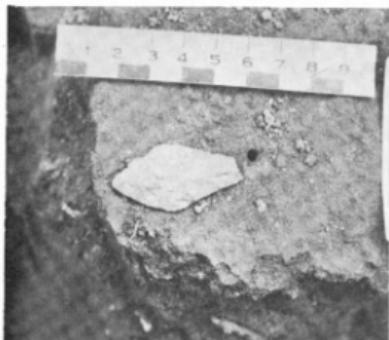


P D—5 土塗—3 内の遺物

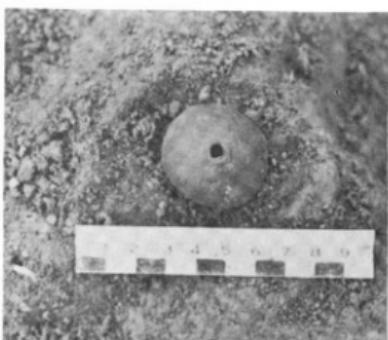


P D—5 石錐

左下 上図の拡大図



石錠



土製丸玉



上, 中  
PD-5 の出土遺物



石包丁



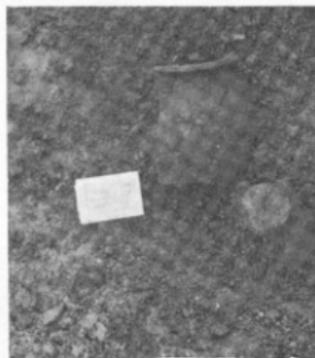
壺型土器



石包丁

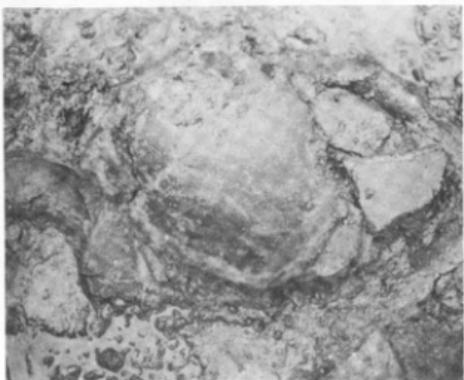


壺型土器

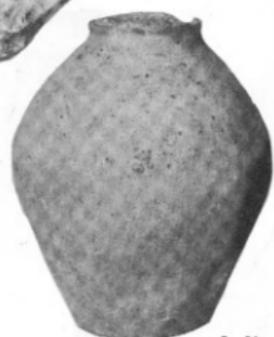


壺型土器

P D-6 の出土遺物



壺型土器



5-59



1-2



5-29



5-29



5-30



5-15



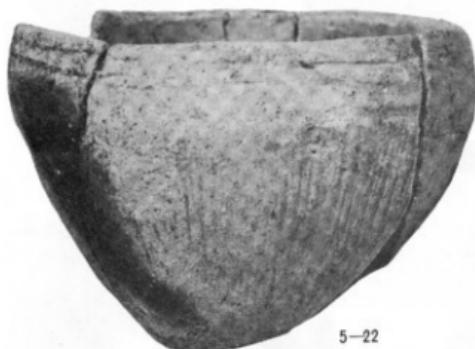
1-7



5-16



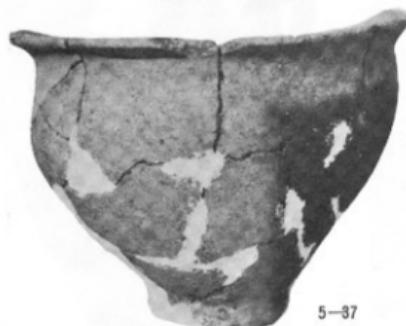
5-1



5-22



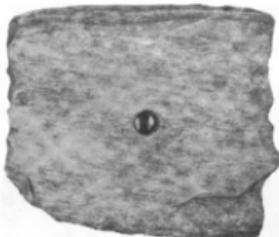
5-2



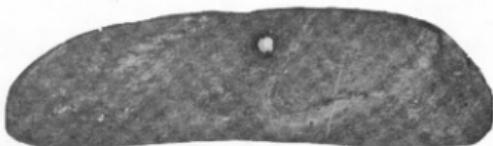
5-37



6-87



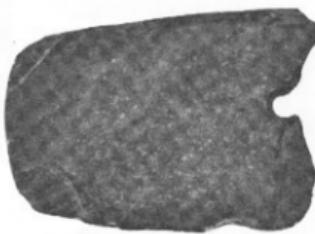
0-1



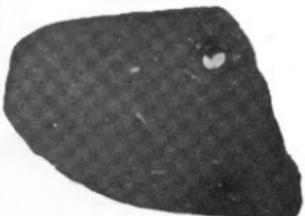
4-5



5-5



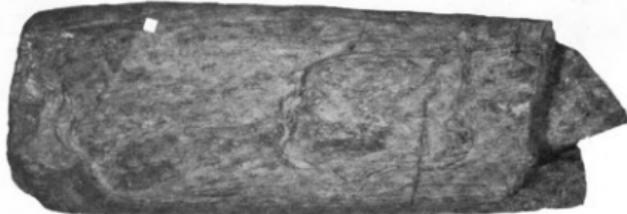
5-3



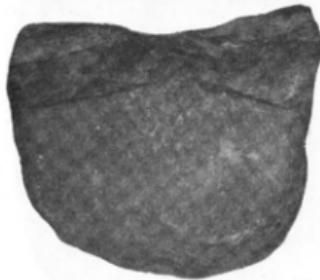
6-4



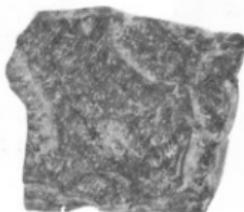
5-6



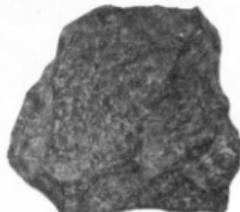
6-1



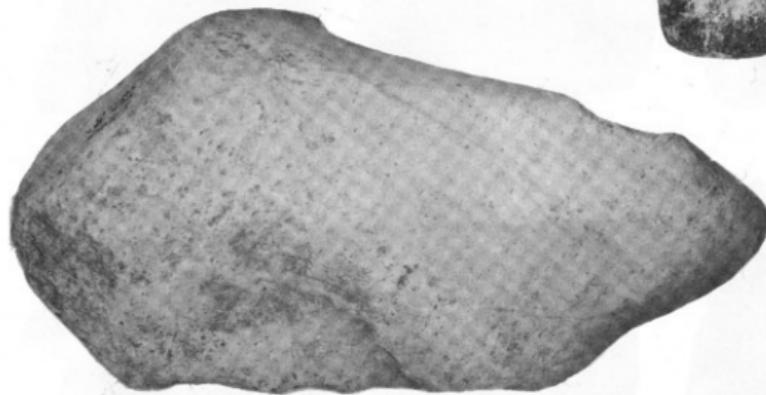
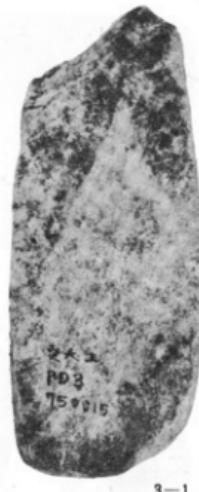
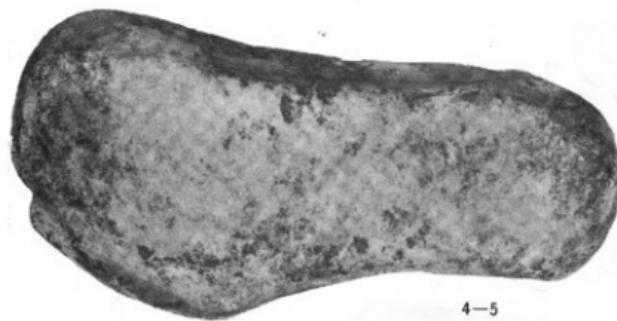
6-2



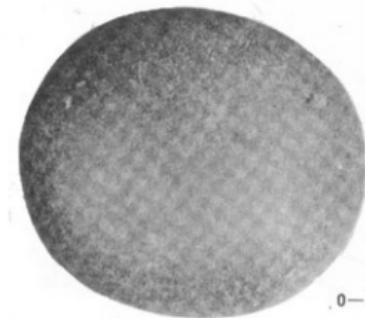
3-1



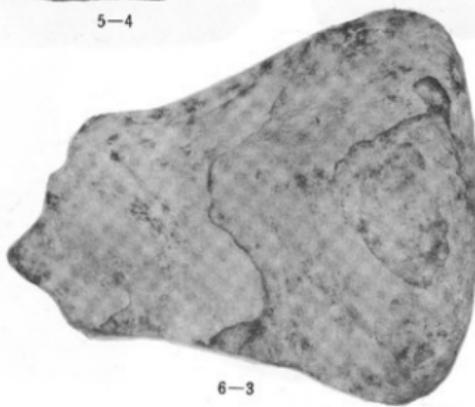
6-1



5-4



0-1



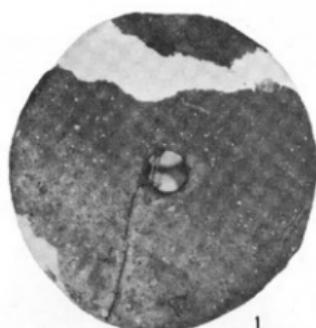
6-3



1



2



1



1



2

図版第16 文京遺跡周辺遺跡出土遺物 1

〔東雲、長者平出土〕



32



33



18



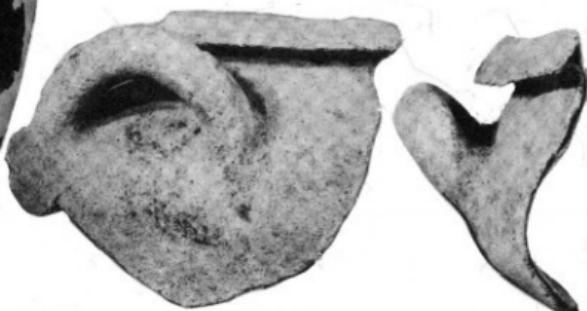
17

図版第17 文京遺跡周辺遺跡出土遺物 2

〔東雲、祝谷地区出土〕



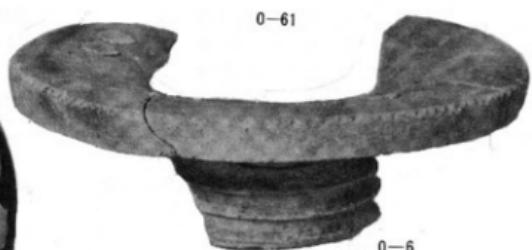
19



0-61



47



0-6



0-2

## 松山市文化財調査報告書

1	三島神社古墳	昭和47年（絶版）
2	天山・桜谷古墳	昭和48年（〃）
3	長隆寺廃寺跡	昭和49年
4	古照遺跡	〃
5	釜ノ口遺跡	〃
6	かいなご・松ヶ谷古墳	昭和50年
7	国道バイパス概報	〃
8	岩古山古墳	〃
9	御産所11号墳・勿那山古墳 久万ノ台古墳	昭和51年
10	古照遺跡II	〃
11	文京遺跡—弥生式土器編年図付	〃
12	天山天王森遺跡—弥生終末期編年図付（仮称）	近刊
13	国道バイパス報告書—土師・須恵器編年図付（〃）	〃

松山市文化財調査報告書 第11集

文京遺跡—弥生式土器編年図付

昭和51年3月31日

編集 松山市教育委員会  
発行 愛媛大学

〒790 松山市道後樋又10の13  
TEL (0899) 41-7111 (代)

松山市教育委員会  
〒790 松山市二番町四丁目7番地2  
TEL (0899) 48-6600~4

印刷 市青葉図書